

---

# 遊戯王 5 D's - 過去を護る者 -

光星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王5D's - 過去を護る者 -

### 【Nコード】

N7361L

### 【作者名】

光星

### 【あらすじ】

謎の声の導きにより、シグナーと呼ばれるデュエリスト達が伝説のデュエリストのいた時代へと降り立つ。

過去に訪れる危機とは一体

## 序章・過去からのメッセージ

溢れんばかりの光の中。

周りに障害物は何も無く、ただ真っ白な世界。

そんな世界に一人の青年が立っていた。

紺のジャケットに特徴的な髪型をしており、その形は蟹に見えなくもない。

「俺は一体……」

青年は状況を理解できておらず、ただ茫然としている。  
そんな青年の頭に、一つの若い男性のような声が響く。

「不動遊星……」

「誰だ？」

聞き覚えのない声に不動遊星と呼ばれた青年が辺りを見回す。

「見渡しても俺は見えない。俺の体はこの世に存在していないんだ」

「……？」

「しかし、最期の力を使って君達に話し掛けている」

「君……達？」

「そう。君達にお願いがある」

謎の声はそう言うと、少しの静寂ののち、こう言った。

「二つの過去を救ってほしい」

突然、依頼された内容に遊星は困惑する。

「過去……？」

「そうだ。この世界は幾度と滅亡の危機を迎えてきた。だが、数名のデュエリストによりその危機を何度も乗り越えた……」

『声』は一呼吸おき、こう続ける。

「しかし、その数々の危機を過去を変えることで成功させ、未来を破滅に導こうとしている者がいる……」

「イリアステルか！？」

「いや、それはまだ分からない……だが、過去の伝説のデュエリストの命が危ない事は明白だ。だから頼む……相棒や十代を……」

その言葉を聞くと同時に遊星の意識は途絶えた。

## 1章 - 1・始まる世界の崩壊

「!!」

ガバツとソファアから跳び起き、遊星が目を覚ました。その光景はいつもと変わらない遊星が住んでいるガレージだった。

「夢だったのか……？」

ガレージの中は電灯が消してあったのだが、窓から日が射しており、電灯を付けているのと変わらないくらい明るくなっていた。遊星が時計を見ると、短針が10時を指している。

「もう昼か……」

ソファアから遊星は身を起こすと、パソコンの電源を入れた。

「おー、遊星起きてたのか」

突然聞こえた声に驚きながら、後ろを振り返る。

そこにはオレンジの髪をヘアバンドで逆立て、顔中に黄色のラインがはいっている少年　　クロウ・ホーガンが立っていた。

「ああ、今起きたところだ」

「そうか。ところでよ、遊星」

「なんだ？」

「話は変わるんだが……昨日の妙な夢見なかったか？」  
「！」

遊星は昨晚見た夢を思い出す。

男の声が直接頭に響き、“過去を救ってほしい”と頼まれたあの夢を。

「クロウも見たのか」

「やっぱり遊星もか……いや、そんなことありえねえと思ったんだが、どうしても気になってよ……」

「俺もあの夢が、現実のような気がしてならないんだ」

あまりに真実味を帯びた夢に、信じざるを得ないと遊星は感じた。

ガチャ！！

「「遊星！」」

ドアが開く音と共に入ってきたのは、緑の髪をウサギの耳のように両側で纏めた8〜9歳くらいの少女、龍可と外見はウリ二つだが、髪を後ろで纏めた少年、龍亜だ。

「遊星！なんか龍可が変な夢を見たんだって！」

「そうなの……なんか男の人が私に話し掛けてくる感じがしたわ」

「やはりか……どうやらシグナーだけが見る夢らしい」

『それはどういう事だー！』

突然の怒声に遊星達は階段を見ると、そこには金の髪を逆立てた目つきの鋭い男　ジャック・アトラスが立っていた。身長はかなり高く、威圧感がある。

「俺はそんな夢まったく見なかったぞ！」

シグナーが見ているはずの夢をジャックは見えないという。

「単純に忘れただけじゃね？」

「そんな訳なからう！」

「まー、まー、ジャック落ち着きなよ」

今にも口喧嘩を始めそうな二人を見た龍亜は二人の間に入り、ジャックを説得する。

(……何故、ジャックは見えていないんだ？)

「ねえ、遊星？」

遊星が思案顔を浮かべていると、龍可が話し掛けてきた。

「私、あの夢がただの夢じゃ無いような気がするの」

「ああ、俺もそんな気がしていた」

「ねえ、どうにかしてあの夢の真実を調べることは出来ないの？」

「それは」

ボタン！

再びドアの開いた音がガレージに響く。

紅い前髪をドリル型のカラーで巻いた、赤いドレスを着た女性

十六夜アキが息を切らせながら入ってきた。

「ゆ……遊星……！」

「どうしたんだアキ？」

「街の人達が……！」

「街？」

十六夜の言葉に、遊星達はガレージの外に出る。

するとそこに広がる光景は悲惨なモノだった。  
あらゆる建物が崩れ、空は暗雲に包まれており、人々は倒れ、遊星達がいたガレージも全員が出た瞬間、崩れ去った。

「こ、これは……!」

「悲惨な状況だぜ……」

「一体、何が起きているというのだ!」

「人々が……」

「倒れていく……!」

「私が遊星のガレージに向かう途中に、周りの建物が崩れて……」  
遊星はあの夢で男が言っていた言葉を思い出す。

「過去を変え、世界の危機を成功させる……」

「それじゃあ、これが滅亡した世界だって言うのかよ!？」

「分からない……だが、過去が変えられたんだ。このような崩壊じやない  
消滅だ」

「……!？」

過去が変えられたためにこの世界とは違う未来が出来てしまい、運命の軸はその未来へと向けられる。ならば今、遊星達がいるこの未来は存在しない事となり、消滅の一途を辿るだろう。

（そんなことはさせない……だが、どうすれば……!）

すると、崩れ行く遊星達の街に2台のへりが近づいてくる。

「見て遊星!へりだわ!」

その2台のへりは遊星達の前に着陸し、扉が開く。  
その中から出てきたのは、青い髪に青のスーツを着た女性だった。



「お前は……！」

「御影さん！」

御影と呼ばれた女性は、上半身をへりから乗り出し、「皆さん早く乗ってください！」と搭乗を促した。

「行くぞ！」

遊星、ジャック、クロウ、龍亜、龍可、十六夜の六人は2台のへりに別れて乗った。

## 1章・2・過去へ導く光

遊星達は崩壊していくネオドミノシティの上空にいた。

「どういつ事なんだ！」

上空にいる2台のヘリのうち、1台からジャックの怒声が響く。

「アトラス様、落ち着いてください。この状況に関しての原因は不明なんです……調査を行うにしても、治安維持局のメインコンピューターは破損してしまい……」

「チッ……」

（やはり、過去で何かが……）

「……遊星……」

十六夜が横に座っている遊星を呼ぶ。

「どうしたんだアキ？」

遊星を呼ぶ十六夜の言葉には震えがあり、顔には焦燥の様子が見えた。

「……パパとママはどうなってしまったの？」

「……分からない」

「……」

「……だが、救ってみせる！みんなを、この街を、この世界を！」

「遊星……」

遊星は何かを覚悟したかのように、御影にこう告げる。

「御影さん、旧モーメントへ向かってくれ」

「まだここは崩壊していないようだ」

「まるで俺達を待ってたかのようにだぜ……」

旧モーメントに着いた遊星達。

そこは崩壊には巻き込まれておらず、ぽつかりと開いた巨大隕石並の穴は遊星達を待っていたかのようにだった。

「遊星、何故旧モーメントに？」

「いや、今起きている現象は18年前に起きた『ゼロ・リバーズ』に似ているからだ」

「ゼロ・リバーズ……」

ゼロ・リバーズとは、遊星の父が開発したモーメントが逆回転現象を起こし、大勢の人々が犠牲になった悲惨な事件で、遊星は父の罪と思いながら、その罪を背負い、生きている。

「行こう」

少し古びた階段を使い、穴へと入っていく。

最期まで降りると、前に遊星がルドガーとデュエルした場所へと着いた。

「黄泉への……入口……」

遊星はあの虹色に輝く光の中へ入った時の事を思い出していた。様

々な亡者が遊星を黄泉へと引き込もうとしてきたあの悪夢を。

「遊星、こんなところに来て何をしようというのだ」

「……『赤き龍』の力を使って、あの中へ飛び込む」

「「なっ……！」」

「正気なの！？遊星！」

「ああ」

「あの中へ入ったら死んじゃうんじゃ……」

「だからこそ赤き龍の力を使う」

場が沈黙の空気に包まれる。

無理もない。今、遊星がしようとしていることは、高層ビルの屋上から飛び降りると同等なのだから。

「……………ま、遊星がそういつてるならいくらでも付き合っぜ」

クロウが口を開く。

「ああ、こいつの頑固っぷりは今に始まったことではないからな」

続いてのジャックも、遊星の意見に賛成のようだ。

「クロウ、ジャック……！」

「で、お前らはどうするんだ？」

「行くわ……！」

「私たちも！」

「俺も行く！」

「では、私も行かせていただきます！」

十六夜、龍可だけでなく、龍亜や御影も賛成という意志を取った。

「行くぞ!!」

遊星達7人は虹色の光へと飛び込む。過去を救うために……

『……私も付いていっちゃうんだから』

謎の人影も少し遅れて飛び込んだのだった。

## 2章・1・バトルシティに忍び寄る危機

『ゲールズ』襲来！

「っ…………！」

遊星は意識を取り戻し、目を開ける。

まだ視界がぼんやりとしているが、どこかの路地裏らしい。

「ここは…………？」

「過去の童実野町みたいよ」

背後からした声に遊星は振り返ると、そこには十六夜が立っていた。十六夜の手には新聞が握られており、十六夜が遊星に手渡すと、遊星は新聞を広げる。

新聞には『最強のデュエリスト決定戦！バトルシティ開催！！』と大きく一面を飾っていた。

「『バトルシティ開催！！』か…………確かに俺達は過去に来たらしい」「一通り、近くを見てみたけど…………ここはあまり人が通らないみたい」

「そうか…………そういえば、ジャックやクロウ達はどうした？」

「分からないわ…………目が覚めたら、私達しかいなかったから…………」

「そうか…………」

遊星は壁に手をつきながら立ち上がり、こう続ける。

「とりあえず、辺りを見回ろう。みんなの情報があるかもしれない」

「ええ、分かったわ」

遊星と十六夜は裏路地を抜け、ほとんどの店が閉じている商店街を

歩く。

「確かに人が全然いないな」

「何かあったのかしら？」

先ほど十六夜の言った通り、商店街には人がまったくと言っていいほどいない。まるで何かに襲撃された後のようだ。

その人通りのない商店街をしばらく歩いていると、一軒のカードショップが見えてきた。

少し暗いが、電気はついている。

あそこになら人がいると踏んだ遊星はカードショップを訪れた。店内に入ると、カウンター越しに一人の男性が立っていた。

「おや、いらつしやい……」

「ここらへんで人を見なかったか？」

「いや、知らないね……最近、ここは『狩ら』れたばかりだからね」

「狩られた？」

「今日バトルシティが開催されただろ？」

「あ、ああ……」

「そのバトルシティを嗅ぎ付けて、レアカードを強奪する集団『グールズ』が現れてね……この地域も奴らに……」

「あんたは襲われなかったのか？」

「いや、実はね……私もその一員だよ」

「……」

店員の男は近くにあったデュエルディスクで、遊星の頭部を殴り付けた。

が、間一髪のところまで遊星はそれをかわし、少し距離を取る。

「遊星！大丈夫！？」

「ああ、大丈夫だ……！」

「おやおや、残念だねえ……せつかく良さそうなカードを持ってる  
と思ったのにねえ」

男は遊星を殴り付けたデュエルディスクを左腕にはめ、デッキホル  
ダーにデッキを入れた。

「こうなつたら、バトルシティらしくデュエルで奪い取るしかない  
じゃないか」

「くっ……」

遊星もデュエルで相手はしたいが、デュエルディスクがない。Dホ  
ールにつけたままなのだ。

（っ……！どうすれば……！）

「遊星！私のを！」

十六夜の声と共に投げられたデュエルディスクを遊星は受け取り、  
その流れのまま腕に装着した。

「アキ、すまない！」

「いや……素晴らしいコンビネーションですね……！そんな絆を  
見せ付けられたら……壊したくなりましたよ」

「御託はいい……！いくぞ……」

「デュエル……」

「では、私の先行……ドロー！」

店員

LP4000



手札6枚

「私は『三つ首のギドー』を召喚……」

三つ首のギドー

DEF1400

「ターンエンドですよ……」

店員

LP4000

手札5枚

『三つ首のギドー』《守》

「俺のターン！」

遊星

LP4000

手札6枚

「俺は『調律』を発動！このカードは自分のデッキに眠る『シンクロン』と名の付いたモンスターを一体手札に加え、シャッフルした後、デッキの上からカードを一枚墓地へ送る！」

遊星が選択したシンクロンはクイック・シンクロン。

そして、デッキがシャッフルされ、カードが一枚墓地に送られる。

「手札から『クイック・シンクロン』の効果を発動！手札のモンスターを墓地へ送り、このカードを特殊召喚！」

クイック・シンクロン

ATK700

テナガロンハットをかぶった2・5等身の機械ガンマンが遊星の前に現れた。

すると、男が突然大声で笑い始める。

「ハハハハ！レベル5の半上級モンスターのくせに、攻撃力700ですか！いやいや……三つ首のギドーにすら勝てないとは……こりゃハズレですかな？」

男の威嚇ともとれる罵声にも動じず、遊星はデュエルを続ける。

「墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』の効果を発動！場にチューナーが存在するとき、墓地から特殊召喚できる！」

ボルト・ヘッジホッグ

DEF800

「雑魚ばかりを……雑魚を並べて、生け贄召喚でもするおつもりかな？」

「レベル2、『ボルト・ヘッジホッグ』にレベル5『クイック・シンクロン』をチューニング！」

クイック・シンクロンが5つの輪になり、ボルト・ヘッジホッグを包み込む。

「集いし思いが新たな力となる……光差す道となれ！シンクロ召喚！」

「シ……シンクロ召喚だ！？」

「燃え上がれ！『ニトロ・ウォリアー』！！」

ニトロ・ウォリアー

ATK2800

「な、何だ……そのモンスターは……」

「まだ俺はこのターン、召喚していない」

「チッ……」

「『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン

ATK1300

「ジャンク・シンクロンは召喚に成功した時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる！」

ジャンク・シンクロンが左へ手を突き出すと、機械の人間らしきモンスターが現れる。

「現れる！『スピード・ウォリアー』！」

スピード・ウォリアー

DEF400

「そんなモンスター墓地にいなかったはずだ！」

「調律を発動した時、墓地に送られたカードはこのカードだったのさ」

「なん……だと……っ」

焦燥にかられた男は冷や汗を流す。

（遊星……流石だね。あの一枚でレベル2のモンスターを墓地に送  
ってるなんて……）

「デュエルを続けるぞ……俺は場のスピード・ウォリアーをリリー  
スし、『ターレット・ウォリアー』を特殊召喚！」

スピード・ウォリアーが場から消え、両肩に砲台を抱えた石の巨人  
が現れた。

ターレット・ウォリアー

ATK1200

「ターレット・ウォリアーは戦士族モンスターをリリースすること  
で特殊召喚できる。さらにこのカードを特殊召喚するためにリリー  
スした戦士族モンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力を  
アップさせる！」

「ヒッ……！」

ターレット・ウォリアー

ATK1200 2100

「いくぞ！レベル5、ターレット・ウォリアーにレベル3、ジャン  
ク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンは光の輪となり、ターレット・ウォリアーを  
囲む。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます！光差す道となれ！シンク  
ロ召喚！粉碎せよ！『ジャンク・デストロイヤー』……！」

ジャンク・デストロイヤー

ATK 2600

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ジャンク・デストロイヤーはこのカードのシンクロ召喚に使用したチューナー以外のモンスターの数まで、フィールド上のカードを破壊できる！」

「何だと!?」

「ジャンク・デストロイヤー！三つ首のギドーを破壊しろ！タイダル・エナジー！」

三つ首のギドーはジャンク・デストロイヤーが起こした濁流の波により、悲鳴をあげながら消滅した。

「ヒッ……！」

「ジャンク・デストロイヤー！ニトロ・ウォリアー！相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

店員

LP 4000    1400    0

店員の男はその場に倒れ込み、泡を吹いた。

「……カードを強奪するような奴にデュエリストの資格はない」

## 2章・2・闇の組織ゲールズのリーダー

「遊星、やったのね……！」

「ああ……」

いきなり襲い掛かってきた店員を倒した遊星達。

店員は泡を吹きながら、床に倒れている。

「それにしても『ゲールズ』とは一体」

「その質問に答えてあげようか」

「！」

遊星と十六夜が振り返ると、先ほどまで泡を吹いて倒れていた男が、白目をむきながら立っていた。

「どうして……！？さっきまで倒れていたのに……！」

「ああ、すまない。今喋っているのはコイツの意志じゃないんだ」

「どういう事だ！」

「本物の僕は遠い場所にいてね……僕はコイツを操って、声を君達に届けているんだ」

（マインド・コントロールか……！）

「さて、話がそれたね。本題に戻そうか……ゲールズについてだが、コイツが言った通り、レアカードを強奪するグループだ」

「何故、そんなことをするの？」

「まあ、強いて言うなら金のため……かな」

「貴様……！みんなが一枚一枚のカードに、どんな思いを込めているか分からないのか！？」

「……へえ、あのファラオとその器と同じ事を言っただね」

「何っ……！！」

「まあ、金のためって言うのは二の次さ。本当の目的は別のところにある……」

「別のところ……?」

「まあ、君達を知る必要はない。僕も忙しい身でね、今回はここらでさよならさせてもらおうよ」

「待てっ!」

「あ、そうそう。君達の持っている『シンクロモンスター』とやらは面白そうだったね……それも今度、奪いに行くよ。じゃあ、また」

男はそう告げると、まるで魂が抜けたかのように倒れた。

「最低の集団だわ……」

「……グールズ……! 貴様らは俺達の手で倒す!」

「ええ……!」

「マリク様……」

「どうしたリシド」

「武藤遊戯が行動を再開いたしました」

「そうか……それじゃあ、例の『人形』を動かすのでしょうか」

「では引き続き、しもべたちには城之内克也の監視を続行させていただきます」

「ああ、リシド。一人追加しておいてくれ」

「先程の男……ですか」

「ああ……あの『シンクロモンスター』とやらは使えるかもしれないからね」

「わかりました。ではそう伝えておきます」

リシドと呼ばれた黒フードをかぶった男は、静かに暗闇の中へと消

えていった。

（さあ、僕達は神々の戦いを始めようか！ファラオよ！）



### 3章・1・黒き鉄砲玉の目覚め

「いちちつ……！」

遊星達が目を覚ます少し前、クロウはある場所で目を覚ました。

そこにはゴミが散乱しており、クロウには容易に場所が特定できた。

「ゴミの集積場かよ……嫌な場所だぜ」

クロウはひとりブツブツ呟きながら集積場を出る。

ゴミ集積場からしばらく歩くと、どこかの大通りにたどり着いた。  
何かのイベントを行っているのか、人だかりが出来ている。

「なんの祭だ？」

人々を掻き分け、人の少ないのところへ出たかと思うと、クロウが  
予想していたものとは違う光景が広がっていた。

『んにやろう……！超能力だか何だか知らねえが、人の手札を覗き  
見しやがって……！』

『ピピピ……僕が見ている未来に君の勝利はないよ』

今、金髪の青年のライフは2600でフィールドにモンスターはい  
ない。一方、もう一人の何かブツブツ呟いている少年のライフは4  
000で、フィールドには『サイバー・レイダー』が存在している。

（あの金髪のにーちゃん、やべえんじゃねえのか？）

クロウは金髪の青年の心配をしていると、視界の端にビルの陰をう

ろついている黒フードを被った人を見つけた。

（何だ、あいつは……？）

その黒フードの行動が気になるクロウは、こっそり黒フードの後ろに回り込む。

黒フードは一人でブツブツ呟き、誰から見ても怪しい行動をとっている。

『はっ……ただ……城之……見……』

（くそっ……聞こえねえ！）

『はい、……では……捕獲……ます』

（捕獲……！？捕獲って聞こえたぞ！？）

すると、他の路地から黒フードが2人現れ、クロウが見張っている黒フードと合流した。

（間違いなく、さっき俺が見ていたあの人込みの中に、あいつらが誘拐しようとしている人物がいる。それなら……止めねーとな！）

クロウは陰から飛び出し、黒フード達の前に立ち塞がった。

「なんだ貴様は……！」

「鉄砲玉のクロウ様だ！よく覚えときやがれ！」

「何のようだ」

「ちよいとアンタらの会話を聞いてね……」

「何……！」

「誘拐なんてさせやしねーぞ！」

「貴様……！」

クロウはデュエルディスクを構え、黒フードにこう告げる。

「俺とデュエルだ！」

「フツ、我ら『グールズ』に喧嘩を売るとは……身の程知らずめ！」

「はっ、グールズだかゴーグルだかしらねえが、てめえらはぶっ潰してやるぜ！」

### 3章・2・小さき兄の決意

誘拐をしようとする黒フード達を止めるため、一人で立ち向かうクロウ。

だが、そこには焦りの顔は全くなく、むしろ楽しそうな顔をしていた。

「貴様一人で、我ら三人を相手に出来るかな？」

「やってみなくちゃ分からねえぜ？」

「ふん、強がり……」

「強がりかどうかはやってから確かめろ！行くぜ！デューエ

「おお！クロウだ！」

自分と呼ぶ声にクロウは振り向くと、そこには龍亜と龍可が立っていた。

「お前達！？どうしてここに！？」

「エヘヘ、龍可がさ」

「龍亜が迷ったの！」

「怒るなよ！龍可……ところでクロウ、その人達は？」

龍亜が黒フード三人を指差す。

「ああ、今から掃除の時間でな！お前達はそこで待ってる！」

「貴様……！我らを愚弄するのも大概にしろ……！」

「へっ、知ったことかよ！」

「貴様は抹殺してやる！」

黒フード達の怒りは最高潮に達しようとしていた。

そんな時、龍亜がクロウを呼ぶ。

「ねえ、クロウ！」

「どうした、龍亜？」

龍亜は少し間を明けてからこう話す。

「俺も戦う！」

その言葉を真つ先に反対したのは龍可だ。

「ダメよ、龍亜！危険よ！」

自分達は子供。いくらクロウがいようと、大人三人に龍亜が敵うはずがない、という思いが龍可に反対の声をあげさせた。だが

「いや、俺だってみんなを……世界を護りたいんだ！だから、クロウと一緒に戦いたい！」

龍亜の真剣な眼差しに龍可は何とも言えないという表情を見せる。その様子を見ていたクロウは小さくため息をつく、龍亜にこう告げた。

「……………分かった。足、引っ張るんじゃないぞ？」

「うん！もちろんさ！」

「龍亜……………」

龍亜もデュエルディスクを構え、準備が整う。

「ガキも一緒とは……………まあいい、共に葬ってやる」

「させねえよ！葬られるのはお前らだ！行くぜ……」

「『デュエル！』『』」

「私のターン！」

黒フード1 & 2 & 3（黒1）

LP 4000

手札6枚、5枚、5枚

「私は『ガトリングバギー』を召喚」

ガトリングバギー

ATK 1500

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

黒フード1 & 2 & 3（黒1）

LP 4000

手札4枚、5枚、5枚

『ガトリングバギー』《攻》

伏せ1

「じゃあ、次は俺だ！」

クロウ & 龍<sup>クロウ</sup>亜

LP 4000

手札6枚、5枚

「相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、このカードは手札からリリース無しで召喚できる！来い！『BF - 暁のシロツコ』！！」

翼を大きく広げた黒き鳥人が、クロウのフィールドに舞い降りる。

B F - 暁のシロッコ

A T K 2 0 0 0

「行くぜ！暁のシロッコでガトリングバギーを攻撃！」

シロッコの爪がガトリングバギーの車体を切り裂く。  
その衝撃でガトリングバギーが爆発を巻き起こした。

「くっ………！」

黒フード1&2&3

L P 4 0 0 0    3 5 0 0

「ヘッ、どうだ！」

「……ふん、効かぬな」

黒フード1は口の端を少し上げて、不気味な笑みを浮かべた。

「チッ、カードを2枚伏せて、ターンエン」

「おっと、ターンエンド前にリバーズカードをオープンさせてもら  
う！『ウィジャ盤』！」

黒フードのフィールドに何か文字がかかれた石版が現れる。

その石版の上には穴の開いた石みたいな物が乗っており、その石は  
「D」を指している。

「なっ………！」

「ウィジャ盤の効果で、デッキから『死のメッセージ「E」』を発動する」

石版の上でぼんやり浮かんでいる「D」の文字の横に、「E」が浮かび上がる。

「これで貴様らの命はあと3ターンだ」

「くつ、そんなカードを持っていやがったとは……！ターンエンド……！」

クロウ&龍<sup>クロウ</sup>亜

LP4000

手札3枚、5枚

『BF - 暁のシロッコ』《攻》

伏せ2

「……ドロー」

黒フールド1&2&3（黒2）

LP4000

手札4枚、6枚、5枚

『ウィジャ盤』

『死のメッセージ「E」』

「……魔法『おろかな埋葬』発動。……この効果でデッキから『グラッジ』を墓地へ送る」

黒フールド2のデッキから『グラッジ』のカードが墓地に置かれる。

「……『魂を喰らう者バズー』、召喚」



魂を喰らう者バズー

ATK1600

「……バズーの効果を発動。墓地からモンスターを1枚除外する度に攻撃力を300アップする。除外できるモンスターは3体まで……」

「って、事は墓地に2枚あるから……600ポイントアップ!？」

魂を喰らう者バズー

ATK1600 2200

「……バズーで攻撃」

獣のような生物が腕を振り上げて、シロッコに突撃する。

「チッ、リバースカードオープン!『炸裂装甲』!」

シロッコに岩石のような装甲が装着され、バズーの攻撃がその装甲にヒットする。だが、その装甲は破壊されず、バズーから受けた衝撃をそのままバズーに返した。

「これでバズーを破か」

「……手札から速攻魔法『我が身を盾に』発動」  
「なにぃ!？」

バズーの前に何者かの影が立ちはだかり、炸裂装甲によって発生した衝撃を受け止めた。

「……『我が身を盾に』は相手がモンスターを破壊する効果を使用

した時、1500のライフを払ってその効果を無効にして破壊する」

黒フード1&2&3

LP3500 2000

衝撃を回避したバズーの拳が再びシロッコに向かう。

「くっ……！」

### 3章・3・造られたカード

バズーの攻撃が再びシロツコへと向かう。

だが、クロウはニヤリと笑い、手札のカード1枚を相手に見せた。

「まだまだ甘いぜ！俺は手札から『BF・月影のカルート』の効果を発動！」

「……！？」

「自分フィールド場の『BF』と名の付いたモンスターが戦闘する時、手札からこのカードを墓地に送ることで、戦闘を行う『BF』の攻撃力を1400ポイントアップさせる！」

シロツコの翼に黄金のオーラが宿る。

BF・暁のシロツコ

ATK2000 3400

「行け！シロツコ！」

シロツコはカルートの力により、通常の2倍近くの速度で飛行し、その速度を利用したパンチでバズーの腹部を貫いた。

「……ぐっ、ぐわあああっ！」

黒フード1&2&3

LP2000 700

あまりの衝撃に黒フード2はうめき声をあげながら、片膝を地面につく。

「……ダブルトラップか」

「へっ、さすがにこれは効いたろ？」

「……………」

黒フールド2は無言のまま立ち上がると、手札からカード1枚を抜き取る。

（何をするつもりだ……？）

「……フィールド魔法『死刑宣告』を発動」

「なっ、何！？そんなカード聞いたことねーぞ！？」

「えっ、えっ、どういう事！？」

「……『死刑宣告』が存在する時、相手は攻撃宣言できず、魔法・罠カードも発動できない」

その効果を聞いたクロウは一つの考えが頭に浮かぶ。

「そうか……そのカードはお前らが造ったカードって訳か……！」

「我らグールズにかかれば、カードを造ることなどたわいもない事。貴様達にハナから勝ち目はない……フハハハハ」

「卑怯なカードを使いやがって……」

クロウは悔しそうに舌打ちをする。しかしそんな時、

「……まだデュエルは続いているよ！ライフは勝ってるし、行けるよクロウ！」

「……龍亜……」

「龍亜がそんなことを言うなんて……天と地がひっくり返るのかしら？」

「なんだよソレっ……！」

龍亜の思わぬ声援でクロウは元気づけられた。近くで観戦していた龍可もその事に驚いているようだ。

「まさか龍亜が俺を励ますなんてな……！よし、この状況を覆してやるぜ！」

「うん！一緒にあいつらを倒そう！」

龍亜とクロウは意気を高め、再びグールズと向かい合う。

「……カードを一枚伏せる」

黒フードのフィールドに伏せカードが表示される。

「……『死刑宣告』にはもう一つ効果がある。このカードが場にあるかぎり、ウィジャ盤の効果を自分のターンのエンドフェイズにも適用する」

ウィジャ盤の上に浮かんでいる「E」の文字の横に新たな文字が浮かび上がる。

「……『死のメッセージ』A」『発動』

「じゃあ、これでエンドって訳だな」

「……ああ、エンドだ」

黒フード1&2&3（黒2）

LP700

手札4枚、3枚、5枚

『ウィジャ盤』

『死のメッセージ』E  
『死のメッセージ』A

「行くぞー！俺のターン！」

クロウ&龍亜（龍亜）

LP4000

手札2枚、6枚

『BF-暁のシロツコ』

伏せ1

「行けるか、龍亜？」

「まっかせといて！」

龍亜はクロウにピースをする。

「俺は『D-スコープン』を召喚！」

D-スコープン

ATK800

（龍亜、シンクロ召喚をするつもりか？）

「スコープンの効果を発動！スコープンは1ターンに一度、手札からレベル4以下の『D』と名の付いたモンスターを1体特殊召喚できる！コイツだ！『D-パッチン』を特殊召喚！」

D-パッチン

ATK1200

「！……そうか！考えたな龍亜！」

「パッチンの効果発動だ！パッチンは自分フィールド上の『D・パッチン』以外の『D』をリリースすることで、フィールド上のカードを1枚破壊する！」

パッチンは頭に付いているゴムにスコープンをセットし、標的を探す。

「行けーっパッチン！標的はあれだ！」

龍亜が指差したのは、死刑宣告のカード。

「発射！」

パッチンからスコープンが発射され、死刑宣告のカードに直撃する。するとカードにひびが入り、少しずつ割れていく。そして、崩壊が一瞬止まるとカードは砕け散った。

「……！死刑宣告のカードが……！」

「やったな！龍亜！」

クロウと龍亜はグーを重ね合わせ、喜びを表した。

「さあ、決めるぜ！龍亜！」

「おーっ！」

### 3章・4・奇跡の一枚、ラストドロ―！

「よし！このまま攻めるぜ！」

「うん！」

クロウと龍亜の二人は厄介なカードを破壊したことで、意気が上昇。このまま押し切るという気合いを込める。

（だが、一つ引つ掛かることがある……）

「よし、バトルだ！D・パッチンでダイレクトアタック！」

パッチンは黒フード2に向かって突撃を繰り返す。が、その攻撃は空間に出来た渦によって阻止された。

「……リバースカード！『攻撃の無力化』！」

「やっぱり、攻撃を阻止するカードを伏せてたか……！」

「……お前達が『死刑宣告』のカードを破る恐れがあったからだ」

「へへーん！俺達に掛ければそんなカード」

「そして、それは我らの思うとおりとなった！」

「何っ！？」

黒フード2の墓地から黒い穴が、クロウ・龍亜のフィールド目掛けて迫ってくる。

「なっ、何だ！？」

「……死刑宣告が破壊されたターンのメインフェイズ時、相手の手札とフィールド上のカードをすべて破壊する事が出来る」

黒い穴は見る見る内に巨大化し、クロウ・龍亜のフィールドと手札



のカードを飲み込んでいく。

「なっ……………！俺の手札まで！？」

「フッフ……………このカードの適用範囲はパートナーをも巻き込むぞ……………！」

「くそっ！だからモンスター効果は発動できるようにしてあったのか！」

「今更気づこうともう遅い。これが真の『死刑宣告』だ！」

黒い穴が消えた時には、フィールド上、手札のカードは全て消え去っていた。

「ぜ、全部消えちゃった……………」

「くっ……………！」

「これで貴様らに勝ち目はない……………」

クロウ、龍亜の手札は0の上にフィールドには何も無い。後は次の黒フード3のターンで遊ばれる……………はずだった。

「……………へへへ」

「どうした？負けが見えて、おかしくなったか？」

「良かったぜ……………」

「良かっただと？」

黒フード達はクロウの言っている意味が全然理解できなかった。当然である。フィールドと手札を全て消されて、“良かった”なんて言う者などいないはずなのだから。

「何が“良かった”だ！強がりも大概にしろ！」

「強がりじゃないぜ？ほんと良かったよ……………遊星からあのカードを

借りておいてな！」

「あのカードだと……？」

「龍亜、墓地のカードを確認してみろ」

龍亜が墓地のカードを確認すると、龍亜の『D・パッチン』、クロウの『BF・暁のシロッコ』……の下にもう一枚カードがあった。

「クロウ……！これって！」

「ああ！俺が1ターン目に伏せたカード……『ミラクルシンクロフュージョン』！」

「何……！？」

「このカードはシンクロモンスターを融合させるカードだが、セツトされたこのカードが相手によって破壊された時、カードを1枚ドロウ出来る効果を持っている！」

「じゃあ、この効果で俺はもう一枚ドロウ出来るって事！？」

「ああ！行け龍亜！」

龍亜はデッキの上に指を置く。

（デッキよ……！俺に答えて！）

そっ心に思うと、勢いを込めてカードを引いた。

少しずつ目を開け、カードを確認する。

「……………！」

（おっ、いいカードを引いたみたいだな……………！）

「俺はカードを1枚伏せる！」

今、引いたカードをデュエルディスクの魔法・罠カードゾーンにセツトする。

「俺はこれでターンエンドだ！」

「おっと、ターンエンド前に死のカウントダウンだ！」

ウィジャ盤の「A」の横に、「T」の文字が浮かび上がる。

クロウ&龍亜（龍亜）

LP 4000

手札 0 枚、0 枚

伏せ<sup>1</sup>

「ハハハハハ！所詮その程度だったか！じわりじわりいたぶってやるぞ……！我がターン！」

黒フールド1&2&3（黒3）

LP 700

手札 4 枚、3 枚、6 枚

『ウィジャ盤』

『死のメッセージ「E」』

『死のメッセージ「A」』

『死のメッセージ「T」』

「我は『ソウル・マスター』召喚」

ソウル・マスター

ATK 1000

「ソウル・マスターでダイレクトアタック！」

ソウル・マスターの拳が龍亜に向かう。

「ソウル・マスターの効果発動！このカードが攻撃するとき、自分の墓地のモンスターを除外することで、そのモンスターの攻撃力分、ソウル・マスターの攻撃力をアップできる」

今、黒フード達の墓地にいるモンスターは『魂を喰らう者バズー』のみ。

「バズーを除外し、ソウル・マスターの攻撃力をアップ！」

ソウル・マスターの拳にバズーの魂が宿る。

ソウル・マスター

ATK1000 2600

「ソウルナックル！」

拳が龍亜の腹部に直撃し、その衝撃を受けた龍亜は片膝をつく。

「くっ……！負けるもんか……！」

クロウ&龍亜

LP4000 1400

「まだだぞ？ソウル・マスターのもう一つの効果を発動！ソウル・マスターが直接攻撃に成功した時、攻撃力を半分にしてもう一度攻撃できるんだ……頑張れよ少年？」

「な……！」

ソウル・マスター

ATK 2600 1300

ソウル・マスターの2回目の攻撃が龍亜に入る。

「ソウルナツクル・セカンド!!」

クロウ&龍亜

LP 1400 100

「ぐっ……!!」

「堪えろ! 龍亜!」

(龍亜……! 頑張っ……!)

観戦している龍可は龍亜を助けてやりたいが、デュエルに入ること  
は出来ないため、応援しかできない。

「た……堪えたぞ……!!」

「よく堪えたな少年。バトルフェイズ終了時、ソウル・マスターの  
攻撃力は2600に戻る」

ソウル・マスター

ATK 1300 2600

「そして、ターン終了時に攻撃力が500ポイントダウンする」

ソウル・マスター

ATK 2600 2100

「ターンエンドだ……さあ、もう何もできまい!」

黒フード1&2&3（黒3）

LP700

手札4枚、3枚、5枚

『ソウル・マスター』《攻》

『ウィジャ盤』

『死のメッセージ』E』

『死のメッセージ』A』

『死のメッセージ』T』

「これがラストターン……！ドロー！」

クロウ&龍<sup>クロウ</sup>亜

LP100

手札1枚、0枚

伏せ1

クロウが引いたカードは『BF - 蒼炎のシュラ』。

「来たぜ！」

クロウは思い通りの引きに、歓喜の声をあげる。

「俺は『BF - 蒼炎のシュラ』を召喚！」

BF - 蒼炎のシュラ

ATK1800

「フン、今更そいつを出したところで勝ち目は」

「慌てるなよ！龍亜、お前の力を貸してもらっぜ！」

「おぉーっ！」

「リバーズカードオープン！『ジャンクBOX』！」

おもちゃ箱のような箱が、クロウの元に現れる。

「このカードは自分の墓地に存在する『D』と名の付いたモンスター一体を特殊召喚する！」

墓地に存在する『D』は、『D・パッチン』と『D・スコープン』の二体。

「蘇れ！『D・スコープン』！」

D・スコープン

DEF1400

「スコープンは守備表示の時、レベル4として扱う！」

「レベルが上がるうが、貴様らの勝利には繋がらない！我らが勝利なのだ！」

「果たしてそうかな？今から見せてやるぜ！レベルの使い方を！」

「何っ……？」

「行くぜ！レベル4『BF・蒼炎のシュラ』にレベル4となった『D・スコープン』をチューニング！」

スコープンが4つの光の輪となり、その中にシュラが飛び込んだ。

「黒き疾風よ！秘めたる思いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！」

輪に包まれたシュラが光を放ち、その光の中から龍の影が現れ、雄叫びをあげる。

「舞い上がれ！『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

ブラックフェザー・ドラゴン  
ATK2800

「なっ……なんだその召喚方法は……！」

黒フード3に続き、他の二人も驚きを隠せていない。

「ブラックフェザー・ドラゴンでソウル・マスターを攻撃！ノーブル・ストリーム！」

漆黒の風がソウル・マスターの全身を切り刻む。  
ソウル・マスターは悲鳴をあげながら、消滅していった。  
そして、衝撃の余波は黒フード達を襲う。

「ぐわあああああ……！」

黒フード1&2&3  
LP7000

「「よっしやー……！」」



#### 4章・歴史を壊す者

童実野町にあるビルの屋上に二つの影があった。

「チッ、やはりグルズごときじゃ『シグナー』は倒せないか……」

クロウと龍亜のデュエルと遊星のデュエルを見物していたが、どちらもグルズの敗北。男に怒りの感情が芽生える。

「過去の犯罪集団もこんなものかよ……使えねえ」

男は地面に唾を吐きかけた。

「まあ、いいや……こちらの目的はシグナーじゃねえし、『武藤遊戯』、『遊城十代』さえ消せば目的達成だしな……」

怒りの表情から一変、口の端を釣り上げ、怪しげな笑みを浮かべる。

「まあ、次はコイツに行ってもらうか……おい！」

呼ばれたもう一人の男は一步前へ踏み出す。

その影が光に当たると、その容姿が見て取れる。

その姿は、金の髪を逆立たせ、白のロングコートに身を包んだ長身の男　ジャック・アトラスだった。

だが、その目にいつものような輝きがない。

「はい、何でしょう」

「っと、そうだな……まずは手始めに『武藤遊戯』を消せ」

「はっ、仰せのままに……」

ジャックはそう言うと、ビルから飛び降りていった。

「ハハっ！『シグナー』が厄介なら最初から手駒に取っちまえばいいんだ！」

男はそういつとどこかへと去っていった。

## 5章・残された者達

時代が変わって、ここは崩壊するネオドミノシティ。

今の所、崩壊は一時停止をしたかのように止まっている。

そんな崩壊しかけているハイウェイを2台のDホイールが走っていた。

一台の黒いDホイールに乗っているのは、レスラーのようにがたいはいいのだが、それに似合わずパーティに着て行く正装のような服を着た男      ミゾグチと、もう一台、馬のようなDホイールに乗っている、長い金の髪をヘルメットに納め、どこか気品を漂わせるような顔付きをしている碧眼の女性      シェリーだった。

「シェリーお嬢様！一体どちらへ！？」

「治安維持局よ」

「何故、治安維持局へ！？」

「治安維持局ならこの今起きている状況を知っている人がいるかもしれないわ」

「で、ですが」

「つべこべ言わず、付いてきなさい」

「わ、分かりました……！」

シェリーはアクセルを効かせると、さらに速い速度でハイウェイを翔けて行った。

「う、これは……」

シェリー達が治安維持局に着くと、そこは無残な光景に成り果てて

いた。

治安維持局の建物は跡形も無く崩れ、周りの建物も同じと言っているほど崩れていた。

シェリー達が呆然と見ていると、一人の男が話しかけてきた。

「お前ら、どうしたんだ？」

その男はミゾグチと同じくらいがたいがいが、ミゾグチとは違い、荒々しい雰囲気を持った男

牛尾哲だった。

「あら、貴方は避難してないのかしら？」

「ああ、セキリュティの仲間は全員避難させたんだが、一つ心配事があってな」

「心配事？」

「ああ、御影さんが帰ってこないんだ」

「御影……？」

シェリーとミゾグチは記憶の糸を辿る。そして行き着いたのは、あのゴーストの大量出現事件の時に牛尾の隣にいた青髪の女性だった。

「あら、貴方の隣にいたガールフレンド？」

「そ、そんなじゃねー！とっ、とにかくだ！御影さんの無事を確認しないとな……」

「何か手掛かりは？」

「ああ、遊星達を迎えに行っただが、帰還する途中に旧モーメント跡地の方角へ向かったまま、連絡が途絶えちゃった」

「旧モーメント跡地？」

「ああ」

牛尾は“ゼロリバー스가起こった場所”と言いそうになったが、そ

れを言々と遊星の心の傷をえぐることになる。だからあえて返事だけにしておいた。

「じゃあ、その場所へ行ってみましょう」

「おっ、お前何言って」

「お、お嬢さ」

「その御影が気になるんでしょう？ だったら行かない訳にはいかないじゃない」

「それはそうだが………」

「その話、僕も乗っていいかな？」

突然した男の声にシエリー達は振り返る。  
するとそこにはジャックと同じくらいの身長に、青髪の気弱そうな青年が立っていた。

（あいつは……前に治安維持局で……）

「ぶ、ブルーノ！ お前定期報告が済んだ後、すぐに帰ったんじゃない」

「いやあ、あのあと忘れ物したこと思い出して……取りにかえろうとしたら建物が崩れ始めちゃって……」

（なんていいタイミングで帰ってくるんだ……）

「まあいいわ、早く行きましょう。またいつ崩壊が始まるかわからないわ」

「うん！ じゃあ、僕はこのバイクで……」

4人はそれぞれのDホイールやバイクにエンジンをかける。

「行くわよ！」

『待ってくれ』

男の声にシェリー達は振り向くと、そこには3人の人影が立っていた。

## 6章 - 1・激突する過去と未来の王者

ここはある路地裏。

そこには身長の高い男と、それとは対照的な長身の男が立っていた。二人は同じ黒いマントで体を隠し、ついているフードは被っていない。

「ここにいたらほんとに遊戯がくるのか？」

「ああ、マリク様のご命令だ。間違いない」

そんな会話をしていると、一人の男が近寄ってきた。

「武藤遊戯か！？」

「残念だったな。俺は武藤遊戯じゃあない」

「じ、じゃあ誰だかな！」

「そつだな……『歴史を壊す者』とでも言うておこうか」

「れ、歴史を壊す者……？」

「んで……お前たちがそこにいると邪魔なんだよ。消えろよ」

「なっ、お、俺たちが何で退かなくちゃならないかな！？」

「お前たちがそこにいると、『海馬瀬戸』が来て厄介なことになるんだよ」

「か、海馬……？あの遊戯と海馬が手を組むはずは

」

「組むんだよ。さつさと、お前たちを蹴散らすためにな」

「何い……！さつきから訳の分からん事ばかり言いやがって……！」

背の高い男が何かを思いついた顔をする。

「そつだ相棒！俺たち二人でコイツを蹴散らしちまおうぜ！武藤遊

戯と戦うための準備運動だ！」

「そうだ！そうしよう！」

背の低い男もその案に乗り、二人の男はデュエルディスクを構える。それを見た男はつまらなさそうに耳の穴をほじると、左腕にデュエルディスクを装着する。

「残念だ……素直に退けば長生きできたものを……」

「何、言ってやがる！それはこっちのセリフだかな！」

「仕方ない。やってやるよ……ただし付き合うのは『1ターン』だけだ」

男はそう告げると、グールズの部下とのデュエルを開始した。そして、30秒後。辺りにグールズ二人の悲鳴がこだました。

一風変わった髪形と、鋭い眼光をした少年

武藤遊

戯はマリクの操る人形と戦い、苦戦の末、勝利した。

だが、安堵も束の間。

マリクの別の作戦により、城之内克也が狙われているという。

（城之内君……！どこいるんだ……！）

遊戯は町の雑踏の中を探すが、城之内はいない。

そうこうしている内に時間だけが過ぎていき、遊戯の焦りがより一層強くなる。

すると、雑踏の中に一際目立つ人影があった。

その人影は遊戯を見ると背中を向け、近くの路地裏に入る。



(ついでこいと言ってるのか……?)

遊戯はその影が気になり、ついていく事にした。  
路地裏に入ると、そこには何も障害物が置かれておらず、本当に路地裏か疑うほどだった。

「おい、出て来いよ。俺は逃げも隠れもしないぜ」

遊戯がそう言うと、コツ、コツ、と足音を立て、人が近づいてきた。  
金の髪に白いロングコートを着た男  
ジャックだった。

「お前、グルズの仲間か？」

「俺はあんな低俗なグループになど属さん。俺が付き添うのは我が主」  
「主」だけだ

「主……？」

「俺とデュエルしろ、武藤遊戯。貴様はこの時代から消えてもらう！」

「何だとな……！？」

ジャックはそう告げると、デュエルディスクを構える。

「なんだかよく分からないが、そのデュエル受けて立つぜ！」

「デュエル！」

「俺の先行！」

武藤遊戯

LP4000

手札6枚

「俺は『クリッター』を召喚！」

遊戯の場に毛玉のような体に目が三つ付いたモンスターが現れる。

クリッター

DEF 600

「さらにカードを一枚伏せてターンエンド！」

武藤遊戯

LP 4000

手札 4 枚

『クリッター』 《守》

伏せ 1

「俺のターン！」

ジャック・アトラス

LP 4000

手札 6 枚

「このカードは、相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！いでよ！『バイス・ドラゴン』！！」

青紫色の竜がジャックのフィールドに現れる。

バイス・ドラゴン

ATK 2000

「この効果で特殊召喚した『バイス・ドラゴン』の攻撃力、守備力は半分になる」

バイス・ドラゴン

ATK2000 1000

DEF2400 1200

「さらにチューナーモンスター、『フレア・リゾネーター』を召喚！」

（チューナーモンスター……？）

炎が付いた音叉を持っている小さな悪魔が現れる。

フレア・リゾネーター

ATK300

「行くぞ！レベル5『バイス・ドラゴン』にレベル3『フレア・リゾネーター』をチューニング！」

フレア・リゾネーターが音叉を鳴らすと、フレア・リゾネーター自身が三つの輪になった。

バイス・ドラゴンはその中に飛び込む。

「王者の鼓動、いまここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

バイス・ドラゴンは光となり、その光から龍の影が現れる。

「我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！！」

その龍は悪魔のような姿をしており、まがましいオーラを出しながら、雄叫びをあげた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン  
ATK3000

「し……シンクロ召喚だ！？」

さすがに遊戯も焦りの表情は隠せず、頬に一筋の汗を流す。

「『フレア・リゾネーター』の効果で、『フレア・リゾネーター』をシンクロ素材にしたシンクロモンスターの攻撃力を300ポイントアップする！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン  
ATK3000 3300

「こ、攻撃力3300だと……！？海馬の『青眼の白龍』を越えた……！」

「我が最強モンスター『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！その力で伝説を滅ばせえ！！アブソリュート・パワーフォース！」

レッド・デーモンズの拳が、クリッターの体を貫通する。  
クリッターは恐怖する間もなく、消滅していった。

「くっ……！オレは『クリッター』の効果を発動！さらに場に伏せてあった『魂の綱』を発動するぜ！」

遊戯の墓地から一本の綱がのびており、その綱は遊戯のデッキへと繋がっている。

「『魂の綱』は自分フィールド上のモンスターが破壊された時、1

000ライフを払うことで、デッキからレベル4のモンスターを特殊召喚することができる！」

武藤遊戯

LP4000 3000

綱が引かれると、そこには剣を持った女性が綱を握っていた。

「俺はこの効果で『クイーンズ・ナイト』を特殊召喚！」

クイーンズ・ナイト

DEF1600

「そして『クリッター』の効果で、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！」

そう言うと、遊戯のデッキからカードが一枚押し出される。

「俺は『クリボー』を手札に加えるぜ！」

遊戯はジャックに手札に加えるカードを見せた。

「……フン！俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

ジャック

LP4000

手札2枚

『レッド・デーモンス・ドラゴン』《攻》  
伏せ2

（くっ……！俺に倒せるのか、あのモンスターを……）

レッド・デーモンスの眼光に遊戯は一步退く。  
だが、遊戯は眼に力を宿らせ、決意を固めた。

（いや……倒す！倒さなければ、明日はない！そして城之内君を助け出す！）

そして、遊戯はカードをドロースする……。

## 6章・2・紅き悪魔の龍の脅威

「ドロー!」

遊戯

LP3000

手札6枚

『クイーンズ・ナイト』《守》

(俺は……勝つ!)

遊戯は勝利への決意を固める。

「俺は『キングス・ナイト』を召喚!」

渋く、たくましい姿をした剣士が遊戯の元に現れた。

キングス・ナイト

ATK1600

「『キングス・ナイト』の効果を発動!このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上に『クイーンズ・ナイト』が存在する場合、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚できる!」

遊戯はデッキからカードを抜き取ると、デュエルディスクのモンスターカードゾーンにセットする。

「いでよ!『ジャックス・ナイト』!」

若き剣士が遊戯の場に舞い降りる。

ジャックス・ナイト

ATK1900

「絵札の三銃士、ここに集結!!」

キング・クイーン・ジャックの三人の剣士は剣を高く掲げ、剣同士を重ねた。

「フン、茶番はもういいのか？」

「ただだぜ？俺は『古のルール』を発動！この効果で手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する!!」

遊戯は手札のカードを選択し、モンスターカードゾーンにセットする。

「来い!『ブラック・マジシャン』!!」

黒にも紫にもみえる服に身を包んだ杖を持つ魔法使いが現れた。

ブラック・マジシャン

ATK2500

「これが武藤遊戯だけが持つという『ブラック・マジシャン』か…  
…だが、我がレッド・デーモンズには敵わない!!」

「慌てるなよ!デュエルはまだまだこれからだぜ?」

遊戯はフツ、と小さく笑うと手札のカードを1枚、魔法・罠カードゾーンにセットする。



「俺は手札から魔法カード『融合』を発動！フィールドに存在する『クイーンズ・ナイト』、『ジャックス・ナイト』、『キングス・ナイト』を融合！」

クイーン、ジャック、キングの三人の剣士は光の渦へと飛び込む。

「融合召喚！」

光が消えるとそこから出てきたのは、凜々しい男性の剣士だった。

「『アルカナ・ナイトジョーカー』……！」

アルカナ・ナイトジョーカー

ATK3800

「何っ！ここにきて3800のモンスターを召喚だと！？」

「神を召喚するためのカードを入れておいて正解だった……このカード達を見せるのはお前が初めてだ！」

「くっ……！」

遊戯は表情に余裕が生まれ、対するジャックは少し焦りの感情が生まれていた。

「あの龍を破壊しろ！『アルカナ・ナイトジョーカー』！」

アルカナ・ナイトジョーカーは見えない速度でレッド・デーモンズの懷へ踏み込むと、持っている剣でレッド・デーモンズを真っ二つにした。

「ぐわっ！レッド・デーモンズ……！」

ジャック

LP 4000    3500

「よし……！追撃だ『ブラック・マジシャン』……！」

ブラック・マジシャンは杖を振ると、杖の先から黒い球体が発射される。

「ブラック・マジック！」

その球体は車と変わらぬ速度でジャックに衝突した。

「ぐわっ！」

ジャック

LP 3500    1000

反撃に成功した遊戯は少しばかりの笑みを浮かべる。

（だが、まだ手を隠しているはずだ……！）

遊戯は手札のカードを一枚、魔法・罠ゾーンにセット。これで遊戯の手札は1枚となった。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

遊戯

LP 3000

手札1枚

『アルカナ・ナイトジョーカー』《攻》

『ブラック・マジシャン』《攻》

伏せ1

「倍返しにさせてもらっぞ！オレのターン！」

ジャック

LP1000

手札3枚

伏せ2

「手札から『シャイニング・リバーズ』発動！墓地のシンクロモンスターを1体選択し、そのシンクロモンスターの召喚条件に合うよう、墓地のモンスターを除外することで、選択したシンクロモンスターを特殊召喚できる！」

ジャックは墓地からカードを2枚取り出す。

「オレは『バイス・ドラゴン』と『フレア・リゾネーター』を除外し、リバーズチューニング！」

魂だけとなったフレア・リゾネーターが3つの輪になり、同じく魂だけのバイス・ドラゴンがその中に飛び込む。

「王者の鼓動！いま再び列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！リバーズシンクロ！復活せよ！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

蘇った紅き悪魔龍は鋭い眼光で遊戯を睨みつける。

「くっ……！」

再び蘇った悪魔龍に遊戯は苦虫をかみつぶしたかのような顔をした。

「さらにチューナーモンスター、『ダーク・スプロケッター』を通常召喚！」

ダーク・スプロケッター

DEF0

「新たなチューナーだと！またシンクロ召喚をするのか！？」

「甘い、甘いぞ武藤遊戯！」

「何っ……！」

「オレの場の『ダーク・スプロケッター』をリリースし、リバー斯卡ードオープン！『ナイトメア・デーモンズ』！」

「！？」

「『ナイトメア・デーモンズ』は自分の場のモンスター一体をリリースする事で発動でき、相手フィールド上に攻撃力2000の『ナイトメア・デーモン・トークン』を3体、攻撃表示で特殊召喚する！」

カードから飛び出した3体の影のような悪魔は遊戯の場に移動し、そこで不思議な踊りを踊っている。

（何故、俺のフィールドに攻撃力2000のモンスターを……？）  
遊戯はジャックの不可思議な行動に疑問を感じていた。

「さらにオレは手札のカードを1枚捨て、リバー斯卡ード『カード・フリップ』を発動！」

そのカードが発動された瞬間、遊戯の場のモンスター達が片膝をついた。

「何だと!？」

「『カード・フリッパー』は相手フィールドに存在するモンスター全ての表示形式を変更するのだ!」

「くっ……!俺の場のモンスターが全て守備表示に……!」

「さあ、行け!レッド・デーモンズ!相手の場を全て焼き尽くすのだ!クリムゾン・ヘル・フレア!」

レッド・デーモンズが吐き出した炎が、ナイトメア・デーモン・トークンの一体に命中。

トークンは悲鳴をあげながら消滅していった。

「『ナイトメア・デーモン・トークン』は破壊された時、そのコントローラーに800ダメージを与える!」

「なっ!」

遊戯

LP 3000      2200

「くっ……!」

「まだだ!『レッド・デーモンズ・ドラゴン』は守備モンスターを攻撃した時、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する!デモン・メテオ!」

レッド・デーモンズはさらに炎を吐き出すと、遊戯のフィールドを炎上させた。

その炎の中にいた『アルカナ・ナイトジョーカー』、『ブラック・

マジシャン』、『ナイトメア・デーモン・トークン』2体は苦しそうな表情を浮かべながら、消滅した。

（すまない……みんな……）

「さあ！『ナイトメア・デーモン・トークン』のダメージを受けてもらおうか！」

「くっ……ぐわああああ！」

遊戯

LP2200 600

「貴様の最期も近いようだ……キング直々に貴様を冥界へ送ってやるっ！」

遊戯はそれに答える余裕がないのか、じっと俯いていた。

（オレは……ここで負けるのか？）

そんな気持ちに押し潰されそうな遊戯に、一つの優しい声が聞こえてきた。

『君は勝てるよ！』

その声を聞いた遊戯はふと隣を見る。

そこには遊戯にしか見えないが、外見があまりに酷似している『もう一人』の遊戯が立っていた。

## 6章・3・キングの座に就く者

「相棒……」

『もう一人の僕は、今までどんな逆境をも乗り越えてきた……だから、今回のデュエルだって大丈夫だよ!』

「……………」

『勝って、マリクを倒して、城之内くん達との約束を果たそうよ!』

「……………ああ!」

遊戯の眼に輝きが戻る。

そして、ジャックを睨み付けた。

「俺はお前を倒して、城之内くんとの約束を果たすぜ!」

「フン! 貴様の約束など知ったことか……貴様はここで消えるのだ!」

ジャック

LP1000

手札0枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』《攻》

「行くぜ! 俺のターン!」

遊戯

LP600

手札2枚

伏せ1

「……………! 俺はこのままターンエンドだ!」

遊戯

LP 600

手札 2枚

伏せ 1

「フハハハハ！とうとう諦めたか！」

何もせずにエンド宣言した遊戯をジャックは見下したかのように笑う。

「安心しろ！今、冥界に送ってやる！俺のターン！」

ジャック

LP 1000

手札 1枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』《攻》

「オレの全力を見せてやろう！」

そう言うと、ジャックは手札のカードをモンスターカードゾーンにセットした。

「『異次元の旅人』を召喚！」

マントを羽織った、口に枝を加えた渋い男性が現れる。

異次元の旅人

ATK 0



「攻撃力0だと……？」

「オレはこのカードをリリースして、効果を発動！」

旅人はジャックの墓地へと歩いて行く。

「『異次元の旅人』はこのカードをリリースすることで、墓地に存在するチューナーを特殊召喚できる！」

旅人と入れ替えに現れたのは、ジャックの墓地に眠っていた

「オレは『ダーク・スプロケッター』を特殊召喚！」

ダーク・スプロケッター

DEF0

「そして、墓地に送った『異次元の旅人』の効果を発動！墓地に存在するこのカードを除外することで、除外されているチューナー1体を特殊召喚できるのだ！」

旅人は次元の裂け目へと消えて行く。

「現れよ！『フレア・リゾネーター』！！！」

フレア・リゾネーター

ATK300

あまりの展開力に遊戯は焦躁の顔を隠せない。  
だが、先程の遊戯ほどの驚きはなかった。

「さあ！見せてやるぞ！オレの全力を！」

ジャックは手を上に掲げる。

「レベル8『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル1『ダーク・スプロケッター』とレベル3『フレア・リゾネーター』をダブルチューニング！」

ダーク・スプロケッターとフレア・リゾネーターは炎の輪となり、レッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込む。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ！天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！」

レッド・デーモンズが紅い光を放ち、その光から紅蓮の炎を宿した龍が現れる。

「いでよ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

ATK3500

「『異次元の旅人』によって特殊召喚されたモンスターはゲームから除外され、いかなる効果をも無効にする。よって、『フレア・リゾネーター』、『ダーク・スプロケッター』の効果は無効となる」

「なんだ……！この圧倒的威圧感……！」

その紅蓮の龍の威圧感は、先程のレッド・デーモンズの比ではなく、遊戯もさすがに1歩退く。

だが、それでも遊戯の眼からは輝きは消えない。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃！バーニング・ソウル！！」

スカーレット・ノヴァの攻撃が遊戯へと向かう。

「リバーズカード、オープン！『聖なるバリア・ミラーフォース』！！」

遊戯の前に虹色の光が現れ、スカーレット・ノヴァの攻撃を跳ね返した。

「甘いわ！スカーレット・ノヴァは魔法・罠・モンスターの効果では破壊されない！！」  
「なっ！」

スカーレット・ノヴァは破壊されず、追加攻撃を放つ。  
それは遊戯の場所に命中し、遊戯の場に砂埃を起こした。

「……終わったか」  
『オレはまだ倒れちゃいないぜ？』  
「何！？」

砂埃が晴れると、そこには笑みを浮かべる遊戯の姿があった。

「き、貴様どうやって」  
「俺は手札にあった『クリボー』の効果を発動した。クリボーは手札から捨てる事により、一回だけ自分の受ける戦闘ダメージを0にする！」  
「そうだったな！貴様は序盤に『クリッター』の効果で手札に加えたのだったな！」

「ああ、そうだぜ」

「フン、ターンエンドだ」

ジャック

LP1000

手札0枚

『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』《攻》

「俺のターン！」

遊戯は次にドローするカードに全てを賭ける。

「ドロー……！」

遊戯

LP600

手札2枚

遊戯はゆつくりと引いたカードを確認する。

「フツ、引いたぜ」

「！？」

「俺は手札から『神からの宝札』を発動！」

「何いつ！？」

「『神からの宝札』の効果でお互いの手札が6枚になるようにカードをドローする！」

これで遊戯とジャックの手札は6枚となる。

遊戯

手札1枚 6枚

ジャック

手札0枚 6枚

「俺は『死者蘇生』を発動！この効果で、墓地にあるモンスターを特殊召喚するぜ！」

遊戯が選んだモンスターは

「来い！『ブラック・マジシャン』！！」

黒き魔術師が再び場に蘇る。

「さらに手札から『マジック・チェンジ』を発動！」  
「な……！」

「『マジック・チェンジ』は『マジシャン』と名の付く魔法使いモンスターがフィールドに存在するときに発動でき、手札の魔法と墓地の魔法を入れ換えることができる！」

遊戯は手札のカード1枚と墓地のカードを1枚入れ換える。

「俺は手札の『エクスチェンジ』を墓地に送り、墓地の『融合』を手札に加える」

遊戯は手札に加えたカードをジャックに見せ、確認させた。

「俺はフィールドの『ブラック・マジシャン』と手札の『バスター・ブレイダー』を融合！」

ブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーは光り輝く渦の中へ飛び込む。

「融合召喚！『超魔導剣士・ブラック・パラディン』！！」

ブラック・マジシャンに似ているのだが、杖と服装が変わり、顔付きも少し鋭くなったモンスターが渦の中から飛び出した。

超魔導剣士・ブラック・パラディン

ATK2900

「フン！我がスカーレット・ノヴァには敵わぬ！」

「それはどうかな……？」

「何っ……？」

「ブラック・パラディンはお互いの墓地とフィールドにあるドラゴン族一体につき、攻撃力を500ポイントアップする。俺とお前の墓地とフィールドにあるドラゴン族は、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』と『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の2枚！よって、攻撃力は1000ポイントアップ！」

ブラック・パラディンはレッド・デーモンズとスカーレット・ノヴァの2体の龍から力を奪う。

超魔導剣士・ブラック・パラディン

ATK2900 3900

「ス……スカーレット・ノヴァの攻撃力を越えただっ！？」

「行けっ！ブラック・パラディン！」

ブラック・パラディンがスカーレット・ノヴァの懐に入る。

「超魔導無影斬!!」

武器にエネルギーを込めた一撃で、スカーレット・ノヴァの胴体を斬った。はずだった。

実際、ブラック・パラディンが斬ったのは何もない空間であり、スカーレット・ノヴァの姿はどこにもない。

「なっ……! モンスターが消えただと!?!」

その言葉を聞いたジャックは高笑いをあげる。

「フハハハハ!! スカーレット・ノヴァの効果を発動したのだ! スカーレット・ノヴァは相手モンスターの攻撃宣言時、このカードを除外することで相手の攻撃を無効にする!」

ジャックは確信していた。己の勝利を。

このターンのエンドフェイズにスカーレット・ノヴァが復活し、次のジャックのターンで、ブラック・パラディンを攻撃。それで、遊戯のライフは0となる。

そう、自分の勝利は確定していると思っていた。だが、次の遊戯の一手で状況は一変した。

「フッ……! 俺は読んでいたぜ!」

遊戯は口の端を上げ、笑みを浮かべる。

「何っ……!?!」

「俺は手札から速攻魔法! 『ディメンション・マジック』を発動!」

フィールドに人型の箱が現れ、その中にブラック・パラディンが入る。

「『デイメンション・マジック』は自分の場に魔法使い族がいる時、自分のモンスターを1体生け贄に捧げることで、自分の手札にある魔法使い族モンスターを特殊召喚できる！」

人型の箱が閉まり、ブラック・パラディンの姿が見えなくなる。そして再び箱が開き、その中から出てきたのは

「ブラック・パラディンを生け贄に捧げ、手札から特殊召喚するモンスターは、『ブラック・マジシャン・ガール』！」

可憐な少女の魔法使いが遊戯の場に現れた。

ブラック・マジシャン・ガール

ATK2000

「『ブラック・マジシャン・ガール』は墓地に存在する『ブラック・マジシャン』の数だけ、攻撃力を300ポイントアップする！」

「チッ……！」

ブラック・マジシャン・ガール

ATK2000 2300

「バトルフェイズ中に召喚された『ブラック・マジシャン・ガール』には攻撃が残されている！」

「くっ……！」

「行け！ブラック・マジシャン・ガール！相手プレイヤーにダイレクタアタック！」



ブラック・マジシャン・ガールは杖に魔力を溜め、一気に爆発させる。

「ブラック・バーニング！」

「ぐわあああ！」

ジャック

LP10000

ブラック・マジシャン・ガールの攻撃を受けたジャックのライフは0となった。

## 7章・それぞれの行方

遊戯とジャックのデュエルは遊戯の勝利で幕を閉じた。

ジャックは気を失っているのか、壁にもたれ掛かって座っている。

「ハア……ハア……」

遊戯は今のデュエルでかなりの体力を消耗していた。

「くっ……早く、城之内くんを捜さないと……！」

「やはりここにいたのか」

遊戯は突然後方からした声に振り向くと、そこには白いロングコートを羽織り、茶髪で長身の青年が立っていた。

「海馬……！何故ここに……？」

「貴様のデュエルディスク反応を追っていたらここにたどり着いた」

「悪いが、今デュエルする気分には」

「フン、誰が弱った貴様など相手にするか……その男の身柄を引き取りに来ただけだ」

海馬は倒れているジャックを指差した。

「コイツを誰だか知っているのか？」

「フン、知らない……だが、コイツの使っていた『シンクロモンスター』とやらの興味が沸いたのでな」

「見ていたのか？」

「ああ、少しだがな」

「海馬……どうやらグールズ以外にも何か起きているみたいだぜ？」

「貴様に言われずとも既に調査中だ」

「フツ……とりあえずその男は任せた。俺は城之内くんを探しに行く！」

「先程、海馬コーポレーションにいるモクバから、水族館で凡骨のデュエルディスク反応をキャッチしたとの連絡が入った」

「水族館……？」

「フン、さっさと行くがいい……！」

「礼を言う……海馬！」

遊戯は会話を終えると、路地裏を抜け出し、水族館の方角へと走り出した。

（無事でいてくれ……城之内くん！）

ここはある裏通り。

普段、ほとんど人はいないのだが、今回ばかりは違う。そこを走る男女の二人の姿があったからだ。

「ねえ、遊星！グールズって一体何人いるの！？」

「分からない……！だが、今戦っても相手の思う壺だ……！とりあえず、今は逃げよう！」

遊星と十六夜の二人は、グールズの手下達に追い掛けられていた。それも一人や二人ではなく、数十人に。

（くっ……！戦えるのはオレかアキのどちらかだ……だが、それでは……）

「遊星！」

遊星とアキは走る先に数人の人影が見えた。

その中には女性や体型の大きい人まで複数いた。

そして、遊星に呼び掛けたのは

「き、鬼柳！？どうしてお前が……！？」

「話は後だ！コイツを受け取れ！」

鬼柳は何かを遊星に投げ付けると、そのままデュエルディスクを構える。

そして、遊星は鬼柳が投げた物を受け取ると、それは遊星のデュエルディスクだった。

「こんな数、チーム・サティスファクション時代に比べればマシだろ？」

「鬼柳……恩に着る！行くぞ！アキ！」

「ええ！」

そう言いつと、遊星と十六夜はグールズの方向へと振り返る。

「私達も行くわよ！」

金髪碧眼の女性が呼び掛けると、全員コクリ、と頷いた。

「よし、行くぞ……」

「」「デュエル……」

「くっそー！全然、遊星達見つからねえなー！！」

「まあ、ゆつくりと搜してたら見つかるわよ！」  
「オレ、疲れたよー！」

クロウ、龍可、龍亜の3人は童実野町の大通りを歩いていった。  
そこらじゅうでデュエルが行われており、一人一人のデュエリスト  
を確認するのだが、誰も知ってる顔はいない。

「ちきしょう！アキとジャックすらいねえし、一体、どこにいるんだ！？」

「ねえねえ」

「何だっ！？」

クロウを呼んだのは龍亜だった。

しかし、苛々した口調に龍亜は少し怯む。

「ああ！わりい龍亜！ちょっとイライラしちゃってた……それで、どうしたんだ？」

「あそこに水族館があるんだけど、気分転換に行ってみないかな？  
なんて……」

クロウは手を顎にあて、少しの間考える。

「……………よし、まあいいぜ！」

「「やったー！」」

水族館に行くことは龍亜だけでなく、龍可も嬉しいらしく、龍亜と一緒に喜んでいた。

(……………やっぱりシグナーと言えど、子供だよな……………)

嬉しそうな龍可と龍亜を見て、クロウも先程のイライラはすっかり吹き飛んでいた。

「よし、行くぜ！」

「おゝ！」

クロウ達は水族館へと向かって行くのだった。

## 8章 - 1・熱き友情を持つもの達

水族館に来たクロウ達。

何か特別な事があるのか、中は人でいっぱいだった。

「人でいっぱいだな〜っ!」

「クロウ!あれ見て!サメだ、サメ!!」

「ねえ、こっちにはクリオネがいるわ!」

「はいはい、順番に回ろうな」

「は〜い!」

やっぱり子供だな〜と思いつつ、クロウは一緒に見回る。

「ねえ!クロウ!」

「何だ?」

「あれ見て!あれ!」

クロウは龍亜に言われたとおり、指差した方向を見た。  
するとそこには『イルカショー』の文字があつた。

「ねえ!イルカショー見ようよ〜!」

「別にいいぜ」

「やった〜!」

全身を使つて喜ぶ龍亜となんだか楽しそうに笑みを浮かべる龍可を連れ、イルカショーがやっているプールへとやってきた。

とりあえず3人分の席を確保したクロウは、龍亜と龍可に見張り番をさせて、ジュースを買いに行った。

（ゲツ……ジュース一杯で、400円かよ……高エ……）

そして、ジュースを買い終わったクロウは自分の席に戻って、龍亜と龍可にジュースを渡す。

「ありがとーっ！」

「ありがとう！」

「ああ、いいってことよ！」

そうこうしている間に、プール内のステージには一人の男性がやってきていた。

「おっ！始まるみたいだぜ！」

男は巧みにイルカに乗り、まるでイルカと話しているかのようにコンビネーションはバッチリだった。

（すげえな……）

意外に見入ってる自分に気づいたクロウは、ショーでは無く観客の方を見てみた。

（子供達だけじゃなく、大人も見入ってるみてえだな……）

自分だけじゃないのか、と安心したクロウはもう一度イルカショーを見ようと視線を戻そうとした。すると、観客席の後方で見たことがある服装の人物を見つけた。

（あいつらは……！）

黒いマントで体を隠し、黒いフードを被った集団

グールズ



だ。

「オイ、デメエら」

『おい！お前、何やってんだ！』『引つ込めーっ！』

クロウの声は観客の声によって、掻き消された。

その声によると、なにやらイルカショーに部外者が入って来たらしい。

（おいおい、一体誰がそんな事を……）

と思いつつ、ショーの方を見るとなにやら見たことがある青年だった。

「ア、アイツは……！ブツブツ言ってる奴とデュエルしてた奴……！」

クロウが過去へ来た時に、大通りで野次馬に囲まれながら、緑髪の少年とデュエルをしていた金髪の青年だ。

今回は女性一人とバンダナを付けたおじいさん一人を連れている。

『おい、梶木こんなところで何してんだ！？』

『おお、城之内！見ての通り、イルカショーじゃあ！』

『いや、見ての通りと言われてもなあ……』

どうやら城之内と呼ばれた金髪の青年と、イルカショーをしている梶木と呼ばれた男は知り合いらしい。二人は何やらを言い合っていた。

『よし、こうなったらデュエルだ！梶木！』

『ヘッ！お前ごときじゃ、ワシのデッキには勝てんぜよ！』

『何イ！オレだってな』

アイツら何なんだ……、と思いつつグルズの事を後回しにして、城之内と梶木のやり取りを見ることにした。

『何〜っ！なら、そのデュエル受けてたつぜよ！』

『そうこなくちゃな！行くぜ……』

『『デュエル！』』

両者の戦いは激しいものだった。梶木のシーステルス2というコンボが決まり、『要塞クジラ』といった切り札級のモンスターが出てきたかと思えば、城之内はモンスターと魔法のコンボで『要塞クジラ』を倒し、シーステルス2を打ち破った。

二人とも一進一退のデュエルをし、最後には友情を深めあった。

（そうだよな、あれこそが『デュエル』ってものだよね……）

クロウは感動していると、自分の服が引っ張られていることに気付いた。

「ん？」

「ねえ、クロウ」

「どうした龍可？」

龍可は何か真剣な眼差しで、クロウに訴えかけてくる。

「あの人、『城之内』って呼ばれてたわ」

「ああ、確かにそう呼ばれてたけど……それがどうした？」

「前、遊星の『スターダスト・ドラゴン』が奪われた時、私と龍亜とアキさんで図書館を調べた時の記事に……」

「ああ……」

「彼の事も書いてあったの……バトルシティの『第4位』だって……」

「マジか！？それじゃあ、グルズの奴らが狙ってるのは……」  
「あの人かも……」

グルズの企みを推測したクロウ達は、会場にいたグルズ達を捜す。

だが、イルカショーの会場からは既に居なくなっていた。

「ちくしょう！もう消えてやがる！」

「クロウ！あの人もないわ！」

先程までデュエルしていた城之内まで会場から消えていた。

（くっ……何処に行ったんだ……！？）

クロウは龍亜と龍可を連れ、出入口へと走って行った。

## 8章 - 2・闇との接触

龍可と龍亜を連れ、水族館を飛び出したクロウ。

辺りを見回すが、水族館から出てきた客で思い通りに捜せない。

「くっ……！城之内って奴はどこ行ったんだ！？」

「クロウ！アレ！」

龍亜の指差した方向を見ると、誰かと話している城之内の姿が少し見えた。

「よし！行くぜ！」

クロウ達は城之内のいる方向へと走っていった。

城之内はかなり浮かれていた。

あの武藤遊戯を苦戦させた梶木に勝ったからという理由と、バトルシティの決勝戦に行くための必須アイテム、パズルカードが6枚揃ったからである。

「くっっ、やったぜ！これでパズルカード6枚だ！」

「まったくもう、浮かれちゃって……」

ラフな服装をした黒髪の女性

真崎杏子が呆れたように言う。

「ほほお、城之内もやるようになったの〜！」

バンドナで頭を包み、オーバーオールを着ている小柄な老人  
武藤双六は、城之内の成長ぶりに感心していた。

「だろ！じーさん！」

「だからって、あまり調子に乗らないの！」

「ちえっ、杏子の奴厳しいぜ……」

そんな話を続けながら、城之内達は何と無く、歩いていった。  
すると、城之内の目の前に男二人組が立ちはだかった。

一人は小麦色の肌に、金のアクセサリーを付けている青年と、白い  
髪に華奢な体つきをした青年なのだが、その白い髪の青年はもう一  
人の肩にもたれ掛かり、何やら苦しそうな表情をしている。

「お、オイ！獺良！？どうしたんだ、その怪我！？」

城之内が驚くのも無理はない。

獺良と呼ばれた白い髪の青年の腕から血が出ており、一応包帯で止  
血はしてあるが、包帯から血が滲み出ており、あまり止血の意味を  
成していなかった。

「君達、知り合いかい？」

「ああ！そうだが何があった！？」

「良かった！分からないけど、僕が歩いていたら、この人が倒れて  
いて……一応手当はしたんだけど……」

小麦肌の青年は心配そうに獺良の顔を見ながら、そう言った。

「誰か、病院について行ってあげてくれないかな……？」

「よし、ならわしが病院に連れていこう」

「じーさん、大丈夫なのか？」

双六はニコツと笑うと、「大丈夫じゃよ」と答え、ちょうど通り掛かったタクシーを停める。

そして、小麦肌の青年は停めたタクシーに獏良を乗せる。そのタクシーに双六も乗り込み、タクシーは発車した。

「……でも、一体誰があんなひどい事を……」

「分からねえ……でも、ダチをあんな目に遭わせた奴を絶対に許さねエ！」

城之内は拳を固く握り、近くにあつた電信柱を殴り付けた。

「ああ、ところでサンキューな！獏良を助けてくれて……えーっと……」

「僕は『ナム』だ」

「そつか。俺は城之内克也だ！ナムありがとう」

城之内はナムと名乗った小麦肌の男に手を差し出す。

「いえいえ、当然の事をしたまでだよ」

ナムも手を差し出し、お互いは固く握手を交わした。

「ねえ、僕も君達の仲間に入れてくれるかな……？」

「ああ、もちろん！大歓迎」

『ちよつと待ちやがれーっ！』

城之内達は突然の大声に、その方向を向く。

すると、こちらに向かって背が低い青年と、緑髪の子供二人が走ってくる。

「なっ、なんだ!？」

「ハア……ハア、クロウ、速いよ……」

「ハア……ホントね……」

三人の言葉などお構い無しにクロウは会話を進める。

「おい、お前グールズじゃないのか？」

そう聞かれたナムの眉がピクッと、動いた。

「何の事かな？」

ナムは笑顔で返事をする。

「いや、俺の勘だけだよ……グールズの手下共と戦った時、グールズ共とは違う視線を感じたんだ」

城之内達は頭に『?』を浮かべ、会話についていく事が出来ていない。

「で、その視線の感じが僕に似ていると？」

ナムは逆に問い掛けるように、クロウに返事をする。

「ああ、テメーそっくりだった」

ナムとクロウは少しの間睨み合うと、ナムが先にクスリと笑って目を逸らす。

「それは言い掛かりですよ。そのグルズ……だったかな？その人の視線が僕にそっくりだっただけじゃないかな？」  
「ぐっ……」

流されることは分かっていた。

それは当たり前前で、クロウには信用される証拠がないのだ。  
ナムがグルズだという決定的証拠は。

「おい！ナムの事を悪く言うなよ！」

そばにいた城之内がとうとう我慢できなくなったのか、クロウに凄い勢いで詰め寄る。

「ナムは俺達のダチなんだ！ダチを疑う奴何ぞあ、俺が許さねえ！」

「……………誰の為に…………」

「ああっ？」

細りと呟いたクロウに、威嚇と聞き返しの意味でさらに詰め寄る。

「誰のためにこんな事やってると思ってやがる！！」

城之内だけでなく、杏子、龍亜、龍可の三人もクロウの声に驚く。

「はあ……？お前、何言っ」

「テメエがグルズに狙われてる恐れがあるから、こうして走り回って捜したんだろうが！！」

城之内は話についていけない。

「だ、誰もそんな事」



「しなくちゃ、未来が変わるんだよ！悪い方向へな！」

クロウが叫んだ後、外だというのに沈黙の空気が流れる。

（クロウ……あれ、皆が見つからないイライラもプラスして怒ってるよね）

（そうね……よっぽど溜まっていたんだわ……）

もはや、全てのイライラをぶつけているんじゃないかというくらい  
の逆ギレに双子達は苦笑いをしていた。

すると、沈黙を破り、龍可が何かを思い出したかのようにこう言った。

「でも、私……貴方の顔、見たことあるわ……」

龍可がナムの目をじっと見る。

「誰かと間違っているんじゃないかな？」

「いいえ、確かバトルシテーターナメント準優勝者……『マリク・  
イシユータル』……」

その言葉に城之内達は驚きの顔を隠せなかった。

## 9章・1・龍と千年の出会い

「『ニトロ・ウォリアー』でダイレクトアタック!!」

「『ローズ・テンタクルズ』でダイレクトアタック!」

「『インフィルニティ・デストロイヤー』!ダイレクトアタック!」

「『フルール・ド・シュバリエ』でダイレクトアタック!」

「『ゴヨウ・ガーディアン』!ダイレクトアタック!」

その他数名のデュエリスト達が、黒マント達にモンスターで攻撃する。

その衝撃を受けた黒マント達は次々と倒れていった。

「これで、全員か……」

「ああ、そうみたいだ」

遊星と鬼柳は辺りを見回し、誰もいないことを確認する。

「しぶとかったわね……」

「ええ、そうね……」

金髪碧眼の女性                      シェリーがそう呟くと、近くにいた十六夜が返事をする。

「ところでさっきの質問だが、何故、お前達がここにいるんだ?」

「それは                      」

少し時を遡り、ここは旧モーメント跡地。

「まさか、遊星の旧友や世界のトップモデルまでここに来るとはね」  
シェリーが横を見ると、そこにいたのは水色に近い長い髪をし、鋭い目つきをした、顔にクロウや遊星と同じ黄色いラインが入っている青年　鬼柳京介と、美しい顔立ちに女性達が羨むボディラインを持った女性　ミステイ、さらにもう一人、巨大な体を持っているが、何処か優しそうな印象を持っている男性　ボマーが立っていた。

「俺は遊星に借りを返さなくちゃならねえ。だからここに来た」  
「私もアキさんのピンチには駆け付けるわ」

「私も親愛なる友に危機が迫れば、いかなる時にでも駆け付ける」  
「……………まあ、いいわ……………行くわよ！」

「「ああ！（ええ！）」」

シェリーの合図に全員は大きな声で返事をした。  
そしてシェリー、ミゾグチ、牛尾、ブルーノ、鬼柳、ミステイ、ボマーの七人は旧モーメント内部へ入る。

「これが……………旧モーメント……………」

「前にも来たが、こんな紅い光は放ってなかったぞ？」

牛尾は遊星とルドガーが闘った時もここにいたが、あの時や遊星が飛び込んだ時のような虹色の光ではなく、紅い光が放出されていた。

「あそこから赤き龍の力を感じる」

ボマーがそう言い、指差したのは紅き光の中。

「まさか、あそこに遊星達がいるの！？大変だあ！」

「落ちてブルーン！まだ遊星達がいると決まった訳じゃ

「いや、いるぜ」

牛尾の意見に真っ向から反抗したのは鬼柳だ。

「なっ、何でいるって分かる！？」

「見えてこねえか？」

「見えてこねえかって……うおわ！」

驚く牛尾の視線の先にあるのは、紅く光る輝きの中に浮かび上がる街。

「一体、何処に繋がっているのか……」

「分からないわ。だけど、人の気配を感じる……行って見ましょう」

そのシェリーの言葉にミゾグチは反論を唱える。

「お嬢様！いくらなんでも危険です！ここは不動遊星に

そんなミゾグチの言葉を遮るように牛尾が言った。

「いや、俺は行くぜ……！御影さんを助けにな！」

その言葉とともに牛尾は紅い光の中へと飛び込む。

すると、光がさらに強くなり、光に包まれた牛尾は消えていった。

「俺も行くぜ」

「私も行くわ」

「私も……」

牛尾につられるように、鬼柳、ミステイ、ボマーが飛び込む。

「僕も遊星の助けにならなくちゃ！」

そして、ブルーノも飛び込んだのだった。

「あの人達が行って、私達だけが逃げるなんてできないじゃない」  
「……………」

シェリーの言葉に反論できないミゾグチは、諦めたようにこう言った。

「では、私達も行きましょう」

「ええ」

そう言うと、シェリーとミゾグチは光の中に飛び込んでいった。

「そうか……………それでここに来たんだな」

「ええ、そうよ」

シェリーの話聞き終わると、遊星は止まっていた足を再び動かして、表通りの方向へと歩き出す。

「遊星！どこ行くの！？」

その十六夜の質問に遊星はこう答える。

「とりあえず、ジャック達を捜そう」  
「ああ、そうだな…… ったくジャックやクロウの奴、相変わらずだぜ」

鬼柳はため息をつく。

「よし、とりあえず何チームかに別れよう」  
「じゃあ、私はミゾグチと二人でこの街の事を調べるわ」  
「ああ、頼んだ」

シェリーとミゾグチは二人で表通りの人混みへと消えていった。

「じゃあ、僕は遊星と」  
「遊星と行くのは私よ」

ブルーノの言葉を遮って、遊星の手を掴んだのは十六夜だ。

「なっ、なんでアキさんが」  
「ねっ、いいでしょう？ 遊星」  
「あ、ああ、別に構わないが……」

遊星も十六夜に気圧され、承諾する。

「じゃあ、牛尾。ブルーノと鬼柳を頼む」  
「ああ、別に構わないんだが……」

牛尾はチラリと後ろを見る。

『ぜってー俺と遊星が組めば、満足できるのによ……！』  
『なんで、遊星とアキさんが……』

（すつげー、嫉妬的なオーラが出てるんだが……）

遊星はそんな事は気にも留めず、残ったメンバーのミスティとボマーを見る。

「二人には、シェリー達と同じく、この街の事を調べて欲しい」

「この街を？それなら、あの二人で十分じゃないのかしら？」

「いや、『バトルシティ』の事を調べて欲しいんだ」

「今、行われているこのイベントの事か？」

「ああ……そのバトルシティにグールズという奴らが潜んでいる。そいつらの動きが知りたい」

「分かった……では、すぐにでも行こう」

「ええ」

ミスティとボマーも人混みの中へと消えて行く。

「俺達は何をすればいいんだ？」

二人を任された牛尾は、目的を聞いていないのを思い出し、遊星に尋ねる。

「牛尾達はグールズの撲滅に向かってくれ」

「分かった」

「牛尾は何処に何があるとか分かるのか？」

「ああ、童実野町はな……」

「そうか……じゃあ、頼んだぞ」

「ああ」

牛尾、鬼柳、ブルーノの三人は裏通りの路地裏を通っていった。

「じゃあ、行くぞアキ」

「ええ……！」

遊星と十六夜は表通りへと出る。すると、一人の少年が走っているのが見えた。

首から金の逆三角錐のアクセサリーをぶら下げ、変わった髪型をした少年が。

（あれはまさか……！？）

遊星は十六夜の手を引っ張り、走り出す。

「ちよっ……遊星！？」

「すまないアキ！ちよつと俺に付き合ってくれ！」

その言葉に少し顔を朱くした十六夜だが、すぐに雑念を振り払い、遊星に手を引かれながら、少年を追い掛けるのだった。



## 9章 - 2・再会

遊星は十六夜と共に、ある少年を追っていた。

その少年は首から逆三角錐のアクセサリーをぶら下げ、何処かに向かつて険しい表情で走っている。

「遊星！あの人って図書館で調べた時の資料に写ってた」

「ああ、そうだ……！前に俺と一緒に闘ってくれた伝説のデュエリスト  
武藤遊戯さんだ」

遊星が前、パラドックスに『スターダスト・ドラゴン』を奪われた時、巨大な力を持つパラドックスを相手にしても一歩も引かず、遊星と精霊が見える少年と共に闘ったあの伝説のデュエリストだ。

（この世界に危機が訪れるのなら、狙われるのはあの人だろう……  
なら、守って見せる！あの人を、この世界を！）

「な、何なんだコレは……」

やっと、水族館にたどり着いた遊戯だったが、そこには異様な光景が広がっていた。

水族館付近の建物が破壊され、まるで戦争直後のような有様になっていた。

「一体、誰がこんな事を……」  
『遅かったじゃないか、遊戯』

その声に振り向いた遊戯は、驚嘆の顔をする。  
それもそう、そこにいたのは

「じ、城之内くん……！？」

「ったくよ……待たせやがって……」

「これは一体……」

「ん？この状況の事か？それはな……オレがやった」

遊戯は驚きの顔を隠すことができない。

「ふう、さあーて遊戯……」

「……………！」

「次はお前の番だ」

戦わなければならないのか、そんな思いが遊戯の胸中に渦巻く。  
だがそんな時、遊戯の耳に一つの声が響く。

『遊戯さん！』

その声を聞いた遊戯は、声のした方向へ振り向く。  
すると、そこには蟹のような髪型をした青年と紅いドレスを来た女性  
性が立っていた。

## 番外編・シグナーズトーク

遊星「さて、白熱しているバトルシティ編だが……皆、何か意見はあるか？」

龍亜「はいはい！」

遊星「何だ龍亜」

龍亜「洗脳されてる時のジャックが、気持ち悪い！」

ジャ「何だとーっ！オレも好き好んであんな口調などせんわー！！それに龍亜！貴様シグナーじゃなかるうー！！」

遊星「落ち着けジャック！オレもあんな丁寧なジャックはジャックと認めない！」

ジャ「そうだ！オレはあんなに丁寧では無く、がさつ……って遊星！結局、貴様もオレをバカにしているではないかー！！」

遊星「それじゃあ、次の意見はないか？」

ジャ「オレの話を聞けーっ！！」

アキ「はい」

遊星「アキは何だ？」

アキ「私の出番が少ない気がするわ」

遊星「そうか、それは作者と検討する必要があるな」

ジャ「貴様！オレの時と全く態度が違うではないか！」

遊星「静かにしてくれジャック！今、俺達は真剣な話をしているんだ！」

ジャ「そのフレーズ、前にも聞いたわ！！」

遊星「とりあえず、アキと龍可の台詞を増やしてくれと、作者に抗議しておこう」

龍可「えっ、私まで？ありがとう遊星……！」

アキ「ありがとう遊星！」

遊星「そういえばクロウは何も話していないが……」

クロ「いや、別に言うことがねえんだよな……出番はかなり貰ったし、ストーリーの中心核に真っ先に突っ込んだしょ」

遊星「そうか……まあ、クロウも次回大変な事になる訳だが」

クロ「はあっ！？聞いてねーぞ、そんな事！」

遊星「言っていないから聞いてないのも当然だ」

クロ「くっそー！次回、どうなりやがんだオレ！？」

遊星「それは次回のお楽しみだ」

ジャ「何か上手いこと宣伝をしていないか？アイツ……」

アキ「まあ、いいじゃない」

龍可「そうね」

龍亜「あつ！オレからもう一つ！」

遊星「何だ？」

龍亜「俺達もそろそろ苗字が欲しい！」

遊星「それはアニメスタッフまたは原作者に言ってくれ。ここは管轄違いだ」

龍亜「そっか……」

遊星「まあ、こんなところだろう。ここまで読んでくれた読者達、礼を言う」

アキ「ありがとう」

龍亜「ありがとう！」

龍亜「ありがとう！」

クロ「サンキューな！」

ジャ「……………」

クロ「何か言えよジャック」

ジャ「フン！キングたるオレが何故礼など」

クロ「そんな事言つてると、またあの丁寧口調のジャックにされるぞ」

ジャ「……礼を言つ」

遊星「それじゃあ、また本編で会おう」

## 9章・3・もう一つの再会

『遊戯さん!』

その声に遊戯は振り向くと、そこには蟹のような髪型の青年  
不動遊星、と紅いドレスを着た女性  
十六夜アキが立って  
いた。

「き……君達は?」

「説明は後でします!とりあえず、この状況をどうにかしましょう  
!」

「そうだな……!」

そう言つて遊戯は城之内の方向へ向き直す。

「おつ、主役が揃つたみたいだな……もう出てきてもいいぜ?」

城之内が水族館側の方へ向かつて呼び掛けると、そこからオレンジ  
の髪をヘアバンドで纏め上げた少年が出てきた。  
それを見た遊星と十六夜は驚愕した。

「く、クロウ!?」

「そつ、そんな!どうして!?」

その反応を見たクロウはニヤリと笑つ。

「オレは生まれ変わったのさ!お前達を抹殺するためになあ!」

「クロウ!目を覚ませ!」

「クロウ!」

「ハハハハ！無駄だぜ！」  
「くっ……！」

遊星と十六夜の顔に焦りの表情が現れ、冷や汗が流れ落ちる。  
そんな時、遊戯が遊星に話しかける。

「君、名前は何て言うんだ？」

「不動遊星です」

「遊星……恐らく、城之内くんと君の友達マリクによつて、洗脳されている！」

「……！ それじゃあ……」

「何か、洗脳を解く手段があるはずなんだが……！」

そんな遊戯に思考時間を与えない為か、城之内がカードとデュエルディスクを構える。

「そんな暇は与えねエ！魔法カード！『ファイヤー・ボール』……！」  
油断した遊戯に火の玉が迫る。

「くっ……！」

「罨カード発動！『リフレクト・ネイチャー』……！」

城之内が放った火の玉は十六夜の発動した罨カードによって反射され、城之内の元へと向かう。

「チッ……！」

跳ね返った火の玉を城之内は紙一重で避けた。



「あぶねえ……自分のカードにやられるところだったぜ……」

今の力を見た遊星は一つの事に気付く。

「今のはサイコパワーか!？」

そう、城之内が放った『ファイヤー・ボール』には、焼けるような熱さがあつた。

そして、その事と自分の事に驚いているのは十六夜だ。

（あの人にサイコパワー……!？そして、何故私にもサイコパワーが……？）

十六夜の戸惑いも仕方がないことだった。

十六夜のサイコパワーは、前にDホイールの練習走行中に失われたはずだったのだが、さっき城之内が『ファイヤー・ボール』を放つた際に発動した『リフレクト・ネイチャー』には、サイコパワーが宿っていた。

（どうして……？）

「どうして？って顔をしてるなあ？」

「……」

城之内には十六夜の考えている事が分かっていたらしい。

「教えてやるよ……これは俺の『主』の力さ！」

「何っ……！また『主』だと？」

「また……？遊戯さん何か心当たりがあるんですか？」

「いや、さっき闘った金髪の男もそんな事を言っていたからな」

「金髪の男？」

「ああ……『レッド・デーモンス・ドラゴン』という見たことのないモンスターを召喚してきたんだ」

「……！」

そのモンスターの名前を聞いた瞬間、遊星と十六夜には誰か分かってしまった。

（そんな……ジャックまで……！）

（その主とやらに操られていたのか！？）

遊星と十六夜の様子を見ていた城之内とクロウが痺れを切らしたかのようにこつ告げる。

「もういいか？ 最後のお話はよお？」

「さっさとお前らを片付けて、主の元に帰らねえとな」

「くっ……やはり、やるしかないのか……？」

城之内達とデュエルをする気が起きない遊戯に、遊星は一つの提案をする。

「遊戯さん、俺達で相手をしましょう！」

「遊星……！？」

「俺達であの二人の目を醒まさせるんです！」

「……分かった、このデュエル受けて立つぜ！」

遊星と遊戯はキッ、と城之内とクロウを睨み付ける。

「俺はこのデュエルで二人の目を覚ましてみせる！」

「果たして、そう上手くいくかな？ 行くぜ……！」

「デュエル！」

## 9章 - 4・非道なデッキ

「行くぜ、俺のターン！」

遊戯&遊星（遊戯）

LP 4000

手札 6枚、5枚

「俺は『磁石の戦士』を守備表示で召喚！」

磁石の戦士

DEF 1700

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

遊戯&遊星（遊戯）

LP 4000

手札 3枚、手札 5枚

『磁石の戦士』《守》

伏せ 2

遊戯の行動に、城之内は敵を見下すような笑みを浮かべる。

「ケツ！それだけかよ？つまんねえ！」

城之内は笑みをやめ、遊戯を強く睨み付けた。

「俺が教えてやるよ……本物のデュエルをな！」

城之内&クロウ（城之内）

LP 4000

手札 6 枚、5 枚

「へッ……」

「……？」

城之内は口の端を吊り上げて、笑みを浮かべると、手札のカードを 3 枚、魔法・罠ゾーンにセットした。

「このターンで、焼き切つてやる！俺は手札から『火炎地獄』を 3 枚発動！」

遊戯の周りを炎が囲む。

「『火炎地獄』は相手に 1000 ポイントのダメージを与える！」

「何ッ！？」

「さらに俺はそれを 3 枚発動した……」

「3000 ポイントのダメージだと！？」

遊戯の周りの火炎が、遊戯を完全に包み込んだ。

「ぐわあああああ！」

「遊戯さん！」

遊戯&遊星

LP 4000 1000

立体映像なので、実際に燃えることはないが、それでも目を覆いたくなる光景だった。

が、それを城之内とクロウは笑みを浮かべて見ていた。

「くっ……………！」

「どうだ遊戯！？火炎の地獄を味わった感想はあ！？」

「……………」

「フン、声も出ねえか……『火炎地獄』は俺達にも500ポイントのダメージを与える」

城之内&クロウ

LP 4000 2500

「だが、言ったよな遊戯？俺はこのターンで“焼き切る”と」

「くっ……………！」

「俺は手札から『ファイヤー・ボール』を発動！」

城之内の頭上に先程、遊戯を襲った火の玉が出現。

「コイツの効果は相手に500ポイントのダメージを与えるんだ……地獄の後は、じわじわいたぶってやる……………」

火の玉は遊戯に照準を定め、発射された。

「遊戯さん！」

遊星の叫びも虚しく、火の玉は遊戯に直撃した。

「がは……………っ……………！」

遊戯&遊星

LP 1000 500

「ハハハハッ！不様な遊戯！だが……お前にはお似合いだぜ！  
！」

「……………」

「あまりの恐怖に声も出ないのかあ？」

「ああ……怖いぜ……」

「ああっ？」

遊戯のあまりに小さく呟いた声に、城之内は聞き返すそぶりを見せる。

「デュエリストの心を失った、城之内くんの心が……」

「……フン、戯れ事だな……」

「城之内くん！デュエリストの心を思い出してくれ！」

「……………これで最後だ。もう一枚の『ファイヤー・ボール』を發動」

「城之内くん……」

遊戯の思いは届かず、城之内の頭上に2発目の火の玉が出現し、その玉は遊戯に向かって発射された。

「くっ……………！リバースカードオープン！『精霊の鏡』……」

フィールドに精霊が現れ、その精霊が持っている鏡に火の玉が吸い込まれた。

「何っ！」

「『精霊の鏡』は相手がプレイヤーを対象とする魔法を使用した場合に発動でき、その対象を移し替えることができる！」

精霊が鏡を向けた方向は

「『精霊の鏡』よ！その対象を……………その対象を“城之内”くん  
に！..」

精霊の鏡から再び火の玉が解き放たれ、その火の玉は城之内に命中  
した。

「……………」

城之内&クロウ

LP2500 2000

「城之内くん！」

「……………へへッ、そうこなくちなあ、遊戯…………お互いに潰しあ  
つてこそ、デュエルだよな遊戯？」

「くっ……………」

城之内は怪しげな笑みを浮かべると、手札の最後のカードを使う。

「俺は『リトル・ウイングード』を守備表示」

リトル・ウイングード

DEF1800

「ターンエンドだ」

城之内&クロウ（城之内）

LP2000

手札0枚、5枚

『リトル・ウイングード』《守》



「俺のターン!!」

遊戯&遊星（遊星）

LP500

手札3枚、6枚

『磁石の戦士』

伏せ1

## 9 章 - 5・真紅眼の黒竜

「（相手はダメージを与える魔法で攻めてくるデッキ！ならば……！）俺は手札の『ダメージ・イーター』を墓地に捨て、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン

ATK700

「さらに、『チューニング・サポーター』を守備表示で召喚！」

チューニング・サポーター

DEF300

一通りのシンクロ素材が揃った遊星だが、ここで何故かためらった。

（くっ……！ここで『ジャンク・アーチャー』を召喚し、一気に勝負を決めることが出来るが……それでは二人を目覚めさせる事はない……！）

そう、いくら遊星と遊戯がこのデュエルで勝っても意味はないのだ。このデュエルでの本当の勝利は二人を目覚めさせることにある。

「（なら、オレは！）レベル1『チューニング・サポーター』にレベル5『クイック・シンクロン』をチューニング！」

クイック・シンクロンが5つの輪となり、その中心にチューニング・サポーターが飛び込む。

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす！光差す道となれ！シンクロ召喚  
！」

輪に囲まれたチューニング・サポーターが溢れんばかりの光を放つ。

「轟け！『ターボ・ウォリアー』！！」

赤い体をもった巨大ロボが遊星のフィールドに出現した。

ターボ・ウォリアー

ATK2500

「遊星もシンクロ召喚を使えるのか！？」

遊星がシンクロ召喚を行ったことに遊戯は驚く。

「さらに『チューニング・サポーター』の効果でカードを一枚ドロ  
ーする！」

遊星は静かにドロースると、目に力を込める。

「遊戯さんの『磁石の戦士』を攻撃表示に変更し、バトル！！」

磁石の戦士

DEF1700

ATK1400

「行け！『ターボ・ウォリアー』！『リトル・ウィングガード』を攻  
撃！」

ターボ・ウォリアーはリトル・ウイングガードに狙いを定めると、後ろ脚で地面を蹴り出し、リトル・ウイングガード目掛け飛んで行く。

「アクセルスラッシュ！」

ターボ・ウォリアーは遊星の掛け声と同時に右手を突き出すと、そのままリトル・ウイングガードに突撃した。  
直撃したリトル・ウイングガードは爆風を起こし、破壊された。

「くっ……！」

「そして『磁石の戦士』でダイレクトアタック！」

磁石の戦士が、手にある剣で城之内の胸元を突き刺した。  
当然、立体映像なので、実際に怪我をすることはないが衝撃は現実となる。

「ぐあっ！」

城之内&クロウ

LP2000 600

「城之内くん！」

城之内は無言で体制を立て直す。

「やってくれるじゃねえか……不動遊星……」

「（くっ、やはりダメなのか……！）オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド……！」

遊戯&遊星（遊星）

LP500

手札3枚、2枚

『ターボ・ウォリアー』《攻》

『磁石の戦士』《攻》

伏せ3

「へっ、やっとオレのターンか……」

城之内&クロウ（クロウ）

LP600

手札0枚、6枚

「俺は手札から『サンダー・ボルト』を発動！」

「なっ！」

天空から降り注いだ雷がターボ・ウォリアーと磁石の戦士を直撃する。

「『サンダー・ボルト』は相手フィールド上のモンスターを全て破壊するぜ！」

雷によって発生した砂煙が消えた時、遊星と遊戯の場には誰もいなかった。

「くっ……確か、『サンダー・ボルト』も禁止だったはず……」

「ハハハハハ！俺達は好きなように禁止カードを使えるんだぜ！」

「くそっ……！」

「さあ、デュエルを続けるぜ？オレは『BF-黒槍のプラスト』を召喚！」

槍をもった鳥人が城之内・クロウのフィールドに舞い降りる。

B F - 黒槍のブラスト

ATK1700

「ブラストでダイレクトアタック!!」

黒槍のブラストが槍を構え、遊星に突撃する。

だが、その槍は鉄で出来たかかしによって防がれた。

「なっ!?!」

「俺は罨カード『くず鉄のかかし』を発動した。相手が攻撃して来た時、その攻撃を無効にする!そして、その後このカードは墓地へ送らず、再びセットする」

「チッ、厄介なカードを……」

遊星が出した鉄のかかしはカードの中へと戻り、伏せ表示となる。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ!」

城之内&クロウ(クロウ)

LP600

手札0枚、2枚

『B F - 黒槍のブラスト』《攻》

伏せ2

(何とか攻撃は遊星が防いでくれたが、次の俺のターン……!このドロで城之内ちゃんと遊星の友を救うカードを引かなければ……!)

遊戯の顔に一筋の汗が流れる。

（俺は怯えているのか……？友を救えないかもしれないという恐怖に……）

遊戯は自分の手を見た。

その手は震え、まるでドローを拒否しているかのようなだった。

（俺は　　）

「遊戯さん！」

突然の大声に遊戯は遊星の方を見る。

「遊星……」

「遊戯さん！最後まで諦めてはダメです！俺は遊戯さんや十代さんから色んな事を学んだんです！だから、二人を……二人を助けます！う！」

「遊星……！」

近くにいた十六夜もその言葉に何かを感じとった。

この二人なら……この二人ならやってくれるというそんな予感を。

「……………フッ」

遊戯は再び自分の手を見た。そこには先程までの震えは無く、寧ろ新たな希望を宿したかのように感じた。

『僕もついてるよ……！』

遊戯は隣を見る。

そこにはもう一人の遊戯が立っていた。

「そうだな……俺は一人じゃない……相棒や城之内くん、杏子に本田くん、そのほかにも沢山のデュエリストがついている」

カードを引く手に力を込める。その手の上にはもう一人の遊戯の手が置かれている。

そして遊戯は静かにドロォした。

遊戯&遊星（遊戯）

LP500

手札4枚、2枚

伏せ3

「俺はリバーズカードを発動するぜ！『ソウル・チェンジ』！！」

遊戯のデッキから『ブラック・マジシャン』のカードが浮かび上がる。

「『ソウル・チェンジ』は自分のデッキからモンスター1体を除外し、その除外したモンスターと同じレベルのモンスターを手札から特殊召喚する！」

「何っ！」

「俺はデッキから『ブラック・マジシャン』を除外し、手札の『真紅眼の黒竜』を召喚する！」

遊戯と遊星の場に現れたのは、紅い眼をした黒き竜だった。

「レッドアイズ……」



城之内の表情に変化があった。さっきまでの邪悪な表情では無く、何かを待ち望んでいたかのような表情をしていた。

「城之内くん！君の魂のカードで、城之内くんの目を覚まさせてみせるぜ！」

## 番外編・賑やかな七夕

ここは童実野町にあるゲーム屋『亀』。言うなれば、遊戯と双六が住む家である。

その家の前で遊星は青い空を見上げていた。

「今日は七夕だな」

今日は遊戯達の世界では7月7日で、天の川で彦星と織姫が会う日である。

「遊星がそんな事言うなんて珍しいね」

隣にいた龍亜が遊星に話しかけた。

「ああ、この日はマーサの家で願い事を短冊に書いたりしていたかな」

「へえーっ！遊星はどんな願い事を書いたの？」

「秘密だ」

「えーっ！？遊星のケチーっ！……でも、その願いは叶ったの？」

「ああ、叶ってるさ」

遊星と龍亜の会話が終わった頃にゲーム屋『亀』のドアが開く。

その中から出てきたのは、十六夜と龍可だ。

「遊星、みんなが七夕の準備をしてくれているわ。遊星も来て？」

「分かった、今行く」

十六夜の呼び掛けに答え、遊星と龍亜はゲーム屋の中へと入ってい

った。

ゲーム屋のリビングではお祭り騒ぎで七夕の準備が進んでいた。

『おい！ジャック！笹の葉が落ちていつてるじゃねえか！』

『うるさいぞクロウ！俺だって慎重に持っている！』

『竹でフルスイングして、何処が“慎重に持つてる”だ！全然慎重に持ってねエじゃねえか！』

『ぬうつ！城之内まで……！』

何やら賑やかな雰囲気には遊星は少し驚く。

「もうすっかりこの時代にも慣れたみたいだな」

「ええ、そうみたいね」

遊星とアキが話していると、一人の少年が歩いてくる。

「遊星くん！」

「遊戯さん？その格好はどうしたんですか……？」

遊星が疑問に思ったのは、遊戯の服装についてだ。

遊戯が着ていたのは着物だったからだ。

若草色の着物にいつもの千年パズルを首からさげている。

「これは“彦星らしく”って、杏子に着せられて……」

「ハハハ……」

予想通りの答えに遊星は苦笑いを浮かべる。

そんな時、隣にいた十六夜が少し怪しげな笑みを浮かべる。

「どうしたんだアキ？」

そう聞いた瞬間、遊星の背筋に冷たいものが走る。

「遊星にも着てもらおうよ？」

「ッ……！おっ、俺は」

着物を持って迫り来る十六夜に遊星は後退りをしたのだった。

「わあーっ！遊星、似合う！」

龍可が目を輝かせて見ているのは、青い着物に身を包んだ遊星だ。心なしか遊星は少し拗ねたような表情をしていた。

（アキが俺を呼んだのはそういう事だったのか……）

その肝心の十六夜は今、用事があるらしくこの場にはいない。

「遊星！写真撮っていい！？」

龍可は少し興奮気味で遊星に頼む。

「いや、出来ればやめ」

「ダメなの？」

涙目で訴えかけて来る龍可に負け、遊星は渋々撮影を許可した。

「（いつもの遊星らしさがないね）」

「（そうだな。今日ばかりは女性陣が強いからな）」

龍亜とクロウは女性陣に押されている遊星に同情しながら、苦笑いしていた。

所変わって、ここはゲーム屋『亀』の外。  
そこに一人の男が立っていた。

「さあ、七夕特別企画！『真の彦星・織姫決定デュエル』を始めようではないか！」

なぜか、ジャックの掛け声で始まった彦星・織姫決定デュエル。  
その異様な雰囲気になえ切れず、クロウがジャックに詰め寄る。

「ジャック！これはどういう事だ！」

「俺だつて知らん！それは城之内に聞けばよからう！」

「城之内だあ？」

クロウは少し離れた場所にいる城之内に視線を向ける。

その視線に気付いた城之内はクロウにピースサインを送る。

「……全然わからん」

ジャックは頭に“？”を浮かべるクロウから逃れ、司会を続ける。

「とりあえず、選手入場！」

ゲーム屋の中から出てきたのは、遊戯と杏子だ。  
遊戯は先程と同じ若草色の着物だが、人格交代し、今は名もなき王の魂が表に出ている。

「まったく相棒の奴、一体何を考えているんだ……」

不機嫌そうに呟く遊戯の隣を歩いている杏子は淡い桃色の着物に身を包み、頭には様々な飾りがしてあった。

（っ……！遊戯と一緒にデュエルなんて……足、引つ張らないかな……）

杏子は初心者からか、少し緊張した顔をしている。

「そして、もう一組！」

続いてゲーム屋から出てきたのは遊星と十六夜だった。  
遊星も先程と同じ紺に近い青の着物を着ている。

「……………ハア」

重たい溜め息を吐く遊星の隣を歩いているのは、鮮やかな紅の着物に身を包み、頭には紅の髪を引き立たせている飾りをした十六夜が歩いていた。

（遊星とのタッグ……絶対に勝ってみせる！）

と、妙に意気がいった十六夜だった。

「まあ、いくらイベントとはいえ、デュエルとなったら話は別だ。本気で行くぜ？遊星」

「望むところです……！遊戯さん」

遊戯と遊星は固く握手をする。

「よっ、よろしくねアキさん！」

「ええ、こちらこそ」

杏子と十六夜は軽く握手をしたのだった。

「それではいくぞ！」

「デュエル！！」

お互いは見るものを引き付けるようなデュエルをした。

お互いに一進一退で、初心者に近い杏子がいるにも関わらず、遊戯は杏子を守りながら、高度なテクニクで遊星&十六夜タッグを追い詰め、一方の遊星達も遊戯を相手に善戦した。

が、最後に『ブラック・マジシャン』の攻撃が遊星達に当たり、遊戯達の勝利となった。

「さすがでした……遊戯さん」

「いや、遊星もかなり手強かったぜ」

「アキさん、強かったわ……私じゃ全然敵わない……」

「そんな事ないわよ？杏子も遊戯さんを上手くサポートして、とても初心者とは思えなかった」

お互いがお互いの事を励ましあい、このデュエル大会は終了した。

当たりはすっかり暗くなり、星が見え始めていた。

皆は急いで竹をゲーム屋の外に出した。

龍亜や龍可、城之内、クロウを始めとした大人達も短冊に願い事を書いて笹に吊す。

『ジャックはなんて書いてんだ？……ホウ、“もう一度、キングにならせろ”と……』

『ぬう！クロウ、貴様ああ！！』

『っ！かな、ジャック。お前は願い事くらい上から目線をやめろ！』

『黙れ！城之内！』

『何ーっ！』

騒いでいるジャック、クロウ、城之内を見て、遊戯は苦笑いをする。

「ハハハ……賑やかだね」

「ホントね……でも」

杏子は空を見上げる。

そこには様々な星が散らばって、綺麗な天の川を作り出していた。

「私は好きだな……こういう雰囲気……」

隣にいた遊戯も杏子の笑みを見ると、自然と笑みが浮かんできたのだった。

一方、少し離れた所で遊星と十六夜が二人で空を眺めていた。

「アキはもう願い事を書いたのか？」

「ええ、『この仲間達とずっといれますように』って書いたわ」

「そうか……アキらしいな」



遊星の言葉に十六夜はほんのり頬を朱く染める。

「そ、そういう遊星は願い事書いたのかしら？」

「いや、書いてない」

「どうして？」

その十六夜の言葉に、遊星は目をつむり、こう答えた。

「俺の願いはもう叶っているからな」

「

遊星は空に浮かぶ天の川を見ながら、過去にマーサの家で書いた『一度繋がった絆が永遠に続きますよう』という願い事を思い出していたのだった。

## 9 章 - 6 ・ 冥府の力と真の敵

城之内の魂のカードで城之内を目覚めさせる事を決意した遊戯。

「（この一撃で、二人の目を覚まさせる！）俺は『真紅眼の黒竜』で『BF - 黒槍のプラスト』で攻撃するぜ！黒炎弾！」

レッドアイズは口に黒い炎を集結させ、一気に黒槍のプラスト目掛けて放出する。

「チツ！リバースカードオープン！『破壊輪』！！」

レッドアイズの首に手榴弾がついた輪が装着された。

「なっ……！！」

「『破壊輪』はフィールド上のモンスター一体を破壊し、そのモンスターは攻撃力分のダメージをお互いのプレイヤーは受ける」

レッドアイズに装備された破壊輪が爆破し、辺りに爆風が巻き起さる。

が、その爆風の中からレッドアイズが上空へ飛翔した。

「なっ、何で破壊されてねえんだ！？」

遊戯がフツ、と笑う。

「俺は手札から速攻魔法『ダメージ・オフ』を発動した。『ダメージ・オフ』は発動したターン、対象モンスターはカードの効果では破壊されなくなる」

「チツ……それで『真紅眼の黒竜』が破壊されず、ダメージも発生しないという訳か……」

間一髪でクロウの『破壊輪』を回避した遊戯は、再び攻撃宣言を行う。

「行けっ！レッドアイズ！黒炎弾！」

再び、黒槍のブラストにレッドアイズの火球が発射された。

そして、今度は何にも遮られる事なく、ブラストに命中。ブラストは叫び声を上げながら消滅した。

城之内＆クロウ

LP 600 100

「何っ！？」

「ライフが0になっていないだと！？」

「ヘッ、俺もカードを発動させてもらったぜ！永続罫！『冥界の王との契約』！」

「『冥界の王との契約』……？」

「このカードは500ポイントのライフを払って発動できる。このカードが発動しているかぎり、俺達はあらゆるダメージを受けない」  
「くっ……！」

遊戯と遊星の顔には焦りの表情が浮かぶ。

当然、近くにいる十六夜にも焦りが生じる。

「じゃあ、あのカードを破壊しないかぎり、あの二人はダメージを与えられないの……？」

「くっ……、俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド……！……遊星、城之内くんの『真紅眼の黒竜』で、二人の目を覚まさせてくれ……！」

「分かりました、遊戯さん！」

遊戯&遊星（遊戯）

LP 500

手札 0 枚、2 枚

『真紅眼の黒竜』《攻》

伏せ 3 枚

「俺のターンだ！ドローっ！」

城之内&クロウ（城之内）

LP 100

手札 1 枚、2 枚

『冥界の王との契約』《永続罨》

「俺は『強欲な壺』を発動する！この効果でデッキからカードを2枚ドロー……！」

城之内はデッキから引いたカードを確認した瞬間、ニヤツと笑った。

「コイツはいいカードを引いたぜ……！このカードでその忌まわしい竜を消し去ってやる……！」

「……？」

「相手フィールド上にカードが2枚以上存在している時、コイツは特殊召喚できる！」

城之内がカードを掲げると、黒い霧が辺りを包み込んだ。

「現れる！『DT-カオス・エンジェル』！！」

DT-カオス・エンジェル

ATK0

城之内達の場に悪魔と天使の翼を持った堕天使が現れる。

「攻撃力0……！？」

遊戯はレベル12といった最上級モンスターにも関わらず、攻撃力0と言うパラメータを反比例させたようなモンスターの出現に驚いていた。

だが、遊星と十六夜には他に驚くべき事があった。

「何ですって……！？」

「“ダークチューナー”だと！？」

ダークチューナーとは過去に遊星達シグナーが闘った敵、ダークシグナーが使っていたモンスターで、ダークシグナー達はそのダークチューナーを使い、“ダークシンクロ召喚”を行っていた。

（何故、この時代にダークチューナーが！？）

「さらに俺は手札から『ベビードラゴン』を召喚！」

竜にしては小さい、愛くるしいドラゴンが城之内の場に現れる。

ベビードラゴン

ATK1200

「レベル3『ベビードラゴン』にレベル12の『DT・カオス・エンジェル』をダークチューニング!」

DT・カオス・エンジェルがベビードラゴンの中へと入り込み、ベビードラゴンの中にある3つの光とDT・カオス・エンジェルの12の闇が融合する。

「暗黒の時代を超えし竜よ!千年の時を超え、我が下へ降臨せよ!ダークシンクロ!」

DT・カオス・エンジェルの12の闇がベビードラゴンの3つの光を掻き消し、9つの闇がベビードラゴンを包み込む。

「現れる!」ダークネス・ミレニアム・ドラゴン  
『暗黒千年竜』!!!」

黒く染まった竜が天空から場に舞い降りた。

暗黒千年竜

ATK2800

「くっ……!」

「『暗黒千年竜』で『真紅眼の黒竜』を攻撃……!その鬱陶しい竜を　　がつ!」

城之内が突然頭を抱え、膝をつく。

「ぐ……ぐあああ!」

「城之内くん!」

「ゆ……遊戯……!……頼……む!俺達……を……俺達を倒し

てくれ!!」

「城之内くん!？」

「があああああ!!」

城之内は再び立ち上がる。だが、その目には今、少し見せた輝きは微塵もなかった。

「……チツ、邪魔が入りやがった……!」

「貴様……! 貴様は一体何者だ!？」

遊戯は城之内の体に乗っ取っている者に問い詰める。

「俺は俺だ……“城之内克也”だぜ？」

「チツ、答えないつもりか……! いいぜ……このデュエルに勝った後に貴様を正体を暴いてやるぜ!」

「やれるものならやってみるんだな……」

遊戯と遊星は決意した。

「遊星、俺達で」

「二人を救いましょう!」

## 9 章 - 7・時を超えた力

「『暗黒千年竜』で『真紅眼の黒竜』を攻撃！ダーク・デス・ブレス！」

暗黒千年竜の口から黒い息が放出され、その息はレッドアイズに向かう。

「遊星！君の力を借りるぜ！罨カード『くず鉄のかかし』を発動！」

黒い息の前にくず鉄のかかしが立ちはだかる　　が、かかしが息に触れた瞬間、くず鉄のかかしの色が黒く変色し、崩れ去る。

「なっ……何だと!？」

「『くず鉄のかかし』が破壊された!？」

「ハハハハハ!!『暗黒千年竜』が攻撃する時、相手の魔法・罨カード一枚を選択し、破壊する事が出来るんだぜえ?しかもコイツが攻撃する時にはダメージステップが終了するまで、魔法・罨・モンスターの効果は発動できねエ」

「くっ……」

くず鉄のかかしを破壊した黒い息はそのままレッドアイズを包み込むと、レッドアイズの体は骨となり砕け散った。

「レッドアイズ!!」

遊戯&遊星

LP500 100



「フハハハハ！忌々しい竜は消え去った！そして貴様達の命も風前の灯！俺達の勝利だ」

城之内&クロウ（城之内）

LP100

手札0枚、2枚

『暗黒千年竜』《攻》

『冥界の王との契約』《永続罨》

「俺のターン……！」

ドクン……、ドクン

遊星の耳には自分の心臓の鼓動が聞こえていた。  
遊星のカードを引く手にも力が入る。

（みんな　　俺に……俺に力を貸してくれ！）

キュイイイーン！！

遊星の心に答えたかのように、遊星の右腕の痣が光る。

「こつ、これは……！」

それは遊星ではなく、十六夜、クロウの腕も光っていた。

（遊星……！私の力を　　！）

「チッ！シグナーの痣が！」

そしてそれはシグナーだけではなく、遊戯の千年パズルにも影響を及ぼした。

「俺の千年パズルが……！」

『遊星くんに力を与えてる……!』

さらに、体に乗っ取られているはずのクロウから、シグナーの痣を通して、遊星は別の感情を感じ取っていた。

(遊星!俺達は必ず帰る!だから……俺達を倒せ!そして……このカードをお前に託す!)

遊星は頷くと、再び自分のデッキに目を向けた。

「俺のターン!ドローっ!!」

遊戯&遊星(遊星)

LP100

手札0枚、3枚

伏せ2

遊星は引いたカードを確認する。そのカードは

「俺は『救世竜セイヴァー・ドラゴン』を召喚!」

救世竜セイヴァー・ドラゴン

ATK0

「さらにリバースカードオープン!『死者蘇生』!このカードは墓地に存在するモンスター一体を特殊召喚する!」

このカードはさっきのターン、遊戯が伏せたカード。

(遊星!このカードで

!)

「蘇れ！『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜

ATK2400

蘇ったレッドアイズは城之内を哀しそうな眼で見つめる。

「そんな眼で……俺を見るんじゃない！」

「そして、もう一枚のリバースカード！『エンジェル・リフト』！」

場に暖かい光が差し込み、1体のモンスターの影を浮かび上がらせる。

「このカードは自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスターを1体特殊召喚する！復活せよ！『チューニング・サポーター』！！」

チューニング・サポーター

ATK100

「行くぞ！レベル1『チューニング・サポーター』とレベル7『真紅眼の黒竜』にレベル1『救世竜セイヴァー・ドラゴン』をチューニング！」

救世竜セイヴァー・ドラゴンが1つの輪となり、レッドアイズとチューニング・サポーターを囲む。

「集いし願いが時空を超えて、新たな力となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！」

レッドアイズが強烈な光を放つ。

するとそこにはレッドアイズより眼光が鋭く、紅蓮の赤を眼に宿した漆黒の竜がいた。

「降臨せよ！『セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン』！！」

セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン

ATK3400

「『チューニング・サポーター』の効果により、カードを1枚ドロ―する」

遊星はデッキからカードを1枚ドロ―する。

「そして、『セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、手札を1枚捨てる事で魔法・罫ゾーンのカードを全て手札に戻す事ができる！クリムゾン・ハリケーン！」

セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴンが巻き起こした旋風により場にあつた『冥界の王との契約』が手札に戻る。

「これで、ダメージを与えられるって訳ね！」

「だが、まだまだ！俺は手札から魔法カード『ミラクル・シンクロ』発動！このカードは自分のシンクロモンスターの召喚条件に合うように、墓地のモンスターを除外することでエクストラデッキからそのシンクロモンスターをシンクロ召喚できる！」

「何ッ！？」

「（クロウ……お前の力を借りる！）俺は墓地にあるレベル4『磁石の戦士』にレベル4『ハイパー・シンクロン』をチューニング！！」

遊星の墓地から光が溢れだす。

「お、お前の墓地に『ハイパー・シンクロン』なんて無かったはず！」

「遊星はさっきの『セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン』の効果の時に手札から『ハイパー・シンクロン』を捨てていたのね！」

「くっ……！」

「黒き疾風よ！秘めたる思いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！」  
「なっ、何っ！？」

ほとばしる閃光の中から現れたのは黒き龍だった。

「舞い上がれ！『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

ブラックフェザー・ドラゴン

ATK2800

「『ハイパー・シンクロン』の効果で攻撃力を800ポイントアップする」

ブラックフェザー・ドラゴン

ATK2800 3600

「何故、お前のデッキに俺の『ブラックフェザー・ドラゴン』が入ってやがる……！」

クロウの質問に遊星は穏やかに答えた。

「“クロウ”が俺に託してくれたんだ」

「何っ……！訳の分からねえ事言ってんじゃねえ！」

「フッ……！お前には分からないさ！俺達はこのシグナーの痣で繋がっている！」

遊星は右腕にある“ドラゴンヘッド”の痣を見せる。

「行くぞ！『セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン』の効果を発動！このカードの攻撃力を0にすることで、俺の場にいる他のモンスター1体の攻撃力を3400ポイントアップする！ユニオンパワ―！」

セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴンの体から紅いオーラが飛び出し、そのオーラはブラックフェザー・ドラゴンに入っていく。

セイヴァー・クリムゾンアイ・ドラゴン

ATK34000

ブラックフェザー・ドラゴン

ATK36007000

「なっ、7000だと!?!」

あまりの攻撃力に城之内とクロウは驚きを隠せない。

「行けっ！『ブラックフェザー・ドラゴン』！！二人の魂を合わせた力で、二人を救い出せ！」

遊戯と遊星は心を一つにする。

「クリムゾン・ノーブル・ストリ ム!!!!」

紅く光る旋風が暗黒千年竜の腹部を貫いた。

「くぐあああああ!!」

城之内&クロウ

LP100 “0”

## 10章・1・誇り高き二人（前書き）

諸事情により大幅に展開を変更いたしました。

ですので、一度読んだ方ももう一度読んでいただけると嬉しいです  
！



## 10章・1・誇り高き二人

時は遡り、遊戯と遊星が出会うその時、ジャックはとある部屋で目覚めた。

「ここは……？」

意外とシンプルな部屋で並のホテルぐらいの設備はあると思われる。ジャックは今までの事を思い出そうとした。

が、旧モーメントの光に飛び込んでからの記憶が無く、ジャックは思い出すのを諦めた。

「ようやくお目覚めになりましたか」

その声とともに扉が開き、4〜50の渋いサングラスをかけた男性が部屋に入ってくる。

「貴様は？」

「これは失礼致しました……私は磯野と言つ者でございます」

「磯野……？その磯野とやらが俺に何のようだ」

「“海馬瀬戸”様がお呼びです。至急、社長室までお越しください」  
「海馬だと……？」

ジャックには心当たりがあった。確かネオドミノシティの中心にあるトップクラスのアミューズメント企業の名前が“海馬”コーポレーション。

そのことを知っているジャックは何か情報が手に入るだろうと目算をつけた。

「フン、行つてやる」  
「それではこちらへ」

ジャックは白いコートを羽織り、デュエルディスクを持って、磯野の後に続いた。

ここは社長室。

デスクの前には茶髪の白いコートを着た青年、海馬瀬戸が座っている。

（シンクロ召喚……これは『神』に対抗する手段になるかもしれぬ……）

シンクロ召喚について頭を悩ませていると、コンコン、とドアを叩く音がした。

『磯野です。先程の男を連れて参りました』  
「入れ」

ガチャ

ドアの開く音と共に磯野とジャックが入ってきた。

「おい、その男。名を何という?」

海馬がジャックに問い掛ける。

「ジャック・アトラスだ」

「なら、ジャック・アトラスとやら……」

「何だ」

「単刀直入に聞こう。“シンクロ召喚”はどう行っ？」

ジャックは少し意外な質問に喉が詰まってしまったが、直ぐさまに咳ばらいをし、こう答えた。

「シンクロ召喚はチューナーと呼ばれるモンスターとそれ以外のモンスターのレベルを合わせ、そのレベルにあった“シンクロモンスター”を場に出す……まあ、こんな所だな」

海馬は少し考え込む。

「シンクロモンスター……いや、チューナーといったモンスターすら存在していないはずだが……何故、貴様はそれを持っている？」  
「オレ達は未来から来たからだ」

そのジャックの言葉に驚いたのは磯野だけだ。

海馬は平然とし、あまり相手にしていない感じた。

「俺にオカルト紛いの話をするとはな」

「フン、事実を述べたまでだ」

「ホウ、俺に反論とはいいい根性をしている」

「貴様ごときに臆するオレではない」

海馬はその台詞を聞くと、高らかに笑い声を上げた。

「フハハハハ！面白い！ジャックよ、この俺とデュエルをしろ」

「何っ？」

「貴様が勝てば、お前の言うことを信じてやる！」

「フン！信じようが信じまいがどちらでもいいが、売られたデュエルは買ってやる！」

「フン、貴様の威勢もそこまでだ」

二人の間には火花が散っていたのだった。

海馬コーポレーションのデュエル場に移動した二人。  
お互いはデッキをシャッフルする。

「準備はできたぞ！」

「ああ、こちらもだ」

「それでは行くぞ……」

「デュエル！！」

海馬のデュエルディスクに“先行”表す合図があった。

「俺のターンからだ」

海馬

LP4000

手札6枚

「俺は『闇・道化師のペーテン』を守備表示で召喚」

ナイフをもちながら、奇妙な踊りをしたピエロが現れる。

闇・道化師ペーテン

DEF1200

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

海馬

LP4000

手札3枚

『闇・道化師ペーテン』《守》  
伏せ2

「オレのターン!!」

ジャック

LP4000

手札6枚

「オレは『マッド・デーモン』を召喚!」

体の中心に骸骨をかみ砕く口を持った悪魔が現れる。

マッド・デーモン

ATK1800

「行け『マッド・デーモン』!ボーン・スプラッシュ!」

マッド・デーモンが砕いた骨を闇・道化師ペーテンにぶつける。

すると、闇・道化師の体に数多の骨の破片が刺さり、ペーテンは消滅した。

「『マッド・デーモン』は守備モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えている場合、相手に貫通ダメージを与えるのだ!」

「くっ……」

海馬

LP 4000    3400

「だが、俺の『闇・道化師ペーテン』にも効果がある。このカードが破壊された時、このカードを墓地から除外することで、デッキから『闇・道化師ペーテン』1体を特殊召喚できるのだ!」

再び海馬の場にナイフを持ったピエロが現れる。

闇・道化師ペーテン

DEF 1200

「フン、オレはカードを1枚伏せターンエンドだ!」

ジャック

LP 4000

手札4枚

『マッド・デーモン』《攻》

伏せ1

「俺のターンだ!」

海馬

LP 3400

手札4枚

『闇・道化師ペーテン』《守》

伏せ2

「俺は『闇・道化師ペーテン』を生贄に『エメラルド・ドラゴン』を召喚！」

全身美しいエメラルドカラーの竜が海馬の場に降り立つ。

エメラルド・ドラゴン

ATK2400

「『エメラルド・ドラゴン』で攻撃！」

海馬が攻撃宣言をした時、マッド・デーモンが防御体制をとる。

「『マッド・デーモン』が攻撃対象になった時、『マッド・デーモン』は守備表示となる！」

マッド・デーモン

ATK1800

DEF0

「構わん！行け！『エメラルド・ドラゴン』！」

エメラルド・ドラゴンの口から閃光が放たれる。

「さらにこの瞬間、『竜の逆鱗』を発動！このカードが場に存在する時、自分フィールド上のドラゴン族が守備表示モンスターに攻撃する場合、攻撃力が守備力を超えている時、相手に貫通ダメージを与える！」

エメラルド・ドラゴンの放った閃光がマッド・デーモンを掻き消した。

その衝撃の余波はジャックにも襲い掛かる。

「ぐわああああ！」

ジャック

LP 4000 1600

「くっ……」

「フン、俺はこれでターンエンドだ」

海馬

LP 3400

手札3枚

『エメラルド・ドラゴン』《攻》

『竜の逆鱗』《永續罨》

伏せ1

（さすがは伝説のデュエリストと対等に渡り合った男だ……）

ジャックは頬に一筋の汗を流す。

「（だが、オレも負けられん！オレのプライドに賭けて！）オレのターン！！」

ジャック

LP 1600

手札5枚

伏せ1



「相手フィールド上にのみモンスターが存在する時！このカードは特殊召喚できる！いでよ！」バイス・ドラゴン」！！」

紫色の竜がジャックの場に降り立つ。

バイス・ドラゴン

ATK2000

「『バイス・ドラゴン』が自身の効果で特殊召喚した場合、攻撃力・守備力は半分になる！」

バイス・ドラゴンは雄叫びをあげると、体が小さくなっていく。

バイス・ドラゴン

ATK2000 1000

DEF2400 1200

「さらに『ドレッド・ドラゴン』召喚！」

ドレッドヘアーの竜がジャックの場に現れた。

「レベル5『バイス・ドラゴン』にレベル2『ドレッド・ドラゴン』をチューニング！」

ドレッド・ドラゴンが2つの輪となり、バイス・ドラゴンを囲む。

「王者の叫びがこだまする！勝利の鉄槌よ、大地を砕け！シンクロ召喚！」

バイス・ドラゴンは光となり、その光から新たな竜が飛翔する。

「羽ばたけ！」『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』！

二足で立つ竜が翼を羽ばたかせながら降り立った。

エクスプロード・ウィング・ドラゴン

ATK 2400

（来たか！シンクロモンスターとやらが！）

シンクロモンスターを見た海馬はニヤリと笑ったのだった。

## 10章・2・究極竜と巨人の神

シンクロ召喚を行ったジャック。  
その眼には精気が溢れている。

「行けっ！『エクспロード・ウイング・ドラゴン』！『エメラルド・ドラゴン』を粉碎せよ！キングストーム！！」

エクспロード・ウイング・ドラゴンは自ら吐き出した火炎と翼で巻き起こした爆風を融合させ、エメラルド・ドラゴンに攻撃する。危険を察知したエメラルド・ドラゴンは直ぐさまエクспロード・ウイング・ドラゴンに向かって閃光を吐き出す。

「フン！攻撃力は互角……相打ち狙いか」

「甘いわ！海馬瀬戸！」

「何……？」

エクспロード・ウイング・ドラゴンの攻撃はエメラルド・ドラゴンに直撃し、エメラルド・ドラゴンは悲鳴をあげながら消滅する。そして一方、エクспロード・ウイング・ドラゴンはエメラルド・ドラゴンの攻撃を軽々と避けた。

「何いつ！何故、『エクспロード・ウイング・ドラゴン』は破壊されない！？」

「『エクспロード・ウイング・ドラゴン』と戦闘する相手モンスターの攻撃力が『エクспロード・ウイング・ドラゴン』以下だった場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する事ができるのだ！」

「くっ！」

「さらに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

エクスプロード・ウィング・ドラゴンが再び海馬に向かって火炎を吐き出す。

「ぐわああああ！」

海馬

LP 3400 1000

「オレはカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

ジャック

LP 1600

手札2枚

『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』《攻》

伏せ2

「くっ……やるようだな……」

海馬は手札を見る。

「（さて、テストはここからだ……）オレのターン！」

海馬

LP 1000

手札4枚

『竜の逆鱗』《永續罨》

伏せ1

「俺はカードを2枚伏せる」

海馬の場にカードが伏せ表示で現れる。

「さらにリバースカードオープン！『非常食』！」

発動と同時に今伏せたカードが消えていった。

「『非常食』は自分の魔法・罠ゾーンのカードを任意の枚数を墓地に送ることによって一枚につき、1000ライフを回復する。俺が送ったカードは2枚！よって2000ライフを回復する！」

海馬

LP 1000 3000

「さらに手札から永続魔法！『未来融合・フューチャー・フュージョン』を発動！」

海馬の場に虹色に輝く渦が現れる。

「このカードはデッキから融合モンスターによって決められたカードを墓地に送ることにより、2ターン後のスタンバイフェイズ時に指定した融合モンスターを融合召喚できるのだ！」

海馬がデッキから抜き出したカードは3枚。

「俺は『青眼の白龍』を3枚墓地へ送り、2ターン後に『青眼の究極竜』を融合召喚する！」

「『青眼の究極竜』だと……！」

青眼の白龍のカードを3枚墓地へ送ると、虹色の渦が消えて行く。

「まだ俺のターンは続くぞ！俺は手札から『命削りの宝札』を発動！このカードの効果によって、俺は手札が5枚になるようにデッキからカードを引く」

海馬の手札は0。よって、海馬は5枚のカードを引くことができる。そして海馬は5枚のカードをドロ―した。

「フハハハハ！俺の勝利は確定した！」

「何っ！？」

海馬は不敵な笑みを浮かべる。

「今からその“勝利への方程式”を教えてやろう！俺は手札から魔法カード『龍の鏡』を発動！」

海馬の目の前に龍が映った鏡が現れる。

「『龍の鏡』は墓地から融合モンスターによって決められたカードを除外することでその融合モンスターを融合召喚する！俺は墓地の『青眼の白龍』を3枚除外！」

鏡の中の異次元へと青眼の白龍3枚が消えて行く。

「さあ、鏡の中から姿を現せ！『青眼の究極竜』！！」

鏡から3つの龍の首が現れ、さらには体を乗り出し、そのモンスターは完全にその姿を現した。

青眼の究極竜

ATK4500

「こつ、これが伝説のデュエリストを苦しめたという『青眼の究極竜』か……！」

その龍の圧倒的な威圧感にジャックは一步後ろへ後退する。

「まだだ……！貴様に圧倒的恐怖を味あわせてやろう！俺は『次元融合』を発動！」

またもや海馬の場に次元の裂け目が現れる。

「『次元融合』は2000ライフを払うことで、お互いに除外されているモンスターをそれぞれのフィールドに特殊召喚できるのだ！」

海馬

LP3000 1000

次元の裂け目から姿を現したのは3体の青眼の白龍だった。

「除外されているモンスターは『青眼の白龍』のみ！よつて『青眼の白龍』を3体特殊召喚！」

青眼の白龍×3

ATK3000

「くつ……！」

「まだ恐怖するのは早い……。俺は『青眼の白龍』3体を生贄に

」

青眼の白龍達がフィールドから消え、さらに天候などあるはずないデュエル場に数多の雷が降り注ぐ。

「我が下へ現れよ！『オベリスクの巨神兵』！」

雷の閃光の中から現れたのは圧倒的な威圧感を持った青い巨人。その鋭き赤い眼光はジャックを睨み付ける。

オベリスクの巨神兵

ATK4000

「くっ……これが“神”！」

海馬は自分の場にいる『青眼の究極竜』と『オベリスクの巨神兵』を見上げ、高らかに笑い声を上げた。

「フッフッフ！フッハッハッハッ！アッハッハッハッハッ

……！」



### 10章・3・神に抗う悪魔（前書き）

注意

この作中にでてくる“神”の効果はこうなっています。

魔法の効果は1ターンしか受けない。

このカードは罫・モンスターの効果の対象にすることは出来ない。  
このカードはカードの効果によって“破壊されない”

原作・アニメとは微妙に違いますが、ご了承ください。

### 10章・3・神に抗う悪魔

「フハハハハ！究極！無敵！最強！もはや貴様に勝ち目はないわ！」

「くっ……！」

ジャックは攻撃力4500の『青眼の究極竜』と攻撃力4000の『オベリスクの巨神兵』の威圧感に耐えるだけで、精一杯だった。海馬の言葉に答える余裕がない。

「フン、この状況に声も出ないか……」

ジャックは答えない。

「今、楽にしてやる！『青眼の究極竜』の攻撃！アルティメット・バースト……！」

青眼の究極竜の3つの首からそれぞれ閃光が放たれる。

その閃光は1つに収束し、眼を開けることも困難な光を生み出した。

（終わったか……）

その光が消えると、そこにエクスプロード・ウィング・ドラゴンの姿は無かった。

が、ジャックのライフは減っていない。

「なっ、何っ！何故貴様のライフが減っていない！？」

「フン！オレはこのカードを発動した」

そう言つて、ジャックが指差した場所を見ると、一枚のカードが表になっていた。

「リバースカード、『亜空間物質転送装置』！」

「くっ、そのカードで貴様のモンスターを時空の彼方へ避難させたと言う訳か……！だが、攻撃を阻止出来た訳ではない！攻撃対象を失った“アルティメット”はもう一度攻撃できる！」

「チッ……！」

青眼の究極竜は再び標的を定める。  
その狙う先はジャックだった。

「『青眼の究極竜』よ！ジャックにダイレクトアタック！アルティメット・バースト……！」

海馬の叫びと共に再び放たれる閃光。

だが、ジャックの眼に諦めの感情は無かった。

「相手がダイレクトアタックをしてきた時、このモンスターを特殊召喚できる！いでよ！『バトルフェーダー』……！」

ジャックの場に振り子のようなモンスターが現れる。

「さらに『バトルフェーダー』の効果により、バトルフェイズを終了する！」

バトルフェーダーが振り子を振ると、青眼の究極竜は眠りにつくかのように大人しくなる。

「くっ……そのようなモンスターが存在したのか……！……！オレは

これでターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、除外していた『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』が帰還する！」

次元の歪みからエクスプロード・ウィング・ドラゴンが現れた。

海馬

LP1000

手札2枚

『青眼の究極竜』《攻》

『オベリスクの巨神兵』《攻》

『未来融合・フューチャー・フュージョン』《永続魔法・0ターン》

『竜の逆鱗』《永続罫》

「オレのターン!!」

ジャック

LP1600

手札2枚

『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』《攻》

『バトルフェーダー』《守》

伏せ1

「オレは『アタック・ゲイナー』を召喚！」

アタック・ゲイナー

ATK0

「行くぞ!レベル7『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』にレベル1『アタック・ゲイナー』をチューニング!」

アタック・ゲイナーが1つの輪となり、エクスプロード・ウィング・ドラゴンを包み込む。

「王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

エクスプロード・ウィング・ドラゴンは光を放つと、悪魔の龍へと姿を変えた。

「我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK3000

「来たか！貴様のエースモンスター！」

「さらにシンクロ素材にした『アタック・ゲイナー』の効果を発動！『アタック・ゲイナー』がシンクロ素材になった時、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせる！」

アタック・ゲイナーの魂が青眼の究極竜に乗り移る。

すると、青眼の究極竜の覇気が見るみる内に下がっていく。

青眼の究極竜

ATK4500 3500

「くっ……！アルティメット……！」

「まだ行くぞ！リバーカードオープン！『バスター・モード』！！」

バスター・モードが発動すると、レッド・デーモンズ・ドラゴンが獄炎の中に身を隠す。

「このカードは自分フィールド上のシンクロモンスター1体をモードチェンジさせるのだ!」

「モードチェンジだと……!?」

「いでよ!」レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター!」

その叫びに呼応するかのように獄炎が爆ぜ、その中から赤い鎧を身に纏ったレッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターが姿を現した。

レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター

ATK3500

「行けえっ!」レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター!」  
「青眼の究極竜」を粉碎せよ!エクストリーム・クリムゾン・フォー  
ス!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターの突き出した炎の拳が、青眼の究極竜の腹部を貫く。

「攻撃力は同じ!相打ちだ!」

命の危機を感じた青眼の究極竜は直ぐさま閃光をレッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターに対して放つ。

この攻防によって2体は大爆発を起こし、共に消滅した。

「この瞬間、『レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター』の効果  
を発動!このカードが攻撃した時、そのバトルのダメージ計算後、

『レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター』以外のモンスターを  
全て破壊する！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターのいた場所から爆風が巻  
きおこり、バトルフェーダーとオベリスクの巨神兵を巻き込んだ。  
が、しかし

「フハハハハ！ “神” は魔法を1ターンしか受け付けず、罠・モン  
スター効果で破壊されることはない！ とんだ無駄骨だったな」

「くっ……、『レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター』が破壊  
された時、墓地から『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を特殊召喚  
する……！」

再び悪魔の龍がジャックの場に現れる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK3000

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ……！」

ジャック

LP1600

手札0枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』《攻》

伏せ1

「俺の『青眼の究極竜』を破壊したのは感嘆に値する。だが『オベ  
リスクの巨神兵』が貴様に裁き鉄槌を下すだろう！ 俺のターン！」

海馬

LP1000

手札3枚

『オベリスクの巨神兵』《攻》

『未来融合・フューチャー・フュージョン』《永続魔法・0ターン》

『竜の逆鱗』《永続罫》

「スタンバイフェイズ！」『未来融合・フューチャー・フュージョン』のターンカウントを1つ進める！」

未来融合・フューチャー・フュージョン

0ターン 1ターン

「このままバト」

「バトルフェイズ前に永続罫、『スクリーン・オブ・レッド』を發動する！」

「神に罫は効かぬ……！」

「神になど罫をかけたつもりなど無い！オレは貴様に罫をかけたのだ！このカードが存在する限り、相手は攻撃宣言出来ない。攻撃命令が無ければモンスターも攻撃できない！」

「くっ……！」

海馬は苦虫をかみつぶしたかのような顔をした。

「俺はこれでターンエンド……！」

海馬

LP1000

手札3枚

『オベリスクの巨神兵』《攻》

『未来融合・フューチャー・フュージョン』《永続魔法・1ターン》



『竜の逆鱗』《永続罨》

「オレのタ　　ン！」

ジャック

LP1600

手札1枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』《攻》  
『スクリーン・オブ・レッド』《永続罨》

「オレは『フレア・リゾネーター』を召喚！」

炎の灯った音叉を持った小さき悪魔が現れる。

フレア・リゾネーター

ATK300

「さらに場にある『スクリーン・オブ・レッド』の効果を発動！自分の場に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が存在する時、このカードを墓地に送ることで墓地にあるレベル1のチューナーモンスターを特殊召喚することができる！」

スクリーン・オブ・レッドのカードが墓地に送られ、代わりにジャックの場に現れたのは

「いでよ！『アタック・ゲイナー』！」

アタック・ゲイナー

ATK0

「これで全てが整った」  
「何っ……?」

ジャックは上方に手を掲げる。

「レベル8『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル1『アタック・ゲイナー』とレベル3『フレア・リゾネーター』をダブルチュ  
ーニング!」

アタック・ゲイナーとフレア・リゾネーターは合計で4つの輪となり、レッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込む。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ!天地創造の叫びをあげよ!シンクロ召喚!」

辺りに紅蓮の炎が燃え盛る。

その炎が爆ぜ、その中から鋭き眼光をした紅蓮の龍が現れた。

「いでよ!『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン  
ATK3500

「ぐっ……!さっきまでのシンクロモンスターとは格が違う……!」  
「さらにシンクロ素材にした『フレア・リゾネーター』により、攻撃力を300ポイントアップ!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 3800

「さらに『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の効果！自分の墓地に存在するチューナーの数×500ポイント攻撃力を上昇させる！今、オレの墓地に存在するチューナーは3体！よって、さらに攻撃力を1500ポイントアップだ！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは墓地のモンスターから力を吸い取った。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン  
ATK3800 5300

「オベリスクを超えただと!？」

「力こそが全て！行けっ！『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』！  
！力の神『オベリスクの巨神兵』を粉碎せよ！バーニング・ソウル  
！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが吐き出した紅蓮の炎がオベリスクの巨神兵を包み込む。

オベリスクは苦しそうな表情を浮かべながら石化し、崩れさっていった。

「ぐわああああ！」

海馬

LP1000 0

## 10章・4・計画始動

海馬を倒したジャック。

だが、ジャックには何か胸に引つ掛かるものを感じていた。

「貴様、手を抜いていただろう」

そう告げたジャックに海馬は少し笑みを浮かべる。

「何故、そう思った？」

「最後のターン、手札を3枚も残しながら何もしないでターンエンドなどありえんからな」

案の定、少しばかり見えた手札の中に『破壊輪』と『地獄の扉越し銃』があった。

おそらく、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』が召喚される前からあったものであろう。

「この2枚を伏せ、俺のターンのドローフェイズ等に発動していれば、俺は『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』を召喚する事なく、6000ポイントのダメージを受け、負けていた」

「フン、“シンクロモンスター”が本当に神に対抗できるかどうか試しただけだ」

海馬はそう言うのと、踵を返してドアへと向かって行く。

「モクバ、やはり例の計画を実行する」

コートに付いている通信機を使って、デュエル場のモニタールーム

にいるモクバへと話し掛ける。

それを聞いていたジャックは海馬へと詰め寄る。

「おい貴様、“例の計画”とは何だ？」

「フン、貴様ごときに喋る事ではないが、俺に勝った褒美だ、教えてやろう」

海馬の口調にイラッとしたジャックだったが、感情を抑え、海馬の話に耳を傾けた。

「例の計画とは“未来へのタイムスリップ”とでも言うておこっか」

それを聞いたジャックは耳を疑うのであった。

## 11章・事件の真実

俺は一体何をしていたんだ……？

確か“ナム”って奴と出会って、そして何か奇妙な奴に

「っ……！」

「城之内くん！！」

目を覚ました城之内の視界に広がっているのは、涙で目を潤わしている“表”遊戯の顔だった。

「俺は一体……」

「君は体を操られていたんだ……」

「俺の体を……？」

城之内はそう呟きながら、自分の手を見る。

（そうか……俺は操られていたのか……）

「城之内くん、君達の身に何があったの……？」

城之内は一度目を伏せると、重たい口を開いた。

時を遡り、一時間前。

その龍可の一言でその場のメンバーは凍り付いた。

「ナムは“ナム”じゃなくて、“マリク”……?」

城之内の脳裏にある光景が甦る。

それは遊戯と『エクゾディア』のカードを持つレアハンターが闘った時の事。

遊戯がレアハンターを打ち負かした後、レアハンターが別の人格の意志に操られた時の言葉の中に出てきた人物の名前

マリク。

「お前が……グルズのリーダーだって言うのか!？」

「チッ、計画が狂ったか……これなら作戦Bに移行するしか無いか

……」

「何っ?」

マリクは腰から金の杖を取り出す。

「強制的に“洗脳”する」

「まちやがれ!」

マリクの前にクロウが立ちはだかる。

「てめえにコイツらを触れさせやさせねえ!」

「カッコいいね……だが、貴様も作戦の邪魔をしたんだ。貴様にも同様の事をしてもらうぞ」

「くっ……!」

クロウはデュエルディスクを構える。

「やめておけ。僕の操る神に、一般人ごときが勝てる訳がない」

「それは分からねエだろうが!」

『いや、今の貴様に“太陽神ラー”は倒せねエよ』

こちらに向かつて、男が歩いてくる。

その男は白いマントに身を包み、鋭い目つき、純粋な悪意まで感じる瞳を持っていた。

「誰だ！」

「誰ってか？　たく、この世界は自己紹介ばかりさせやがるな……」  
「何っ……！」

「まっ、いいか……俺の名前は“ゼウシス”。神に仕えていた者だ」  
“神に仕えていた者”だと……！？

クロウ、城之内を始めとした杏子、龍亜、龍可の表情には焦燥の様子が浮かぶ。

「そう、俺様は世界の歴史を壊すためにこの世界に降り立った……」

「“歴史を壊す”……？」

「そうだぜ？　この“デュエルモンスターズ”なんてものが栄えた歴史を壊すんだよ」

「何っ？」

クロウは疑問の顔を浮かべた。

だが、ゼウシスは構わず話を続ける。

「“デュエルモンスターズ”を中心としたこの世界が何度、闇に包まれたか分かるか？」

「？」

「もうすでに数え切れねエ程、闇に包まれた。まあ、確かに『武藤遊戯』、『遊城十代』、『不動遊星』の三人に加え、数多の仲間達によって、闇は払われた……。だが考えてもみる。いずれの事件も



その三人を中心として起きているんだよ」

「！！！」

「よって、俺は三人に裁きを与えることにした。三人をこの世から消すと言う裁きをなあ」

「待ちやがれ！」

城之内がゼウシスの言葉を遮るように叫ぶ。

「テメーの都合で俺のダチを殺させやしねえ！遊戯は俺が護る！この俺とデュエルしろ！」

「いいぜ？仲間から消すことで“あいつら”に絶望を与えてやる事ができる」

明らかに遊戯達を示した言葉に城之内は憤慨するが、その心を無理に落ち着かせる。

だが、もう一人は黙っている事が出来ないらしかった。

「この俺も混ぜてもらうぜ！」

「お前……」

「ヒヤハハハ！いいぜ！クロウ・ホーガン！まとめて消し飛ばしてやるよ」

「行くぞ！」

「『デュエル！』」

「ちなみにデュエルはサバイバルルールで行うぜえ？しっかり協力して俺を倒せよ？」

ゼウシスは邪悪な笑みを浮かべながらルールの説明をした。

「構わねえ！じゃあ、俺から行かせてもらうぜ！」

城之内

LP 4000

手札 6枚

「俺は『漆黒の豹戦士パンサー・ウォリアー』を召喚！」

城之内の場に剣を持った黒き豹が現れる。

漆黒の豹戦士パンサー・ウォリアー

ATK 2000

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

城之内

LP 4000

手札 4枚

『漆黒の豹戦士パンサー・ウォリアー』《攻》

伏せ 1

（俺が伏せたのは『マジック・アーム・シールド』。これであいつがモンスターを何体か召喚しても防ぐことができる……！）

「俺のターン！」

クロウ

LP 4000

手札 6枚

「コイツは相手フィールド上にのみモンスターが存在している時、リリース無しで召喚できる！現れる！『BF-暁のシロツコ』！」

黒き翼を持った鳥人が現れる。

B F - 暁のシロッコ

ATK 2000

「そして『B F - 黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

大きな黒槍を持つ鳥人が空中に現れる。

B F - 黒槍のブラスト

ATK 1700

「コイツは自分フィールド上に他の『B F』が存在する時、手札から特殊召喚できる！そしてもう一枚！『B F - 疾風のゲイル』を特殊召喚！」

眼が大きめの鳥がクロウの場を飛び回る。

B F - 疾風のゲイル

ATK 1300

「コイツもブラストと同じだ！」

そしてクロウは言葉を言い終わると、手を高く掲げる。

「レベル4 “黒槍のブラスト” にレベル3 “疾風のゲイル” をチュ  
ーニング！」

ゲイルが3つの輪となり、ブラストがその輪の中心に飛び込む。

「黒き旋風よ！天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！」

輪に囲まれたブラストが光を放ち、姿を変える。

「来い！『BF・アーマード・ウイング』！！」

鋼鉄の鎧に全身を包んだ鳥人がフィールドに降り立った。

BF・アーマード・ウイング

ATK2500

（シンクロ召喚！？聞いたことがねえ召喚方法だぜ）

シンクロ召喚を知らない城之内はクロウの行動に驚いていた。

「俺はこれでターンエンドだ！」

クロウ

LP4000

手札3枚

『BF・暁のシロッコ』《攻》

『BF・アーマード・ウイング』《攻》

「……ハッ」

クロウのターンが終わると、ゼウシスは鼻でクロウと城之内を笑う。

「何がおかしい？」

城之内はゼウシスに問う。

するとゼウシスはこう答えた。

「いくらモンスターを並べようが、いくら魔法・罠を並べようが俺には関係ねえな！」

「「なっ……！」」

「それを今証明してやる。俺のターン！」

ゼウシス

LP 4000

手札 6 枚

「俺は『鬼神』を召喚」

文字通り、鬼のようなモンスターが現れる。

鬼神

ATK 2800

「レベル4で攻撃力2800だとっ！？」

クロウと城之内の頬に一滴の汗が流れる。

「『鬼神』の効果発動。このカードが召喚に成功した時、手札またはデッキから『魔神』を特殊召喚出来る……！」

鬼神が作った闇の穴から大木ほどの腕を持ったモンスターが現れた。

魔神

ATK 3000

「こ、攻撃力3000……！」

「『魔神』がカードの効果によって特殊召喚された時、相手に“4000”ポイントのダメージを与える！」

「何だっ!?」

魔神が腕を振り上げると、クロウに向かって雷が落ちる。

「ぐあああああ!! (何だ!? この痛みは!?)」

クロウ

LP40000

クロウはあまりの痛みにもう倒れ、気を失った。

「キャアアア！」

「クロウ！」

「そ……そんな……！」

その光景を見た杏子達の口から悲鳴や叫び声があがる。

「まずは一人目……シグナーを消去」

「くっ……ダメエエエ！」

城之内は怒りをあらわにする。

「慌てるな。お前も後を追わせてやるからよ！」

ゼウシスはそういうと、手札からカードを2枚抜き取る。

「俺は手札から『降格処分』発動! このカードの効果で『魔神』の

レベルを2下げる。それを2枚発動したことにより、レベルを4下げる」

魔神

8 4

「レベルを下げるだと……？まつ、まさか！？」

「そのまさかだぜ？レベル4『鬼神』にレベル4となった『魔神』をチューニング！」

魔神が作り上げた4つの輪に、鬼神が飛び込んだ。

「神の造りししもべ達よ！龍となりてこの世界を喰らい尽くせ！シンクロ召喚！」

先程のプラストと同じように、鬼神も光となって姿を変える。

「大地を焼き払え！『龍神王』！！」

天空に広がる暗雲から白く輝く龍が姿を現す。

龍神王

ATK4000

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの合計攻撃力分の2倍のダメージを相手に与える」

「なん……だ……！？」

龍神王の吐き出した炎が城之内の場を包み込む。

その炎に包まれたパンサー・ウォリアーは苦しそうな表情を浮かべながら、消えていった。

「パンサー・ウォリアー!!」

「さあ、ダメージを食らえ!」

パンサー・ウォリアーを焼き尽くした炎が城之内に襲い掛かる。

「ぐあああああ!!」

城之内

LP4000

城之内もクロウに続き、その場に倒れ込んだ。

「全くよ雑魚ばっかだぜ……やめたやめた!消すんじゃないで、貴様に協力してもらおう」

ゼウスはマリクの方を見る。

マリクは少し後ろに下がったが、直ぐさま怪しげな笑みを浮かべる。

「で、僕にどうしろと……?」

「そうだな……まずはその女ガキ共をどこかへ閉じ込める。そしてこの二人は貴様の“千年ロッド”で、武藤遊戯と悲劇のデュエルでもさせてやれ」

「ああ、分かった……」

ゼウスはそう言い残すと、どこかへ消え去っていった。

だが、誰も気付いてはいなかった。城之内の意識がまだあった事に。



(……遊戯……すま……ね……え……俺は……)

ここで城之内の意識は途絶えたのであった。

## 12章・動き出すそれぞれの思惑

高層ビルの屋上。

そこに一人の男が立っていた。

白いマントで身を包み、頭にはフードを被っており、その紅い瞳には純粹な悪意さえ感じる。

その男の名はゼウシス。神に仕えていた者。

そして、時代を超えたこの事件はゼウシスの手によって起こされたものだ。

「チツ、やはり失敗したか……“千年ロッド”の力を高めてやったというのに……」

ゼウシスは苦い顔をしていた。

それもそう、城之内とクロウを使い、二人掛かりで遊戯を消そうとした。だが、そこに邪魔が入ったからだ。

「不動遊星め……！」

遊星の手によって、ゼウシスの策略は崩れ去った。しかし、それも予想出来なかった訳ではない。

シグナーが過去に來ている以上、自分の命よりも絆を大事にする遊星は確実に邪魔をしてくる。

「不動遊星……やはり貴様は俺自身の手で潰すしかないようだ」

ゼウシスはニヤリと笑うと、ユラリと歩きはじめ、このコンクリートジャングルである童実野町へと消えていった。

「そんな事が……」

「ゼウシス……」

城之内の口から事件の真相を聞いた遊戯と遊星と十六夜。

真の敵           ゼウシスの名を心へ刻み込み、打倒ゼウシスを誓ったのであった。

「遊星くん」

「はい、何ですか？遊戯さん」

「君の友達は大丈夫だったの？」

そう、マリク……いや、正確に言えば、ゼウシスに操られていたのは城之内だけではない。

遊星の親友でもあり、共に闘ってきたシグナーの仲間のクロウも共に操られていた。

「クロウなら大丈夫です。そのベンチに寝かせてあります」

「良かった……」

クロウの無事を確認した遊戯は安堵の表情を浮かべた。

するとそんな時、ベンチで寝ていたクロウが目を覚まし、上半身を起こした。

「っ！何処だ！？ココ！」

「水族館の前よ」

遊星と十六夜はクロウの所へ行き、今いる場所を教えた。そんなクロウの目に映ったのは、ボロボロとなった水族館。

「まさか俺らが……やったのか？」

「ええ、でも」

「クロウは操られていたんだ。仕方がないだろう」

確かに傍から見れば、水族館や周りの物を壊していたのはクロウと城之内だった。

だが、それは二人の意志ではなく、マリクとゼウシスの二人の意志でやらされたことだ。

クロウと城之内に責任はないだろう。

「だけだよ……」

「クロウ……今はゆっくりと話す時間は無いみたい……」

「？　どういう事なんだ？」

「後で詳しく話すが、龍可達がどこかへ監禁されている。俺達はみんなを見つけ、救出しなければならんだ」

「なんだと!？」

クロウは急いでベンチから跳び起きた。

城之内もある程度、体力が回復したらしく遊戯と共に遊星の方へと歩いて来ていた。

「よし、みんな揃ったな……！行くぞ！」

「「おお！（ええ!）」」

またもや所変わって、ここは海馬コーポレーション。

その中にある開発室で海馬はいくつものパソコンを使い、何かのプログラムを組み立てていた。

一方、ジャックは行く宛ても無く、開発室前の廊下で立っていた。

（海馬瀬戸は“未来へ行く”と言ったが、どうやって行くつもりだ？この時代ではタイムマシンなど到底造れないはずだが……）

確かにそうだ。ジャックのいたネオドミノシティの技術力ならまだしも、この時代の技術では到底不可能な事だ。

（フン、まあ見物だな……）

ジャックは海馬の作っているプログラムの完成をじっと待つのだった。

今、童実野町に足を踏み入れた青年がいた。

その青年は少し茶色の髪で、赤いジャケットを羽織っており、優しさの中にどこか気迫を漂わせるような顔付きをしている。

「童実野町に来るのは久しぶりだな相棒！」

『クリクリ〜！』

青年はニコツと笑うと町の中心にある“海馬コーポレーション”目掛けて走り出すのであった。

この青年の登場で、運命の輪は大きく動き出す……。

番外編・暑い夏の日へ前編（前書き）

kouさんリク

注意！

軽くキャラが崩壊しているような気がしますので、微妙に閲覧注意  
！！

## 番外編・暑い夏の日に〈前編〉

「暑いな……」

30度を超える高い気温にギラギラと照り付ける太陽、ミンミンと騒ぎ立てる蝉の声に遊星は夏を感じられずにはいらなかった。今、遊星達は海馬の計らいで海馬ランドにあるプールにお邪魔していた。

まだ建設途中らしいのだが、もうほぼ完成と言っていいほどの状態になっており、遊星達は安全確認や試運転等の用事でここにいる。……もちろん水着姿で。

「何処も異常は無いな」

安全確認は遊星達……いや、遊星とブルーノの二人で行っていた。もちろん、ジャックやクロウといった他のメンバー達は安全確認を始める前から遊びはじめ、試運転などは全くしていない。だが、遊星はそんな事など全く気にせずに安全確認を行う。

「ふう……最後はここだけか」

最後は流れるプールの水中にある排水溝を確認して終了だった。遊星は水中に潜り、排水溝やその周りを念入りに確認する。

（よし……ここも異常なしだな）

確認を終了した遊星は水面へと浮上し、プールサイドの端に足を掛け、勢いよく昇る。

遊星が休憩にとプールサイドで座っていると、一人の影が近寄って

くる。

ヒラヒラの着いた可愛らしいピンクの水着に身を包んだ少女、龍可だった。

「お疲れ様、遊星！」

「龍可か。どうしたんだ？みんなと遊んでいたんじゃないのか？」

「そうだったんだけど、鬼柳さんとジャックとクロウが水泳大会を始めちゃって、みんなそっちにかかりつきり！龍亜と城之内さんなんてジューズを売り始めたんだから！」

怒った顔をして文句を言う龍可だが、その感情の中にはどこか“楽しい”という感情も含まれているような感じもあった。それを感じ取っていた遊星は立ち上がり、龍可にこう告げた。

「俺達も見に行こうか」

「ゆ……遊星も！？」

「ああ。俺も見たくなった」

と言って、遊星は龍可に手を差し延べる。

「え……？」

突然の遊星の行動に龍可は戸惑った。

遊星にとっては普通に“手を繋ぐ”という行動なのだろうが、龍可にとっては違っていた。

何か子と父が手を繋ぐような感じにも思えるのだが、何か違う感情も混ざっているような感じがして、龍可はなかなか手を差し延べられないのだ。

そんな事を知ってか知らずか遊星は龍可にこう話し掛ける。



「どうした？行かないのか？」

「うう……」

繋ぐか、繋がないか散々迷った揚げ句、龍可は頬を朱に染め、遊星の手を握ったのだった。

遊星と龍可は流れるプールを離れ、波が起きるプールに来ていた。このプールには本物の海のような感じを出すために、砂浜が用意されており、その砂浜に数十人の人達が集まっていた。

その中の一人、十六夜アキがこちらに気付いたのか、近寄ってくる。

「遊星！」

余談だが、普段の赤いドレスではなく、赤いビキニを着た十六夜は男性に対しての破壊力が半端ではない。

「どうしたアキ？」

「安全確認、手伝えなくてごめんなさい……」

「気にすることじゃない。それに確認中、みんなにもしもの事があったら大変だからな」

「遊星……」

遊星は優しく十六夜を気遣った。

もちろん、自分のためにそう言ってくれているというのは十六夜は気付いている。

「遊星、それで」

十六夜の言葉が途中で止まる。

不審に思った遊星は十六夜の視線を辿る。

すると、その視線の先には自分の手があった。

そう、十六夜は見てしまったのだ。

遊星と龍可が手を繋いでいるという光景を。

「ゆっ、遊星……！」

「ん、何だ？」

十六夜はその光景を見た後、再び遊星に視線を合わせる。

普通の人が見れば、変な誤解を受けるような光景にも見えたりするのだが、その時の十六夜は何かがおかしかった。

何故なら、次の瞬間に十六夜の言った台詞がそれを物語っている。

「わっ、私とも手を繋いで……！」

少し離れた場所にいたはずの人々の空気が凍った。

「き、聞いたかクロウ……！」

「ああ、バッチリだぜ……！」

凍り付いた空気の中、鬼柳とクロウは何故かメラメラと静かに燃えている。

あながち理由は分からなくもない。

一方の遊星は十六夜の頼みをどうするか考えていた。

（手を繋ぐのは問題ないんだが……）

すると、それを不満に感じたのか龍可が異論を唱える。

「アキさん！遊星と手を繋げるのは“一人”までです！」

まるで父親を守ろうとする子供のように、遊星の手をしつかり掴んでいる龍可を見た十六夜は何か言いようのない嫉妬心が芽生える。何を子供相手に……とは自分で思っているのだが、そのモヤモヤ感  
は簡単に消えないらしい。

「そ、そう……！じ、じゃあ、私とデュエルしない？」

その言葉に周りには衝撃が走る。

“十六夜が龍可と！？” そんな思いが皆の頭に過ぎったのだった。

「私がアキさんと……？」

龍可は思案顔を浮かべる。

それもそう、龍可は自分の力が十六夜に通じるなど思っていない。ましてや、相手はデュエルアカデミア高等部のトップ。

普通なら勝てるなんて思わないだろう。だが、龍可は違った。

ここは引けない勝負。そう確信した龍可は十六夜にこう告げた。

「やるわ……！」

「フフツ、それでこそライバルよ」

二人の女性はお互いに睨み合い、火花を散らす。

（なぜ俺と手を繋ぐというだけでこうなったんだ……？）

当の本人には、なぜ十六夜と龍可が争うかは全くもって分かっていなかった。

「準備出来たわ！」

「私もです！アキさん」

十六夜と龍可はデュエルディスクのオートシャッフル機能を使い、お互いデッキをシャッフルする。

そしてシャッフルを終えると、お互いは少し距離を取り、ディスクを構えた。

「行くわよ……」

「デュエル！！」

十六夜のディスクに先行の合図があった。  
それを確認した十六夜はカードをドロースる。

「私のターン、ドロー！」

十六夜

LP4000

手札6枚

「私は『シード・オブ・フレイム』を召喚！攻撃表示よ！」

何か奇妙な植物の形をしたモンスターが現れる。

シード・オブ・フレイム

ATK1600

「そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

十六夜

LP4000

手札4枚

『シード・オブ・フレイム』《攻》  
伏せ1

「それじゃあ、私のターン！」

龍可

LP4000

手札6枚

「私は『サンライト・ユニコーン』を召喚！」

背中に青い炎を宿した白い馬が、龍可の場に駆け付けた。

サンライト・ユニコーン

ATK1800

「『サンライト・ユニコーン』の効果発動！デッキの一番上のカードをめくり、そのカードが装備魔法だった時、そのカードを手札に加え、それ以外ならデッキの一番下に戻す！」

龍可はデッキの一番上のカードをめくって確認する。

そのカードは

「私のめくったカードは『一角獣のホーン』！よって、私はこのカードを手札に加える」

龍可 はめくつたカードをそのまま手札に加えた。

「私はさらに今、手札に加えたカード『一角獣のホーン』を『サンライト・ユニコーン』に装備！攻撃力・守備力を700ポイントアップします！」

サンライト・ユニコーンの角が少し大きくなり、その角から出ているオーラがサンライト・ユニコーンの全身に広がる。

サンライト・ユニコーン

ATK 1800 2500

DEF 1200 1900

「『サンライト・ユニコーン』！『シード・オブ・フレイム』を攻撃！」

サンライト・ユニコーンの角がシード・オブ・フレイムの体を貫いた。

「くっ……！」

十六夜

LP 4000 3100

「私はこれでターンエンドです！」

龍可

LP 4000

手札 5枚

『サンライト・ユニコーン』 《攻》 《装備》  
『一角獣のホーン』 《装備》

（強くなったわね龍可……でも、私も負けられない！）

十六夜はカードを引く手に力を込め、ゆっくりとカードを引いた。

## 番外編・暑い夏の日に〈中編〉

十六夜と龍可が浜辺でデュエルをしている最中、遊星達は近くにパラソルをさしてそのデュエルを観戦していた。

（なぜ、こんな事に……）

遊星に関してはなぜこういう事態になったのか、まだ分かっていなかった。

そんな時、遊星に話し掛ける人物がいた。

『遊星くん、まだ考えてるの？』

トランクスのような海パンの格好でかなり奇抜な髪型をしており、首から金の逆ピラミッド型のペンダントをぶら下げた少年、武藤遊戯だ。

「はい、俺何かしたんでしょうか？」

「いや、遊星くんは何もしていないけど……」

遊戯は十六夜と龍可の表情を見る。

そこには一見、難しい顔をしているように見えるが、実際は楽しいのだろう。こうやって遊星達とプールに来れた事や、遊星を賭けたデュエルが出来ることが。

そして、二人がデュエルをする原因と言えば

（まあ、一つの原因といえば遊星くんの鈍感さ……かな……）

微妙に苦笑いを浮かべる遊戯に遊星はさらに悩みが深まったのだっ



た。

「私のターン！」

十六夜

LP 3100

手札 5枚

伏せ 1

「私は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！」

十六夜の場合に花の部分が種のような形の植物が現れる。

ローンファイア・ブロッサム

ATK 500

「『ローンファイア・ブロッサム』の効果を発動！自分フィールド上の植物族をリリースすることで、デッキから植物族を一体特殊召喚することができる！」

十六夜の場合にいる植物族は“ローンファイア・ブロッサム”のみ。  
これが意味するのは

「私は『ローンファイア・ブロッサム』をリリースし、デッキから『ギガプラント』を特殊召喚するわ！」

両腕の先が鎌のような巨大な植物怪物が十六夜の場合に現れる。

ギガプラント

ATK2400

「さらに私は手札から装備魔法『スーペルヴィス』を発動！このカードはデュアルモンスターにのみ装備でき、このカードを装備したデュアルモンスターは“デュアル”召喚をした扱いとなる！私は『ギガプラント』に装備！」

ギガプラントが橙のオーラを纏う。

ギガプラント（デュアル）

ATK2400

「『ギガプラント』の効果を発動するわ！『ギガプラント』をデュアル召喚している時、手札または墓地から植物族か昆虫族モンスターを特殊召喚できるのよ！」

「えっ……！」

十六夜はそう告げると、手札から一枚のカードをディスクにセットした。

「私は手札から『椿姫ティタニアル』を特殊召喚！」

十六夜場に現れた一輪の花の中に女性が立っている……と言うより、上半身だけ見えている。

椿姫ティタニアル

ATK2800

「こ、攻撃力2800……！？」

龍可は頬から冷や汗を流す。  
それもそうだ。いきなり攻撃力2400のモンスターと2800の  
モンスターが現れたのだ。  
焦るのも仕方はない。

（さすがはアキさんね……少しも隙が無いわ……）

「行くわよ龍可……」椿姫ティタニアル』で『サンライト・ユニコーン』を攻撃！」

椿の花がサンライト・ユニコーンを包み込み地面へ引きずりこんでいく。

サンライト・ユニコーンは足掻いたが、それは何の意味も持たず、サンライト・ユニコーンは場から退場した。

「うつ……！」

龍可

LP4000 3700

「まだよ！『ギガプラント』でダイレクトアタック！」

ギガプラントの手に付いている鎌が龍可を切り裂いた。  
だが本当に切り裂いた訳ではなく、鎌は龍可の体をすり抜けていく  
だけだ。

しかし、いつもながらに衝撃だけは本物だ。

「キャアアアア……！」

龍可

LP3700 1300

「くっ……」

龍可 は 衝撃の影響でよろめいた体制を立て直す。

「『一角獣のホーン』は墓地に送られた時、デッキの一番上に戻る！」

「私はこれで終了よ……」

十六夜

LP3100

手札2枚

『ギガプラント』（デュアル）《攻》

『椿姫ティタニアル』《攻》

伏せ1

「（アキさんの手は完璧だった……私も全力を出さないと……負ける！）私のターン！」

龍可

LP1300

手札6枚

「私は『レグルス』を召喚！」

龍可 の場にライオンのような獣が現れる。

「さらに手札から『一角獣のホーン』を装備！攻撃力、守備力を700ポイントアップするわ！」

レグルス

ATK 1700 2400

DEF 1000 1700

「『レグルス』で『ギガプラント』を攻撃！」

「攻撃力は互角なのに!？」

レグルスはギガプラントの頭に噛み付き、その攻撃で激痛を感じたギガプラントは鎌を振り回し、レグルスを弾き飛ばす。そのまま2体は消滅した。

「くっ……でも『ギガプラント』に装備されていた『スーペルヴィス』にはもう一つ効果があるわ!このカードが墓地に送られた時、自分の墓地に存在する通常モンスター1体を特殊召喚できる！」

「アキさんの墓地には通常モンスターがない……けど、」

「そう、墓地と手札にあるデュアルモンスターは“通常モンスター扱い”!よって、墓地で通常モンスターとなっている『ギガプラント』が蘇る！」

再び地面からギガプラントが現れた。

ギガプラント

ATK 2400

「うっ……私は墓地に送られた『一角獣のホーン』をデッキの一番上に戻し、カードを3枚伏せてターンエンドよ」

龍可

LP 1300

手札1枚

伏せ3

「私のターン！」

十六夜

LP3100

手札3枚

『ギガプラント』《攻》

『椿姫ティタニアル』《攻》

伏せ1

「私は『ギガプラント』を再度、デュアル召喚する！」

ギガプラント（デュアル）

ATK2400

（アキさんはこれでまたモンスターを特殊召喚できる……！）

「『ギガプラント』の効果を発動！手札から『ボタニカル・ライオ』を特殊召喚！」

体が樹木でできたライオンが現れ、雄叫びをあげる。

ボタニカル・ライオ

ATK1600

「『ボタニカル・ライオ』は自分フィールド上に存在する植物族モンスター1体につき、攻撃力を300ポイントアップする！今、私の場にいる植物族は3体。よって攻撃力を900ポイントアップするわ！」

ボタニカル・ライオ

ATK1600 2500

「『椿姫ティタニアル』で龍可にダイレクトアタック！」

ティタニアルが手を動かし、龍可に照準を合わせる。そしてティタニアルの手から花吹雪が発射された。だが、

「そうはいかないわ！リバーカードオープン！『聖なるバリア・ミラーフォース』！」

龍可の目の前に虹色に輝くバリアが現れ、花吹雪を受け止める。

「『聖なるバリア・ミラーフォース』は相手が攻撃して来た時、その攻撃を反射して、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」  
「なっ……！」

受け止めた花吹雪は四方八方に飛び散り、十六夜の場のモンスターを破壊していった。

「も、モンスターが全滅なんて……！」

「これでアキさんの場はがら空きになったわ！」

「くっ……！私はこれでターンエンド……！」

十六夜

LP3100

手札2枚

伏せ1

「私の……ターン！」

龍可

LP 1300

手札 2枚

伏せ 2

「私は『クリボン』を召喚！」

茶色の毛玉のような体に可愛らしいリボンを付けたモンスターが現れた。

クリボン

ATK 300

「さらに『クリボン』に『一角獣のホーン』を装備！攻撃力、守備力を700ポイントアップ！」

クリボン

ATK 300 1000

DEF 200 900

「『クリボン』でダイレクトアタック！」

クリクリ、と声をあげながら十六夜にタックルする。

「きゃあ！」

十六夜

LP 3100 2100



「私はこれでターン終了です！」

龍可

LP 1300

手札 0 枚

『クリボン』 《攻》 《装備》

『一角獣のホーン』 《装備》

伏せ 2

十六夜は驚いていた。龍可のデュエルの腕前には無い。

それほどまでに遊星と二人きりの時間を作りたいと思っているその  
“想い”にだ。

（龍可がここまで遊星を……それなのに私は……）

十六夜はある事を決意する。

その決意を胸に秘め、十六夜はカードをドロ―した。

「私のターン！」

十六夜

LP 2100

手札 3 枚

伏せ 1

「私は『夜薔薇の騎士』を召喚！」

鎧を着た少年の騎士が十六夜の場に現れる。

夜薔薇の騎士

ATK1000

「『夜薔薇の騎士』が召喚に成功した時、自分の手札からレベル4以下の植物族モンスターを特殊召喚できる！」

十六夜はカードをディスクにセットした。

「『ギガント・セファロタス』を特殊召喚するわ！」

夜薔薇の騎士が横に剣をかざすと、そこから大きな口をあけた植物の怪物が現れた。

ギガント・セファロタス

ATK1850

「ここからよ！レベル4『ギガント・セファロタス』にレベル3『夜薔薇の騎士』をチューニング！」

（こ、ここでシンクロ召喚！？）

夜薔薇の騎士が3つの輪を作り出し、ギガント・セファロタスを包み込む。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンクロ召喚！」

ギガント・セファロタスが強烈な光を放ち、その中から翼を大きく開いた龍が現れる。

「現れよ！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！！」

ブラック・ローズ・ドラゴン

ATK2400

「（龍可の場には『クリボン』が1体……。あのモンスターは攻撃を受けた時、自分へのダメージを0にし、攻撃モンスターの攻撃力分、相手のライフを回復する効果を持っている……。ということはあの伏せカードの一枚は“あのカード”ということになるわね……。なら……。！）『ブラック・ローズ・ドラゴン』！『クリボン』を攻撃！ブラック・ローズ・フレアー！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが黒い炎を吐き出すと、その炎は意志を持ったかのようにクリボン目掛けて燃えていく。

「リバースカードオープン！永続罠！『シモツチによる副作用』を発動！」

「そう来ると思ったわ！手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！」

場に竜巻がおり、『シモツチによる副作用』を包み込む。が、その竜巻が突然弾け飛んだ。

「えっ！？」

「私はカウンター罠、『神の宣告』を発動！ライフを半分にすることで、モンスターの召喚、魔法・罠の発動を無効にし、破壊する！」

龍可

LP1300 650

龍可は読んでいたのだ。

自分のキーカードを破壊して来ることを。

「くっ……！」

「そして『クリボン』の効果を発動！自分への戦闘ダメージを0にして、相手のライフを攻撃モンスターの攻撃力分、回復する！」

「だけど」

「『シモツチによる副作用』の効果によって、回復はダメージとなるわ！」

クリボンから放たれた光は十六夜に回復をもたらさず、ダメージをもたらしたのだった。

「きゃああああ！」

十六夜

LP 2100 0

番外編・暑い夏の日へ後編（前書き）

完全キャラ崩壊！……のような気がしますので、閲覧には注意してください！

いや、そんな大幅な崩し方はしておりませんが……（笑）

## 番外編・暑い夏の日に〈後編〉

「おっ、終わったみたいだぜ」

十六夜達のデュエルが終了したことを、パラソルの下にいた城之内が他の皆に伝える。

「すごい戦いだっただね……」

「そ、そうだね……」

遊戯と杏子は二人のデュエルを見てそう思ったらしい。

確かに白熱した戦いではあった。

だがまさか、龍可が勝つなど誰も予想していなかったらしく、クロウや鬼柳達は啞然としていた。

そして、一番驚いていたのは龍可の双子の兄である龍亜だった。

「アキ姉ちゃんに……勝った？……龍可が？」

まだどこか信じれていないらしく、龍亜は目を白黒させている。するとデュエルの終わった龍可に近づく影が一つ……そう、遊星だった。

「強くなっただな龍可……」

「遊星……!!」

ポン、と頭に遊星の手が置かれ、龍可は涙目になりながらも頬を染め、満面の笑みを浮かべた。

「でも、遊星」

「ああ、分かっている。ちょっと待っててくれ」

遊星は龍可から離れ、もう一人の女性、十六夜の元へと向かった。

「ゆ、遊星……私」

「アキ、ちよつとカードを見せてくれないか？」

「えっ……？」

遊星は十六夜のディスクの魔法・罾ゾーンにあるカードを確認した。それは十六夜が最初のターンから伏せていたカード……。

「フッ……やっぱりな」

そこに伏せられたカード……。そう、それは『神の宣告』だった。

「龍可の『神の宣告』に対して発動していれば、アキの勝ちだったが、そうしなかったのは龍可の姿勢に心を動かされたからだろう」  
「っ……！」

心を見透かされた十六夜は何も言うことが出来ず、ただ顔を俯かせているだけだった。

「私、龍可の真剣な姿を見ていたら何だか私のやっている事は違うんだな……って思ってた……そう思えば思うほど、このカードを発動できなくなっていた……」

十六夜は俯きながら言った。

聞こえるかどうか怪しい声で。

しかし、遊星に十六夜の言葉はちゃんと届いていた。

「……………それはアキの“優しさ”だ……………」

そして、遊星のかけたその言葉は十六夜の胸に優しく響いた。  
それと同時に涙が溢れ出て、気付いた時には遊星の胸で泣いていた。

「わ……………たし……………小さい頃に……………手を繋いで……………もらった事が……………  
無くて……………」

十六夜は過去に“化け物”と恐れられ、蔑まれながら生きてきた。  
それは親も例外ではなかった。

そう、ずっと避けられながら生きてきた十六夜の頭に、手を繋いで  
もらった記憶が殆ど無いのだ。

今回、龍可にデュエルを挑んでも遊星と手を繋ぎたかった理由は  
それだった。

でも結局、自分は龍可に負けた。  
それがどんな状態であったとしても。

その事を知った遊星は十六夜に届くようにこう告げた。

「アキ、別に遠慮することは無いんだ。お前が手を繋ぎたいと思っ  
た時、俺が繋いでやる。お前が助けて欲しい時、俺が助けてやる。  
だから、もっと甘えていいんだ……………」

「っ……………ゆう……………せ……………い……………!……………」

遊星は自分の胸で泣きじゃくる十六夜を引き離すことも無く、ただ  
見守っていた。

お互いに右手を握りあいながら……………。

それからしばらくして十六夜が泣き止んだ後、遊星は龍可の元へ来



ていた。

龍可と十六夜が結んだ約束を果たすためだ。

「アキさん、泣いてたね……」

「ああ、だが大丈夫だ」

「そう……」

龍可は悩んでいた。

自分が勝って良かったのか……と。

「どうしたんだ？ 龍可」

「う、ううん！ 何でもない！」

「そうか……だが、」

「？」

遊星は一呼吸置くと、龍可にこう告げる。

「龍可が気に病むことじゃない」

「……」

まるで悩んでいる事を知っているかのように言い当てられた龍可は息が止まる思いだった。

「だ、大丈夫よ！」

「そうか、龍可は何事も抱え込んでしまうタイプだと思ってな……」

遊星がそう言っているのには理由があった。

以前、龍可と龍亜がイリアステルの三皇帝の一人、ルチアーノとライディングデュエルを行った時の事。

ルチアーノの操る『機皇帝スキエル』を前に龍亜と龍可は善戦し

たのだが、龍可の持つ『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』を機皇帝に奪われ、それを取り返すために龍亜が犠牲になった。

龍可にはそれが悔しかったらしく、あの子の数日間、龍可の気分は優れなかった。

「それは……」

「別に龍可が悪いんじゃないんだ。だから龍可、全てを背負うな。少しずつでいい、俺達仲間にそれを分けてくれ」

「……遊星……」

そう言われた龍可は涙が溢れそうになった。

今まで殆ど家に親がおらず、たった一人の兄、龍亜にしか頼れなかった龍可に遊星やジャック、クロウや十六夜といった、たくさんの仲間ができた。

もう一人で悩まなくていい。龍亜にだけ負担を掛けなくていい。そう考えるだけで、目頭が熱くなってくる。

「ゆう……せい……！」

龍可は子が親に甘えるように、遊星に抱き着いた。

抱き着かれた遊星は龍可の頭を優しく撫でた。

「龍可」

「……何……遊星？」

龍可がその声に顔をあげると、遊星が手を差し延べていた。

「少し歩いてから皆の所へ戻ろっか」

龍可は溢れ出す涙を手で拭き、優しい笑顔を浮かべながら、遊星の

手を握った。

「うん！」

ここにいるのはパラソル組。

太陽も半分まで沈み、辺りが橙の色に染まってきたので、ここを出る準備をしていた。

「いや、この空気を壊すのは気が引けるんだけどよ……」

鬼柳が言う。

「俺達出番が少ない上に、この遊星のハーレム状態は何だ！」

鬼柳が指差した方向には、十六夜と龍可の二人と手を繋ぐ遊星の姿があった。

「なんだ鬼柳、羨ましいのか」

「当たり前だ、ちくしょおおおおお！」

暴走する鬼柳に遊星はとどめを刺すが如く、こう告げた。

「別に俺達は恋人って言う訳じゃないぞ？」

「それはもう殆ど恋人じゃあねえのか！」

その言葉を聞いた十六夜と龍可は頬を朱に染める。

「べ、別にそういう訳で手を繋いでる訳じゃあ……」

「そ、そうですね！ただちょっと手を繋ぎたかっただけと言っか…」

すると、先程まで黙々と片付けをしていたクロウが突然、暴れだした。

「もう完全に絵面がハーレムなんだよ！何処までお前は鈍感なんだ！遊星！」

「突然どうしたんだクロウ？イライラするなら牛乳を飲むと」

「「だーかーらーな！！」」

賑やかな雰囲気を見て、十六夜と龍可は思う。ただ純粹に。“遊星に会えて良かった”と。もうすぐ沈む夕日を見ながら……。

「出番で言うなら俺達の方が少ないのではないのか？」

「それ言っちゃダメだぜ、ジャック」

「でも、確かに俺達出番少なかったよ？ねえ、遊戯さん？」

「ハハハ……」

### 13章・1・精霊と言葉交わす者

一人、童実野町を駆ける青年がいた。

赤いジャケットを羽織り、少し茶が混ざった髪は後ろへ靡くかのような髪型をしている。

「ユベル、この遊戯さんがいる町に“遊星”がいるって本当か？」

その青年が話し掛けた場所を見ると、男女の体を半分ずつ持った、人らしい姿はしているのだが、人とは違う皮膚を持った“人間”が浮かんでいた。

『十代、僕が信じられないのかい？』

「いや、そうじゃねえけど　　！？」

十代と呼ばれた青年が何かを言いかけた時、十代の頭に何かが過ぎる。

「ユベル！今何かが俺達に話し掛けて来なかったか！？」

『ああ、君という“ハネクリボー”と同じ声だったよ』

「何だって！？」

十代は一度足を止める。

「声はどっちから聞こえた！？」

『あっちだ』

ユベルが指を指した方向を地図で確認すると、その方向にあるのは港。

どうやら不思議な声は港の方角からするらしい。  
確認を終えた十代は再び足を動かしてはじめる。

（この世界に精霊がいるのか！？それとも）

十代は何かを感じずつ、港へと走っていった。

光があまり入らない暗い部屋の中。

そこには未開封の段ボールや使用用途の分からない鉄パイプが散乱しており、見た限りは倉庫のように思える。

そんな場所に子供二人と女性一人が閉じ込められていた。

子供二人の容姿はウリ二つで、緑の髪をした男女の双子……龍亜と龍可で、もう一人の女性はいたってラフな格好をしており、黄色のTシャツに短いジーンパンを穿いていた。  
そう先程、城之内といった女性の杏子だ。

「うつ……」

龍亜の意識が戻ったのか、小さなうめき声をあげる。

そして、ゆっくりと起き上がるとキョロキョロ辺りを見回し、状況を確認する。

「ここは……？」

気を失っている二人の他に誰もいない為、返事は返って来ない。  
そのことに少し寂しさを感じたのか、同じく床に倒れていた龍可と杏子を軽く揺さ振る。

「おい龍可！あと、そこのお姉ちゃん！起きて！」

揺さ振られた二人は少し目を開ける。

まだ、意識がはつきりとしていないようだ。

「龍可！お姉ちゃん！」

その呼び掛けで龍可と杏子の意識ははつきりとし始めた。  
二人とも目を擦りながら、ゆっくりと体を起こす。

「龍可！お姉ちゃん！よかった〜！」

龍亜は喜びの言葉と共に安堵のため息を漏らした。

「ここ……何処？」

「龍亜？……あれ？私達何をしてたの？」

「俺達、気を失ってどこかへ閉じ込められたみたい」

「え……？ あっ！」

龍可と杏子は少し前に起きた出来事を思い出した。

「そっか……私達、あのゼウスとか言う奴に……」

「クロウ、大丈夫かな……」

龍可と龍亜はクロウの事を心配する。

すると、誰も喋らない倉庫の中には沈黙の空気が流れはじめた。

すると、杏子はその空気を払拭するように龍亜と龍可に話し掛ける。

「ね、ねえ！ずっとこんな所にいないで、早く外に出ましよう！？」

「あっ……それもそうだね！」

龍亜は返事をする、すぐ側にあったドアのノブに手を掛ける。

ガチャ、ガチャ

「……ドアが開かないよ？」

「「ええ　　っ!？」」

ドアがロックされていた。

「どどど、どうしよう!」

「落ち着きなさいよ龍亜!」

「そ、そんな事言ったって……」

するとそんな時

ドンッ!ドンッ!

「なっ、何?」

その音にその場の全員が驚く。

「……ゆ、幽霊とか?」

「や、やめてよ龍亜!」

龍亜の言葉に龍可が怯える。すると、外から男性の声が聞こえてきた。

『貴様!何をしている!』



龍亜達には誰に対して投げ掛けられた言葉が分からなかった。

「貴様！何をしている！」

十代は困っていた。

折角、声が聞こえてきた港へ着いたと言うのに、黒マントの男二人に囲まれてしまった。

「あちゃー、めんどくさいことになったな……」

『ほら見ろ、君が勝手に突っ走るからだ』

「ちえ　っ！」

そんな十代の言葉を無視し、黒マント達はデュエルディスクを構えた。

「貴様にはここで消えてもらう！」

「お、デュエルか！？なら受けて立つぜ！最近、まともなデュエルをしてなかったからな！」

『全く君は……』

「行くぜ！“違う世界の自分”と融合したこのデッキでお前達を倒してやる！」

「「デュエル！」「」」

### 13章・2・HEROの力

「私のターンからだ！」

黒マント1&2（黒1）

LP4000

手札6枚、5枚

「私は『素早いモモンガ』を召喚！」

場に可愛いモモンガが現れる。

素早いモモンガ

DEF100

「さらに私は『治療の神 デュアン・ケト』を3枚発動！ライフポイントを3000回復する！」

黒マント1に光が降り注ぐ。

黒マント1&2

LP4000 7000

「私はこれでターンエンドだ！」

黒マント1&2（黒1）

LP7000

手札2枚、5枚

『素早いモモンガ』《守》

（私のライフは7000。さらに場にはライフを回復してくれる『素早いモモンガ』がいる……。私達に負けは

「おっ、もういいのか？」

「何……！」

「そんなんじやもう一人のターンが回って来ないぜ？」

「貴様……！戯れ事も大概にしろ！」

「果たして戯れ事かな？行くぜ、俺のターン！」

十代

LP4000

手札6枚

「行くぜ！俺は手札から『E・HERO ヘル・ブラッド』を特殊召喚！」

この世界には存在するとは思えない人型の悪魔が十代のフィールド上に召喚される。

E・HERO ヘル・ブラッド

ATK300

「こいつは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、特殊召喚できる！」

「な……っ！」

「まだ行くぜ！『E・HERO ヘル・ブラッド』を生贄に『E・HERO マリシャス・エッジ』を召喚！」

先程よりも人らしさが出ている悪魔が現れる。

E・HERO マリシャス・エッジ  
ATK2600

「何っ！星7の上級モンスターにも関わらず、生贄が1体だどっ！？」

「そう！“マリシャス・エッジ”は相手フィールド上にモンスターが存在する時、生贄に必要なモンスターの数が1体になる！」

「くっ……！私のフィールド上のモンスターが仇となったのか……」

十代は「そうだぜ」と言うと、手札からある一枚のカードをデュエルディスクにセットした。

「さあ、まだ俺のターンは終わっちゃいないぜ？手札から魔法カード『融合』を発動！」

空間に渦のような歪みが現れる。

「手札にある『E・HERO オーシャン』と『E・HERO フォレストマン』を融合！」

手札のカードが空間の渦に飲み込まれると、その渦が光を放つ。

「来い！『E・HERO ジ・アース』……！」

白い姿の人型モンスターが渦から飛び出し、十代の場に降り立った。

E・HERO ジ・アース  
ATK2500

「次はコイツだ！魔法カード『ミラクル・フュージョン』……この

カードはデッキに眠る“E・HERO”と名の付いた融合モンスターに記されたモンスターを墓地から除外し、その融合モンスターを融合召喚出来る！」

「まさか、また“ジ・アース”を……！？」

「いや、今回はコイツだ！墓地から『E・HERO フォレストマン』と『E・HERO オーシャン』を除外！」

十代の墓地からフォレストマンとオーシャンの魂が融合し、新たなモンスターが登場する。

「出てこい！『E・HERO アブソルートZero』！！」

先程のジ・アースと同じ、白い人の姿をしているが、ジ・アースと違い、白いマントを羽織り、細い身体をしたモンスターが十代の場に現れる。

E・HERO アブソルートZero  
ATK2500

（1ターンで攻撃力2500を超えたモンスターを3体召喚するだと……！？だが、『素早いモモンガ』は破壊されると1000ライフを回復する上、デッキから同名モンスターを2体まで特殊召喚できる……。あいつは私にダイレクトアタックできないはず）

「俺は『E・HERO ジ・アース』の効果を発動！“ジ・アース”はフィールド上のE・HEROを生贄に捧げることで、そのモンスターの攻撃力を得ることが出来るんだ！」

「なっ　！？」

「俺は『E・HERO アブソルートZero』を生贄に捧げる！」

アブソルートZeroの身体が光となり、ジ・アースの身体へと取

り込まれていく。

すると、ジ・アースの身体が怒りを表すかのように赤くなった。

E・HERO ジ・アース

ATK 2500 5000

「ご、5000だと！？……だが、私のフィールドには『素早いモ  
モンガ』が……」

「この瞬間、墓地にある『E・HERO アブソルートZero』  
の効果が発動する！このカードがフィールドを離れた時、相手フイ  
ールド上のカードを全て破壊する！」

「な、何だとっ！？」

十代の墓地から発生した、絶対零度の吹雪が黒マントの場を包み、  
素早いモモンガを凍死させる。

「わ、私達の場合が……がら空き……？」

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

その十代の言葉と共にマリシヤス・エッジとジ・アースが黒マント  
達に攻撃する。

「うわあああああー！！」

黒マント1&2

LP 7000 0

## 14章・1・集結！三人の英雄

「よし！勝ったぜ！」

圧倒的な力とスピードで、黒マント二人を倒した十代。倒された黒マント達は大きなショックを受けたらしく、気を失っていた。

そんな二人に少し悪いと思いながらも十代は倉庫に意識を向けた。

「やはり精霊の気配はするぜ……」

『ああ、だが』

「この扉にかなり強力な結界が張られてるみたいだ」

倉庫の扉が微かに光を放っており、十代が試しに取っ手を引っ張ってみたが、びくともしなかった。

『なら、やることは一つ……』

「精霊の力でぶち破る！」

十代はデッキからカードを1枚ドロし、そのカードを天に掲げる。

「行くぜ！『E・HERO ネオス』を召喚！」

全身が銀に光る人型モンスターが十代の前に現れる。

「ネオス！頼む！」

『分かった！』

気合いを入れるような声とともにネオスは倉庫の扉を殴る。

だが、そんなネオスを嘲笑うかのごとく、扉は全く微動だにしなかった。

「ネオスの攻撃を受け付けられないのか!？」

『十代! 私の攻撃だけでは足りないようだ! もっと多くの攻撃がいる!』

「と、言われても……」

他にユベルやネオスピーシ안의仲間の精霊がいるのだが、どうやらそれだけでは足りないらしい。

だが、今ここには十代以外、精霊を操れるものはいない。

(精霊でなくてもいい。何か物理的に干渉できる奴が )

タタタタタタツ!!

「!？」

十代が頭を悩ませていた時、こちらに向かってくる足音が聞こえてくる。その足音が聞こえてきた方向を見ると、そこには数人の人影がこちらに向かって来ているのだった。

「くっ……! 僕の計画がどんどん崩れていく……」

ある路地裏でマリクは頭を抱えていた。

「くそっ! くそっ!」

『何だ、まだウジウジしてやがったのか』



「!!」

マリクは聞き覚えのある声の方を見る。  
そこにはあの男、ゼウシスが立っていた。

「何をしに来た……!」

「いや? ちよいと交渉に来ただけだぜ?」

「交渉だと……?」

「ああ。……俺と手を結べ」

「なん……だと……?」

マリクはゼウシスの言った意味が分からず、その場には重い沈黙の空気が流れた。

「あ、あれは!」

十代の目線の先には逆三角錐のペンダントを下げた奇抜な髪の少年や蟹型の髪をした青年、赤い髪に赤いドレスのような服を着た女性、ヘアバンドで髪を纏め上げた青年にちょっと不良っぽい青年達がこちらに向かって、走って来ていた。

「遊戯さん! 遊星!」

「じ、十代さん!?」

遊星は十代の事を知っているらしく、十代が遊星の名を呼んだ瞬間、遊星は驚いた顔をしていた。

一方、遊戯は十代の事を知らないらしく、十代に呼ばれてもピンと来ていないみたいだ。

「十代さん、どうしてここに!？」

「話は後にしようぜ! 皆、ここを開けるのを手伝ってくれ!」

「普通に開かねーのかよ!？」

「ここには結界が張られてるみたいだ! しかも、モンスターの攻撃しか受け付けられないらしい!」

十代の説明に遊星たちは驚くが、直ぐさま状況を理解し、デュエルディスクを構えた。

「行くよ! 僕は『ブラック・マジシャン』を召喚!」

「現れる! 『スターダスト・ドラゴン』!」

「私も行くわ! 『ブラック・ローズ・ドラゴン』を召喚!」

「俺達も行くぜ! 『ブラックフェザー・ドラゴン』!」

「出てこい! 『炎の剣士』!」

それぞれ宣言したモンスターが遊戯達の前に現れる。

「よし! 皆で攻撃するぜ! 行けッ、ネオス! ラス・オブ・ネオス!」

「ブラック・マジック!」

「シューティング・ソニック!」

「ブラック・ローズ・フレア!」

「ノーブル・ストリーム!」

「闘気炎斬剣!」

バリン!!

モンスター達の攻撃に耐えられなくなったのか、ガラスを割るような音とともに光り輝く結界が弾け飛んだ。

「よし！結界を破壊したぜ！」

十代はその台詞と共に倉庫の取っ手を掴み、扉を開ける。すると、そこには三人の女子供達がいたのだった。

## 14章・2・集合する仲間と一人の真実

「龍可！龍亜！大丈夫か！」

倉庫の扉が開き、遊星が一番に飛び込む。

そこには龍亜と龍可と杏子が驚いた顔で佇んでいた。

「龍可！龍亜！」

「ゆ、遊星……！」

「怖かったよー！」

龍亜と龍可が涙目になりながら、遊星に飛びついてきた。

遊星はそれを身体全体で受け止める。

「大丈夫か……？」

「うん！遊星も大丈夫だった？」

「ああ」

遊星は龍亜の言葉に返事をする、直ぐさま立ち上がり、双子を連れて十代達の元へと向かった。

「十代さん」

「どうしたんだ？遊星」

「何故あなたがこの時代に？」

「ああ、それは」

時は遡り、旅を続けていた十代は遊戯と遊星と共にパラドックスを

倒し、元の時代へと帰って来ていた。

「なあ、ユベル……。未来にはあんな力があるんだな」

『珍しいじゃないか十代。君がそんなに元気が無いなんて』

「いや、別に元気が無い訳じゃないさ。ただ、痛感したただけだ……」

十代はパラドックスと戦って痛感していた。

パラドックスが使っていたドラゴン族モンスターは強力だった。

だが、その中でも一際強力だったのが、遊星のエースでもあり、  
“シンクロモンスター”である『スターダスト・ドラゴン』。

それまでのドラゴン族にはネオスの力で辛うじて対抗できていたのだが、スターダストの攻撃を受けた瞬間、ネオスと共に十代の体が吹っ飛ばされてしまった。

十代が力の差を感じたのはそこだった。

「シンクロモンスターはネオスの力では対抗出来ないほどの力を持っている……」

自分もあれほどの力があれば……と考える十代にユベルが反論する。

『力に頼った奴が最期に辿る結末を君は知っているだろう』

そう言われて十代はもう一度考える。

十代が今まで戦ってきたデュエリストの殆どが闇に落ち、力に溺れ、敗北してきた。

それは十代にとっても同じ事。

一度、深い心の穴を『霸王』の意志に乗っ取られ、力を奮い、そして最期にはオブライエンに精神面とはいえ敗北した。

それで改めて確信した。本当に大切なのは『力』じゃない、『絆』なのだ。

「そっか、俺は教わったんだよな、数々のデュエリストに……。そして、遊戯さんに！」

顔に元気が戻った十代を見たユベルは一度フン、と笑うと十代の魂の中へと戻っていった。

「よし！また旅の続きを」

と意気込み、十代が勢いよく立ち上がったその瞬間、ドオオオンと言う轟音と共に一つの建物が爆発した。

「な、なんだ！？」

幸いそこらには人がおらず、被害はなかったが、それでもこのままでは危険だと感知した十代はその無惨に瓦礫の山と化した建物跡に近づく。

「な、何でいきなり爆発が」

『その答えは俺がブツ潰したからだ』

砂埃の中から男の声が聞こえてきた。

「誰だ！」

そう相手に問い掛けると、砂埃が晴れていき、男の姿があらわになる。

その姿は白いフード付きマントに身を包み、フードの奥から邪悪な意志が満ち溢れた紅い二つの瞳が十代を睨み付けていた。

「俺の名はゼウシス。遊城十代！貴様には時の狭間で永遠にさまよってもらうぞ！」

「な　　！」

ゼウシスと名乗った男が右手を前にだすと、紅い光が辺りを包む。

「くっ　　！」

あまりの光の強さに十代が視界を腕で隠した次の瞬間、十代の意識は途切れたのだった。

「って事があつて、目が覚めた時は何処だか分からない世界に俺は飛ばされて、そして巡りに巡ってようやくここに来たっていう感じだな」

「そうなんですか……ゼウシスがあの時代に……」

バリバリバリバリ！！

遊星が呟いた瞬間、上空に一台のヘリが轟音を立てながら近づいてくる。

何やら扉が開いており、その開いた扉から体を持ち出しているのはジャックともう一人、似たようなコートを着た青年だった。

「あ、あれは海馬君！？」

「何であいつが！？」

遊戯と城之内が叫ぶと、それに答えるかのようにヘリが地上に近づき、ある程度まで近付くと扉からジャックと海馬が飛び降りた。

「遊戯！貴様、まだパズルカードを6枚集めてないみたいだな！」

「う、うん……」

「ならば、さつさとデュエリストを見つけ、パズルカードを揃えろ！貴様との決着は決勝戦で着けなければならないからな！」

「分かってる、だけど……」

もう空は暗くなり、パズルカードを持っているデュエリストなど僅かしかないだろう。

しかし、そんな時、遊星が告げる。

「パズルカードって、これの事ですか？」

遊星は右手に8枚のパズルカードを持っていた。

その場にいた十六夜と海馬以外のメンバーが一斉に驚く。

「ゆ、遊星！何でお前持ってた！？」

「いや、グールズとの戦いで手に入れたんだ」

クロウの問いに遊星は直ぐさま答える。

そして遊星は遊戯の方向へと向き、こう言った。

「遊戯さん、パズルカードが必要なんですよね？」

「う、うん、そうだよ」

「なら、パズルカードを賭けてデュエルしませんか？」

その言葉に全員が驚く。

「……うん！そのデュエル」



遊戯の持つ千年パズルが光り、遊戯の顔付きが変わった。

「受けて立つぜ！」

## 14章・3・特別な絆

対峙する遊戯と遊星。

お互いの真剣な眼差しに誰も口出しする者はいない　　かと思われた。

そう、あの男があることに気付いてしまったのだ。

「遊戯、待ってくれ」

「？」

そう能天気な男、城之内である。

「この場面で口出しするとはな……流石は“凡骨”と言ったところか」

「なにいつ！……へへーん！海馬あ！今回だけは俺の事を凡骨なんて言えねーぜ？」

「何っ……？」

「何故なら、お前のパズルカードは“5”枚しかないからだ！」

その城之内の言葉に皆、動揺する。

確かに海馬のデュエルディスクにセットされているパズルカードが5枚しかないのだ。

「凡骨に指摘されるなど、愚の骨頂……！」

「よって、海馬は決勝には行けないって訳だ！」

「くっ……！」

場に沈黙の空気が流れる。

その理由に海馬がパズルカードを集めていなかった、というのもある

るが、城之内が口喧嘩で海馬に勝っているところを遊戯達が見たことがなかった、という方がでかい。

誰も何も言い出せそうにない状況である男が動いた。

「遊星、オレにパズルカードを一枚渡せ」

「ジャック……！？」

そう、元キングであるジャックだった。

「武藤遊戯と海馬瀬戸、貴様達が手を組み、俺達とタッグデュエルをしろ！」

その場の全員に再び動揺が走るが、その中の一人、遊星だけがフツ、と笑いジャックに向かってパズルカードを投げ飛ばし、それをジャックが受け取る。

「貴様、どういう」

「お前には手加減をされたので……。これがどういう意味が分かるな？」

「……フン、つまり今度は“手加減無しで戦え”と？」

「フツ、分かっているではないか」

「……いいだろう、やってやる」

「決まりだな」

遊戯と遊星も異存は無いようで、ジャックは遊星の隣、海馬は遊戯の隣に立ち、それぞれシャッフルを済ませる。

「フツ、まさかお前と手を組むとはな……」

「フン、俺はあの男に借りを返すだけだ。貴様などと手を組むつもりなどない」

「準備はいいか！」

「「ああ！」」

「行くぞ！」

「「デュエル！！！」」

「俺の先行！」

遊戯&海馬（遊戯）

LP 4000

手札 6枚、5枚

「俺は『幻獣王ガゼル』を守備表示！」

ガゼルと呼ばれる獣が、場に出現する。

幻獣王ガゼル

DEF 1200

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊戯&海馬（遊戯）

LP 4000

手札 4枚、5枚

『幻獣王ガゼル』《守》

伏せ1

「先に行かせてもらっぞ遊星！俺のターン！」

遊星&ジャック（ジャック）

LP 4000

手札 5枚、6枚

「オレは『ツイン・ブレイカー』を召喚！」

両手に剣を携えた剣士がジャック側の場に現れた。

ツイン・ブレイカー

ATK1600

「『ツイン・ブレイカー』で『幻獣王ガゼル』を攻撃！」

ツイン・ブレイカーの刃がガゼルの体を引き裂いた。

「『ツイン・ブレイカー』が守備モンスターを攻撃した時、相手に貫通ダメージを与える！」

「くっ……！」

遊戯&海馬

LP4000 3600

「守備モンスターに攻撃した『ツイン・ブレイカー』はもう一度

」

「その前にリバーズカードを使わせてもらおう！罠カード『魂の綱』

！」

「ぐっ……！」

「『魂の綱』は自分フィールド上のモンスターが破壊された時、1000のライフを払う事で、自分のデッキからレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！」

遊戯&海馬

LP3600 2600

一本の魂の綱を握って現れたのは

「現れよ！『磁石の戦士』！！」

淡いピンク色をしたロボのような戦士だった。

磁石の戦士

DEF 1800

「くっ……！『ツイン・ブレイカー』の攻撃力では『磁石の戦士』の守備力には勝てない……オレは攻撃を中止」

ツイン・ブレイカーは静かにジャック達の場に戻っていった。

「オレはカードを3枚伏せ、ターンエンドだ！」

遊星&ジャック（ジャック）

LP 4000

手札 5枚、2枚

『ツイン・ブレイカー』《攻》  
伏せ3

「俺のターン！」

遊戯&海馬（海馬）

LP 2600

手札 4枚、6枚

『磁石の戦士』《守》

「俺は『ブラッド・ヴォルス』を召喚！」

斧を携えた悪魔が狂気に満ちた顔で現れる。

ブラッド・ヴォルス

ATK1900

「『ブラッド・ヴォルス』で『ツイン・ブレイカー』を攻撃！」

ブラッド・ヴォルスの斧がツイン・ブレイカーに襲い掛かる。

「フン！リバーズカードオープン！『攻撃の無力化』！」

ブラッド・ヴォルスの一撃が空間に発生した渦によって阻害され、やる気をそがれたブラッド・ヴォルスはそのまま海馬のフィールドへと戻っていった。

「『攻撃の無力化』は相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるのだ！」

「くっ……カードを3枚伏せ、ターンエンドだ！」

遊戯&海馬（海馬）

LP2600

手札4枚、2枚

『ブラッド・ヴォルス』《攻》

『磁石の戦士』《守》

伏せ3

「遊戯と海馬のコンビネーションは今の所イマイチだな」

近くで4人のデュエルを見守っていた人々の一人、城之内がそう言う。

「あのままじゃ、絶対に負けるな」

「どうしてそう思うの？」

城之内の言葉に疑問を感じた杏子が質問を投げ掛ける。

「だってよ……遊星と……ジャックだったか？なんか分かんねえけど、すごい『絆』を感じるんだよね……」

「絆……か……」

杏子と思う。

遊戯に勝ってほしいと。

そして決勝戦に進んで、皆で笑い合いたいと。

（遊戯……！）

「俺のターンだ！」

遊星&ジャック（遊星）

LP4000

手札6枚、2枚

『ツイン・ブレイカー』 《攻》

伏せ2



「俺は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』発動！手札のモンスターを墓地に送り、デッキまたは手札からレベル1のモンスターを特殊召喚できる！」

遊星が手札のカード一枚を墓地に送ると、デッキからカードが押し出され、そのカードを遊星はフィールドに出す。

「現れる！『レベル・ステイラー』！」

背中に何の模様もないてんとう虫が遊星の場に現れた。

レベル・ステイラー  
DEF0

「さらに手札から『ジャンク・シンクロン』召喚！」

遊星の場に体の小さいロボットが現れる。

ジャンク・シンクロン  
ATK1300

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！墓地に存在するレベル2以下のモンスターを特殊召喚する事ができる！俺が復活させるのは――」

遊星の墓地から蘇ったのは、頭が大きいが体は小さいという変わった姿のロボットだった。

「『チューニング・サポーター』……！」

チューニング・サポーター  
DEF300

「そうか、さっきの『ワン・フォー・ワン』のコストで捨てていたのか！」

「そうです、遊戯さん！」

遊星はそう返事を返すと、さらに目付きを鋭くする。

「行くぞ！レベル1『レベル・スティーラー』とレベル1『チューニング・サポーター』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

ジャンク・シンクロンが横腹に付いているコードを引くと、3つの輪になり、レベル・スティーラーとチューニング・サポーターの2体を囲む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす！光差す道となれ！シンクロ召喚！」

2体のモンスターの身体から光が放たれ、中から人型の影が現れる。

「切り開け、『ジャンク・ウォリアー』！！」

青い機械の身体を持つモンスターが遊星の場に舞い降りる。

ジャンク・ウォリアー

ATK2300

「『チューニング・サポーター』がシンクロ素材として墓地に送ら

れた時、デッキからカードを1枚ドローする」

遊星はデッキからカードを引き、手札に加える。

「ジャックの力を借りる！」

「ああ、元からそのつもりだ！」

フツ、と遊星が笑うと、先程ジャックが伏せたカードが開かれる。

「リバースカードオープン！『強化蘇生』！このカードは墓地のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる！」

遊星の場に穴が出現する。

「俺が復活させるのは『ジャンク・シンクロン』だ！」

ジャンク・シンクロン

ATK1300

「『強化蘇生』で特殊召喚したモンスターはレベルが1上がり、攻撃力、守備力を100ポイントアップする」

ジャンク・シンクロン

3 4

ATK1300 1400

DEF500 600

「「！！」」

遊戯と海馬は直ぐさまに感づく。

これは単純にモンスターを復活させたのではない、新たなモンスターへの準備なのだ。

「レベル4『ツイン・ブレイカー』にレベル4となった『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

ジャンク・シンクロンが先程と同じ行動を取り、4つの輪となる。その中にツイン・ブレイカーが飛び込み光となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！」

光が再びモンスターの姿を形作っていく。

その姿はキラキラと煌めく飛竜の姿をしていた。

「飛翔せよ！『スターダスト・ドラゴン』！！！」

まるで星屑を纏っているかのように全身を煌めかせた飛竜が大きく翼を広げ、空高く飛び上がる。

夜空で煌めくその竜の姿はまるで星の大群のようだった。

## 14章 - 4・勝利への道（前書き）

やっと完成……

この四人の対決、カード次第では速攻で勝負が決まってしまうそう  
で怖い……！

まだまだ、精進しますのでヨロシクお願いします！

## 14章・4・勝利への道

「バトルフェイズ！『ジャンク・ウォリアー』で『ブラッド・ヴォルス』を攻撃！」

ジャンク・ウォリアーの拳がブラッド・ヴォルスに向かう。

「スクラップ・フィスト！！」

「リバーズカードオープン！『収縮』！このカードの効果でモンスター1体の攻撃力を半分にする！」

「なっ……！（『ジャンク・ウォリアー』の攻撃力を下げるつもりか！）」

だが海馬は、遊星の想像と違う行動をとる。

「俺は『ブラッド・ヴォルス』の攻撃力を半分にする！」

ブラッド・ヴォルス

ATK1900 950

「なんだとっ！？」

叫んだのはジャックだ。

「何故だ！なぜ、『ブラッド・ヴォルス』の攻撃力を半分にする！？」

「それはこの為だ。リバーズカードオープン！『死のデッキ破壊ウイルス』！！」

発動と同時にブラッド・ヴォルスの姿が消える。

「このカードは自分フィールド上の闇属性・攻撃力1000以下のモンスターを媒体にウィルスを散布し、相手のフィールド、手札の1500以上のモンスターを全て破壊する！」

ブラッド・ヴォルスが消滅した場所から青緑色に近い霧が散布され、その霧が遊星とジャックに接近していく。  
だがそんな時、遊星が動いた。

「『スターダスト・ドラゴン』の効果を発動！ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

スターダスト・ドラゴンがウィルスの霧の前に立ち塞がり、遊星とジャックを護る。

そしてウィルスを煌めく翼で包み込むと、そのウィルスごとスターダスト・ドラゴンは光を放ちながら消滅していった。

「なっ……！！」

「な、なんだと！？ウィルスが……」

遊戯と海馬が動揺する。

海馬お得意のウィルスコンボが通用しなかった、という理由もあるが、一番の理由は……

「なぜ、ウィルスカードが貴様のモンスター1体の犠牲で済んだんだ！」

遊星は小さく笑う。

「『スターダスト・ドラゴン』の効果、ヴィクテム・サンクチュアリは、自身をリリースすることで、フィールド上のカードが破壊される効果を無効にし破壊することができる」

「そうか、ウィルスカードはフィールド上のモンスターを破壊するカード……」

「よって、貴様の龍の効果適用範囲に入ったということか……」

「ああ、そういうことだ！バトルを再開！攻撃対象の『ブラッド・ヴォルス』がいなくなったことにより攻撃対象を変更！『ジャンク・ウォリアー』！『磁石の戦士』を攻撃！」

攻撃対象を見失ったことによって、一時攻撃を中断していたジャンク・ウォリアーが再び拳を構え、背中に装備されたブースターの力を借り、磁石の戦士 に向かって突撃する。

「スクラップ・フィスト！」

ブースターの力によって高められた推進力で突撃したジャンク・ウォリアーの拳は磁石の戦士 の身体を軽々と打ち砕いた。

「くっ……！だが、『磁石の戦士』は守備表示……ダメージは受けないぜ！」

「分かってます！俺はカードを1枚伏せ」

遊星の場にカードが一枚伏せ表示で現れる。

「さらにエンドフェイズ！自身の効果によってリリースされた『スターダスト・ドラゴン』は俺の場に蘇る！」

煌めく小さな光が一カ所に集まり、その光は再び龍の形を作り出していく。



そして翼を広げ、その龍は再び上空へと飛翔する。

スターダスト・ドラゴン

ATK2500

「俺はこれでターンエンド！」

遊星&ジャック（遊星）

LP4000

手札3枚、2枚

『スターダスト・ドラゴン』《攻》

『ジャンク・ウォリアー』《攻》

伏せ2

遊星のターンが終わり、遊戯は改めて考えさせられていた。

（遊星……ジャック……。あの二人のコンビネーションは完璧だ……。俺達も力を合わせなければ勝つことはできないだろう……だが……）

遊戯は横目で海馬を見る。

（海馬の事だ……一人で勝つことしか考えていないはず……）

だがそれでも遊戯は覚悟する。

「（絶対に“結束の力”で勝って見せる！）俺のターン！」

遊戯&海馬（遊戯）

LP2600

手札5枚、2枚

伏せ1

「俺は手札から『死者蘇生』を発動！この効果によって、墓地からモンスター1体を特殊召喚できる！」

遊戯が指定したモンスターは

「蘇れ！『磁石の戦士』！」

磁石の戦士

DEF1800

「さらに俺は手札から魔法カード『磁場発生・マグネット・フィールド』を発動！このカードは自分フィールド上に『磁石の戦士』と名の付いたモンスターが存在するときのみ発動でき、自分のデッキから『磁石の戦士』と名の付いたモンスターを2体まで特殊召喚できる！」

遊戯の場が強力な磁場に包まれ、その磁力により、遊戯のデッキから2体のモンスターが引き寄せられた。

「いでよ！『磁石の戦士』、『磁石の戦士』！」

磁石の戦士 は黄色の丸い身体にU字磁石のような角や手を装備していた。一方の磁石の戦士 はカクカクした灰色の身体に、それと同じような色をした剣を持っている。

磁石の戦士

ATK1700

磁石の戦士

ATK1400

「さらにこの磁石の戦士達は合体することにより、更なる力を得る！磁石の戦士達よ合体しろ！」

磁石の戦士達の身体が分解されたかと思うと、その分解されたパーツたちは一カ所に集まり、別のモンスターの姿を形造っていく。

「現れる！『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』！」

磁石の戦士マグネット・バルキリオン

ATK3500

「攻撃力3500か……。なかなか厄介だな」

「フン、あんなモンスター、オレが粉碎してやるわ！」

遊戯はフツ、と笑い手札のカード一枚をディスクにセットする。

「魔法カード『古のルール』発動！この効果により、手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚できる！」

「ツー！」

「現れよ『ブラック・マジシャン』！」

黒き魔導服を着た魔術師が遊戯の場に降り立つ。

ブラック・マジシャン

ATK2500

「行くぜ！マグネット・バルキリオンで『スターダスト・ドラゴン』に攻撃！マグネット・セイバー！！」

勢いよく地面を蹴り、剣を突き出すマグネット・バルキリオン。がしかし、突き出した剣は様々なガラクタでできた案山子によって阻止された。

「なっ、そのカードは」

「罠カード『くず鉄のかかし』！」

先程、遊星が伏せていたカードは攻撃を阻止し、使用しても再び使用できる“くず鉄のかかし”だった。そのカードの厄介さはこの場の遊戯、ジャックは知っている。

「くっ、『くず鉄のかかし』はモンスターの攻撃を防ぐカードだったな……」

「そうです。そして使用したこのカードは発動後、墓地へは行かず、再びセットされる」

かかしはカードへ戻り、そのカードは伏せ表示に戻る。

「だが、俺にはまだ『ブラック・マジシャン』が残っている！」

ブラック・マジシャンが跳び上がり、魔力を杖に集中させる。

（『ジャンク・ウォリアー』か……！？）

「行けッ！『ブラック・マジシャン』！『スターダスト・ドラゴン』を攻撃！」

「『なっ！』」

黒い魔法の球体がスターダスト・ドラゴンに向かう。

「遊戯！貴様、何故『ジャンク・ウォリアー』に攻撃しないのだ！  
！」

憤慨した海馬の言葉を受けながらも遊戯は突き進む。  
ある考えを持ちながら。

「迎え撃て！『スターダスト・ドラゴン』！」

お互いのモンスターの攻撃力は互角。  
2体のモンスターは破壊されるはずだった。

「！！！」

遊星はある異変に気づく。

そつ、スターダスト・ドラゴンが攻撃しないのだ。

「なっ……！！！」

ブラック・マジシャンの攻撃がスターダスト・ドラゴンに命中。  
スターダスト・ドラゴンは悲鳴にも似た雄叫びをあげながら、消滅  
していった。

その光景にその場にいた遊戯、そしてもう一人以外のメンバーが驚  
く。

「なっ、何故だ！」

「相打ちにならない……？」

「！！！」

遊星はこのトリックのタネに気付いたらしい。

その様子を見た遊戯は種明かしを始めた。

「俺が発動させたこのカードによって遊星の『スターダスト・ドラゴン』は動けなくさせてもらったぜ」

遊戯達の場に伏せてあった1枚のカードが表になっていた。

「海馬が伏せていた『エネミーコントローラー』のコマンドに“相手フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更できる”というものがある。その効果によって『スターダスト・ドラゴン』を攻撃表示から守備表示に変更した」

スターダスト・ドラゴン

ATK2500

DEF2000

「それで俺の『スターダスト・ドラゴン』は反撃できず、破壊された……という訳ですか」

「ああ、そうだ」

そんなやり取りの中、海馬は遊戯の行動を忌ま忌ましく思っていた。

（くっ、遊戯め……余計な事を……！）

海馬は自分のカードを人に使われるのが癪だったのだ。

それを遊戯に勝手に使われたことに海馬は苛立ちを感じていた。

（まあいい……俺の作戦に問題はない）

「俺はこれでターンエンドだ」

遊戯＆海馬（遊戯）

LP 2600

手札0枚、2枚

『ブラック・マジシャン』《攻》

『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』《攻》

「オレのターン！」

遊星＆ジャック（ジャック）

LP 4000

手札3枚、3枚

『ジャンク・ウォリアー』《攻》  
伏せ2

「俺は『ダーク・リゾネーター』を召喚！」

音叉を持った小さい悪魔が現れる。

ダーク・リゾネーター

ATK 1300

「遊星！貴様のモンスターを使わせてもらっ！」

「ああ！」

「レベル5『ジャンク・ウォリアー』にレベル3『ダーク・リゾネーター』をチューニング！」

ダーク・リゾネーターが音叉を鳴らすと3つの輪に変化し、ジャンク・ウォリアーを包み込む。

「王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

ジャンク・ウォリアーの身体が光となり、その光から悪魔の龍が姿を現す。

「我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK3000

「遊星の『スターダスト・ドラゴン』の次はオレの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を倒してみろ！！」



## 14章・5・終結（前書き）

最近、更新が遅くなるな……（泣）  
読者の皆さん、すいません！

あ、今回の話についてですが、オリカが多めになりました！  
オリカ嫌いな人はすいません！

あと、もう一つの謝罪。

kouさんに投稿していただいたオリカですが、このデュエルでは  
使用出来ませんでした！

ですが、次の次の章から始まるストーリー内で使わせてもらいます  
ので、これからもよろしくお願いします！

……謝ってばかりだ、今回（泣）

## 14章・5・終結

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！『ブラック・マジシャン』を攻撃！アブソリュート・パワーフォース！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの拳に炎が宿り、その拳でブラック・マジシャンに殴り掛かる。  
ブラック・マジシャンは力の限り抵抗したが、力で敵うはずもなく、そのまま炎に包まれ、破壊された。

「くっ！」

遊戯&海馬（遊戯）

LP 2600 2100

「オレはカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

遊星&ジャック（ジャック）

LP 4000

手札3枚、1枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』《攻》  
伏せ3

「俺のターン！！」

遊戯&海馬（海馬）

LP 2100

手札0枚、3枚

『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』《攻》

「俺は『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』の効果を発動！」

「海馬……？」

「フン、自惚れるな。貴様と組む気はない。ただ利用するだけだ……！『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』の効果でこのカードを墓地に送り、墓地から『磁石の戦士』、『磁石の戦士』、『磁石の戦士』をそれぞれ1体まで特殊召喚できる！」

磁石の戦士マグネット・バルキリオンの身体が再び分解され、それぞれのパーツが集まり、三体のモンスターとなる。

「来い！、、……！！！」

磁石の戦士

DEF 1700

磁石の戦士

ATK 1700

磁石の戦士

DEF 1800

その三体が召喚された後、海馬が一枚のカードを掲げる。すると、辺りに暗雲が広がり、雷が降り注ぐ。

（こ、この光景は……っ！！）

ジャックは知っていたこの光景を作り出す、一枚のカードを。

「、、の三体を生贄に捧げ、『オベリスクの巨神兵』を召喚

「!!」

三体の戦士達が消え、地響きを轟かせながら青き身体の巨人が赤い眼を光らせ、雷とともに現れる。

オベリスクの巨神兵

ATK4000

その圧倒的な威圧感に遊星が一步退いた。

「こつ、これが三幻神の内の1体、『オベリスクの巨神兵』……!!」

「行くぞ!『オベリスクの巨神兵』!!あの悪魔の龍を粉碎せよ!ゴッド・ハンド・クラッシャー!!」

オベリスクの巨大な腕がレッド・デーモンズ・ドラゴンに向かう。

「リバーカードオープン!『くず鉄のかかし』だ!!」

「無駄だ!オベリスクに罠カードは効かん!!」

「くつ!もう一枚のリバーカード」

「フハハハ!無駄だといっている!!」

オベリスクの攻撃の影響で辺りに爆風が巻き起こる。

この状況を見れば、レッド・デーモンズ・ドラゴンは破壊された、と誰もが思った。

が、爆風によって巻き上げられた砂埃の中に、二つの眼が鋭く輝く。

「!!」

「俺が発動させたカードはコイツだ!!罠カード『バスター・モード』!!」

砂煙が消え、赤き鎧に身を包んだ悪魔龍が姿を現した。

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター

DEF2500

「くっ……だが、その程度の守備力ではオベリスクの攻撃に耐えれまい！オベリスク、攻撃だ！！」

オベリスクの拳が再びレッド・デーモンズ・ドラゴンに向かう。

「オレのもう一枚のカードはこれだ！！リバーカード、オープン！！『ハンド・エクステンジ』！！」

「何ッ！！」

「『ハンド・エクステンジ』は一人のプレイヤーを対象に発動し、そのプレイヤーの手札と自分の手札を入れ換える！オレが対象にするプレイヤーは“不動遊星”！！」

ジャックがそう宣言した瞬間、遊星とジャックの手札が消え、新たに遊星に1枚の手札が、そしてジャックには3枚の手札が加わる。そしてジャックは遊星の手札だったカードを確認する。

「遊星！お前ならこのカードを持っていると確信したぞ！」

「ジャック……！」

「オレはこのカードの効果を発動！」

ジャックが一枚のカードを手札から捨てると、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターが動き出し、オベリスクの巨大な手を受け止めた。

「なっ、何ッ！」

「オレが手札から捨てたカードは、遊星の『牙城のガーディアン』  
！！コイツを手札から捨てることで、戦闘する自分のモンスターの  
守備力を1500ポイントアップする！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター

DEF 2500 4000

オベリスクの攻撃力とレッド・デーモンズの守備力が互角になり、  
お互いのモンスターは破壊されずに元の場所へと戻る。

「まさか、そんな方法で防がれるとはな……」

「貴様のやり口など読めている！」

「フン、俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ……」

遊戯&海馬（海馬）

LP 2100

手札 0 枚、0 枚

『オベリスクの巨神兵』《攻》  
伏せ2

（ジャックが俺に託したこのカード……俺はコイツで）

遊星は眼を閉じ、デッキの上から一枚カードをドローする。

「俺のターン……」

遊星&ジャック（遊星）

LP 4000

手札 2 枚、2 枚

『レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター』《守》  
伏せ！

「ジャック！お前のカードを使わせてもらう！1000ライフを払い、俺は手札から魔法カード『バスター・チェンジ』！！」

遊星がカードをディスクにセットすると、レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターの姿が光に包まれる。

遊星&ジャック

LP4000 3000

「『バスター・チェンジ』は自分フィールド上の『ノバスター』と名のついたモンスターを墓地に送り、デッキから同名モンスター以外の『ノバスター』と名のついたモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚できる！俺は『レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター』を墓地に送り」

悪魔龍が姿を消し、新たに星のような煌めきを全身に纏わせた龍が鎧を装着し、遊星の場へと降り立つ。

「『スターダスト・ドラゴン/バスター』を特殊召喚！」

スターダスト・ドラゴン/バスター  
ATK3000

「この効果で特殊召喚したモンスターは効果を発動することが出来ない」

「フン、だが攻撃力3000では俺の『オベリスクの巨神兵』には届かんぞ！」

そう、海馬のオベリスクの巨神兵の攻撃力は4000。スターダスト・ドラゴン/バスターの攻撃力では足りないのだ。だが、遊星の眼は死んでなどいなかった。

「俺は手札から魔法カード『スターダスト・ユニオン』発動！」

場に出されたカードが光り、墓地にいるはずの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が突如として現れたのだ。

「遊星……！」

「『スターダスト・ユニオン』は墓地にいるシンクロモンスターを除外することで、自分フィールド上に存在するレベル8以上の風属性・ドラゴン族モンスターの攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分アップする！」

スターダスト・ドラゴン/バスター

ATK3000 6000

「ジャックの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を除外し、攻撃力を3000ポイントもアップしたというのか！小癪な真似を……！」  
「行くぞ！『スターダスト・ドラゴン/バスター』！！『オベリスクの巨神兵』を攻撃！アサルト・ソニックバーン！！」

スターダスト・ドラゴンの攻撃、シューティング・ソニックより強力な音波がオベリスクの巨体を貫く。

オベリスクは苦しそうなうめき声をあげながら、爆発を巻き起こし、地中へと姿を消していった。

「ぐわあああああ……！」



遊戯&海馬

LP2100 100

「くっ……、オベリスクがやられるとは……」

「海馬……」

「何だ！遊戯！！」

「あの二人を見て、何かを感じないか？」

「何を感じるというのだ！！」

「俺はあの二人から特別な『絆』を感じるぜ」

「何を戯れ事を」

「分からないのか海馬！！このデュエル、俺達も結束しなければ勝つことはできないぜ！」

「何イ……！」

「海馬、今はいがみ合うときじゃない！お前との勝負の決着はバトルシティの決勝でつけてやる！だから、今は俺に力を貸してくれ」

「……フン！！」

二人の会話が終わり、そのタイミングを見計らった遊星がゲームを進行させる。

「俺はこれでターンエンドです！」

遊星&ジャック（遊星）

LP3000

手札0枚、2枚

『スターダスト・ドラゴン/バスター』《攻》

伏せ1

「これが、俺の……俺達のラストターンだ！ドローっ……！」

遊戯&海馬（遊戯）

LP100

手札1枚、0枚

伏せ2

「俺は手札から『強欲な壺』発動！この効果で俺はデッキから2枚  
ドローする！」

遊戯が新たにデッキからカードを2枚ドローし、遊戯の手札は2枚  
となる。

「海馬、お前のカードを借りるぜ！」

「フン、勝手にしろ……」

「フツ、俺はリバーズ罠『モンスター・ミラージュ』を発動！」

遊戯の前に鏡が現れ、その中に三つの首を持った龍の姿が映る。

「『モンスター・ミラージュ』の効果はモンスター1体を宣言し、  
その宣言したモンスターをデッキ・融合デッキから除外することで、  
そのモンスターと同じ名前を持った『ミラートークン』1体を特殊  
召喚する！俺が宣言するモンスターは『青眼の究極竜』！！」

その宣言を聞いた海馬は渋々、融合デッキから『青眼の究極竜』の  
カードを見せ、それを自分のズボンのポケットへとしまふ。そして、  
鏡の中から銀に光るスライムのようなモンスターが現れ、その形が  
変化していき、三つ首の竜、青眼の究極竜の姿を作り出した。

ミラートークン（青眼の究極竜）

ATK0

「再び現れたか！『青眼の究極竜』！！」

「さらにコイツで決める！魔法カード『融合』！！」

「！！！！」

「手札の『カオス・ソルジャー』と『青眼の究極竜』となった『ミラートークン』を融合！！」

空間に出来た渦に遊戯の手札から飛び出した青い騎士、カオス・ソルジャーと青眼の究極竜の姿となったミラートークンが飛び込む。

「我が元へと降臨せよ！俺と海馬の最強の僕！マスター・オブ・ドラゴンナイト『究極竜騎士』！！」

青き騎士のカオス・ソルジャーが乗った青眼の究極竜が、地面を轟かせるほどの雄たけびをあげながら現れた。

究極竜騎士

ATK5000

「『究極竜騎士』の効果！フィールド上に存在するドラゴン族モンスターの数だけ、『究極竜騎士』の攻撃力が500ポイントアップする！！」

究極竜騎士

ATK5000 5500

「さあ、行くぜ！『究極竜騎士』の攻撃！ギャラクシー・クラッシュヤー！！」

「罠カードを発動！『くず鉄のかか」

「そのカードは分かっているぜ！リバースカードオープン！！『冥界との取引』！！」

「『冥界との取引』だと！」

「『冥界との取引』は相手が魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、その発動と効果を無効にし破壊する！」

「なっ……!!」

「だがその代わり、相手の墓地からモンスターを1体、相手フィールド上に特殊召喚するんだ。俺が選ぶモンスターは『レッド・デーモンズ・ドラゴン』!!」

ジャックの墓地から地獄の炎に近い火柱が立ち上り、その火柱から悪魔の姿をした龍が現れる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

ATK3000

「オレの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を復活させるだ……!!?」

「……ハッ!!これの本当の意味は……!!」

「そう、『くず鉄のかかし』を封じ、ドラゴン族モンスターが場に増やすことで、『究極竜騎士』の攻撃力がさらにアップする!!」

究極竜と騎士が放つ虹色の光線がさらに勢いを増し、スターダスト・ドラゴンノバスターに襲い掛かる。

究極竜騎士

ATK5500 6000

究極竜騎士の攻撃がスターダストをかき消し、その衝撃が余波が遊星とジャックに直撃した。

「ぐううううう!!」

「くっ……！！」(さすがです、遊戯さん……！ ……でも、きっと  
いつか )「

遊星&ジャック

LP30000

## 15章・未来からの警鐘（前書き）

やっと、新章へ突入することができるぞおおおお！

ちょっと、ストーリーに無理矢理感がありますが、暖かい目で見て  
やってください！（笑）

## 15章・未来からの警鐘

「ふう……完敗です、遊戯さん」

「いや、遊星もかなり強かったぜ」

「フン、次こそは本気の貴様に勝ってやる」

「フ……」

遊戯&海馬、遊星&ジャックのタッグデュエルが終了し、敗北した遊星とジャックは遊戯、海馬の二人にパズルカードを1枚ずつ渡した。

そして、デュエル終了を見届けたギャラリー……といっても城之内やクロウ、十六夜といったメンバーなのだが、そのメンバー達が遊星達の元へとやって来る。

「よし、決勝の場所には」

と遊戯が告げた瞬間、遊戯の千年パズルが光りはじめる。

「なっ、千年パズルが」

遊戯の声とともに光が消えると、遊戯の雰囲気が微妙に変化していた。

「ゆ、遊戯さん……？」

「おい、遊戯どうしたんだ？」

雰囲気が変わった遊戯に十代、城之内が話しかけた。

「くっ……すまないが、今はゆっくり喋っている暇はないんだ……」

「！」  
「「！？」」  
「遊星……！」  
「何ですか、遊戯さん！？」  
「今、君達の時代に危機が迫っている……！」  
「なっ……！」  
「危機つてあの崩壊の事じゃ」  
「いや、違うんだ……君達がいた時代の1年前なんだ……！」  
「「何！？」「」」

とある6人の人々は無惨にも崩れ去った水族館に来ていた。

「ちよつと本田！城之内が水族館で危ないって言うから来たのにいないじゃない！」

少し苛立った声をしているのはモデル級のボディラインを持った金髪女性 孔雀舞だ。

「おかしいな……グールズの手下の話じゃ、水族館って言うてたのにな……なあ、御伽！」

「僕に振られてもね……でも、これだけ崩壊してるんだし、これは城之内君に」

御伽と呼ばれた黒髪の少し細身な青年は、本田という角刈りにした黒いジャケットを着た青年に突然、口を手で塞がれた。

（何するんだ、本田君！）  
（バカッ！静香ちゃんに聞こえたらどうするんだ！）



本田が目線を向けた方向には女性が立っており、その容姿は少し茶色がかったロングヘアーに、顔立ちは幼く美しいのだが、顔は眼を覆うように包帯が巻かれており、あまり分らない。

「え……？お兄ちゃんがどうかしたんですか……？」

「いやいや！城之内はどこに行ったのかな……と思ったただけだぜ！？」

「そ、そくだよ静香ちゃん！ホント、どこ行っただろうね！」

焦りながら答える二人に、舞は「バカ……」と呟いていた。

「でもさ、城之内もだけだよ……」

「あの二人も何とかしないとね……」

本田と御伽が目を向けた先には二人の女性が口喧嘩をしていた。

「何で貴女までついて来てるのよ！」

一人の女性は遊星達をネオドミノシティの崩壊から救出した御影だ。

「ジャックとずっと一緒にいるのは私なんだから！」

もう一人はギャグ漫画にでも出てきそうな丸眼鏡をかけたロングの黒髪の女性で、名前はカーリー渚という。

「あの二人……どうしようか」

「そうだね……」

悩む男二人に舞が一言告げる。

「城之内なら大丈夫よ！私らは先に決勝会場に向かうとしましょ！」  
「は、はい……」

舞、本田、御伽、静香、御影、カーリーの6人は舞のオープンカーに乗り込み、全員が乗り込んだ事を確認した舞は車を発進させたのだった。

「俺達がいた時代の1年前……？」

「俺達の時代の1年前となると……あのダークシグナーがいた時代ではないか！」

「そうだ……そいつらがいる時代にゼウシスが何かを始めようとしているらしい……」

遊戯の言葉に動揺する遊星、ジャック、十六夜、龍亜、龍可、クロウに他のメンバーの城之内、十代、杏子達が不思議そうな顔で見る。

「おい、遊星……“ダークシグナー”ってなんだ？」

「ダークシグナーとは未来で現れた冥界の力を司る者達の事です」

「未来……？遊星達は未来から来たのか？」

「はい、俺達はこの時代の遊戯さん達に危機が迫ると聞いて、未来から来たんです」

「み、未来か……、ま、まあ信じられねえような気がするけど、実際に“シンクロモンスター”って言う見たことがねえモンスターを使うしな！ホントなんだろ！」

城之内の言葉の後に遊戯が続く。

「……ところで海馬、お前の会社の技術力で、光速の速さで飛行出来る乗り物を造れないか……？」

遊戯の言葉に海馬は待つてたかのように答える。

「既に光速の速度で飛行できる機体は完成している……。だが、人間が莫大なGに耐えられるようになる装置がない。今、その機体に搭乗し飛行すれば、俺達がGに耐えれず、死に至る……」  
「なっ、何いっ！」

その海馬の返事に城之内がゾツとした顔になる。だが、遊戯は違った。

「それは大丈夫だ。遊星達シグナーがどうにかしてくれるぜ」

「何っ……？」

「とりあえず、その飛行機に乗ることにしよう」

「………フン、その機体は決勝会場にくる事になっている」

「なら、決勝会場へ向かおう」

遊戯はその言葉と共に歩きはじめた。が、城之内達に一つの疑問が宿る。

「おい、遊戯！お前、決勝の場所分かるのかよ！？」

「ああ、俺は一度体験しているからな。この“バトルシティ”を…

…！」

「……？」

その答えの意味がわからなかったが、城之内達は黙って遊戯について行くことにした。

（まさか、あの遊戯さんは）

遊星も胸に何かがつっかかりながらもついていった。

決勝会場についた遊星達。

そこには様々な人々が集まっていた。

『あら、城之内じゃない！』

その人々の中の一人、金髪の女性が城之内に向かって走ってくる。

「舞！お前も決勝に進出したのか！」

「ええ！……でも城之内、アンタ無事だったのね！で、その人たちは……？」

舞が指差した方向にいるのは遊星達だ。

分らないのも当然。遊星達と舞は接点が全くなかったからだ。

「ああ、コイツは不動遊星とその仲間達で、未来から来たらしい！」  
「未来から！？」

舞が遊星達を不審な目で見る。

「ま、まあとりあえず俺達の仲間だ！」  
「ふうん……」

他に角刈りにしている青年と両耳にサイコロのピアスをした青年、そして眼に包帯を巻いた女性は舞と話している城之内に気付いたの

か、城之内に向かって走ってくる。

「城之内！」

「城之内君！」

「お兄ちゃん！」

「おお！本田、御伽、静香！！」

走ってきた本田と静香は城之内に抱き着いた。

「ど、どうしたんだよ本田、静香！　ってか、何で静香が！？」

「それは俺達が連れて来たんだ！　静香ちゃんが俺前に勇気を貰ったから、そのお返しがしたいって言っただけ！」

「そ、そうだったのか……！　で、何で二人とも抱き着いてくるんだよ！」

「それは城之内君がグルズに襲われて危ないって聞いたから、僕達心配していたからだよ」

「心配してくれてサンキューな！　ここにいる遊戯と遊星が俺の事を助けてくれたから、大丈夫だぜ！」

近くにいた遊戯が笑みを浮かべる。

「とりあえずみんな、この飛行船に乗るとしよう」

遊戯の言葉にみんな賛同し、飛行船の搭乗口へと向かった。

すると、搭乗口前にはサングラスをしたオールバックの男性が立っており、先に行った海馬はそこでパズルカードを見せていた。

『おい！お前らもさっさとこいよ！』

飛行船の中から遊星達に向かって叫んでいる少年がいた。

両手で重たそうなジュラルミンケースを持っているが、顔に苦しそうな表情は見られない。

「よし！いこうぜ！」

城之内の言葉を皮切りに遊戯、舞、城之内の順にパズルカードを男性に見せ、飛行船に乗り込んで行く。

そして杏子、本田、御伽達が乗り込もうとした時、黒スーツの男に止められた。

「パズルカードを見せてください」

「私達、パズルカードを持ってないんですが……」

「それではご乗船することはできません」

「なんでだよ！俺達観戦者として入りたいんだぜ！？」

「なりません」

「くっ……」

そんなやり取りを見ていた先程の少年が、飛行船の中から黒服の男性に向かって、こう声を掛けた。

「俺だってパズルカードは持ってないんだ。そいつらも乗せてやれ！」

「で、ですが、モクバ様」

「そうそう、って言うことでお邪魔しまーす！」

モクバの言葉に調子づいた本田が飛行船に乗り込み、続いて杏子、御伽、静香と乗り込んで行く。

そして、次は遊星達の番となった。

「パズルカード6枚、これでいいか？」

遊星の手には6枚のパズルカードが握られていた。  
これには男も何も言えず、遊星の乗船を許可する。

「俺達は観戦だ！」

「先程の方々の乗船にも許可が出たので、乗船を許可する」

許可を貰ったジャック、十六夜、龍可、龍亜、クロウ、カーリー、  
御影、十代も飛行船へと乗り込むのだった。

20分後、離陸のアナウンスと共に飛行船が飛び立つ。  
一方、途中で遊星に用意された部屋ではとある人物達との再会が  
あった。

「鬼柳達もこの飛行船に乗り込んだのか」

「ああ！黙ってただけだな！」

他の牛尾やミステイ、ブルーノを含む数名のデュエリスト達は渋々  
付き合ったみたいなの顔をしていたが、鬼柳は全くそんな事、気にし  
ていなかった。

「まさか、お前達がこの時代に来ているとはな」

「そうなんだよ！やっとな『チームサティスアクション』再結成だ  
ぜ！」

「もう勘弁してくれ……」

他にも十六夜とミステイ達の会話があったり、ボマーが龍亜、龍可  
と遊んでいたりと、皆、パーティ気分だ。遊星の部屋で賑わっている  
と、とあるアナウンスが入る。

『不動遊星、ジャック・アトラス、十六夜アキ、クロウ・ホーガン、龍可、今名前を呼ばれた者は天空デュエル場に来るように』

呼ばれた5人は不思議そうに首を傾げながら、とりあえず5人は部屋を出て、天空デュエル場に行く事にした。

天空デュエル場。

ここは野外のため、風が突風のように吹きすさぶ。

そんな場所にシグナー5人が、遊戯と海馬によって集められていた。

「俺達は何をするんだ？」

「君達にはここでシグナーの龍を呼んでほしい」

遊戯の思いがけない言葉にシグナー5人に動揺が走る。

「遊戯さん、何故俺達シグナーの事を知っているんですか？」

「すまない、今は話すときじゃないんだ……だが、頼む！ゼウシスの野望を止めるためにも、俺に力を貸してくれ！」

遊星は他の4人を見て、そして決意する。

「やります！行くぞみんな！」

「おおっ！（ええっ！）」

遊星達はそれぞれカードを取り出し、天に掲げる。

「飛翔せよ！『スターダスト・ドラゴン』！！」



「我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「舞い上がれ！『ブラックフェザー・ドラゴン』！！」

「咲き乱れよ！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

「降誕せよ！『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』！！」

それぞれの龍が暗い雲の中から現れる。

5体の龍が出現した後、雲が赤く光り、その光は巨大な龍を形作っていく。

「あ、あれは！」

「赤き龍！！」

赤き龍が現れたと同時に遊戯が叫ぶ。

「海馬今だ！この飛行船の速度をMAXに！！」

「俺に指図をするな！モクバ！！この飛行船、バトルシップの速度を全速力にしろ！！」

『了解、兄さま！！』

海馬のバッチから聞こえてくるモクバの返事とともにバトルシップの速度が上がる。

そして、バトルシップの速度が最高点に到達した時、赤き龍と共にバトルシップの姿が消えたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7361/>

---

遊戯王5 D's - 過去を護る者 -

2010年10月30日06時02分発行